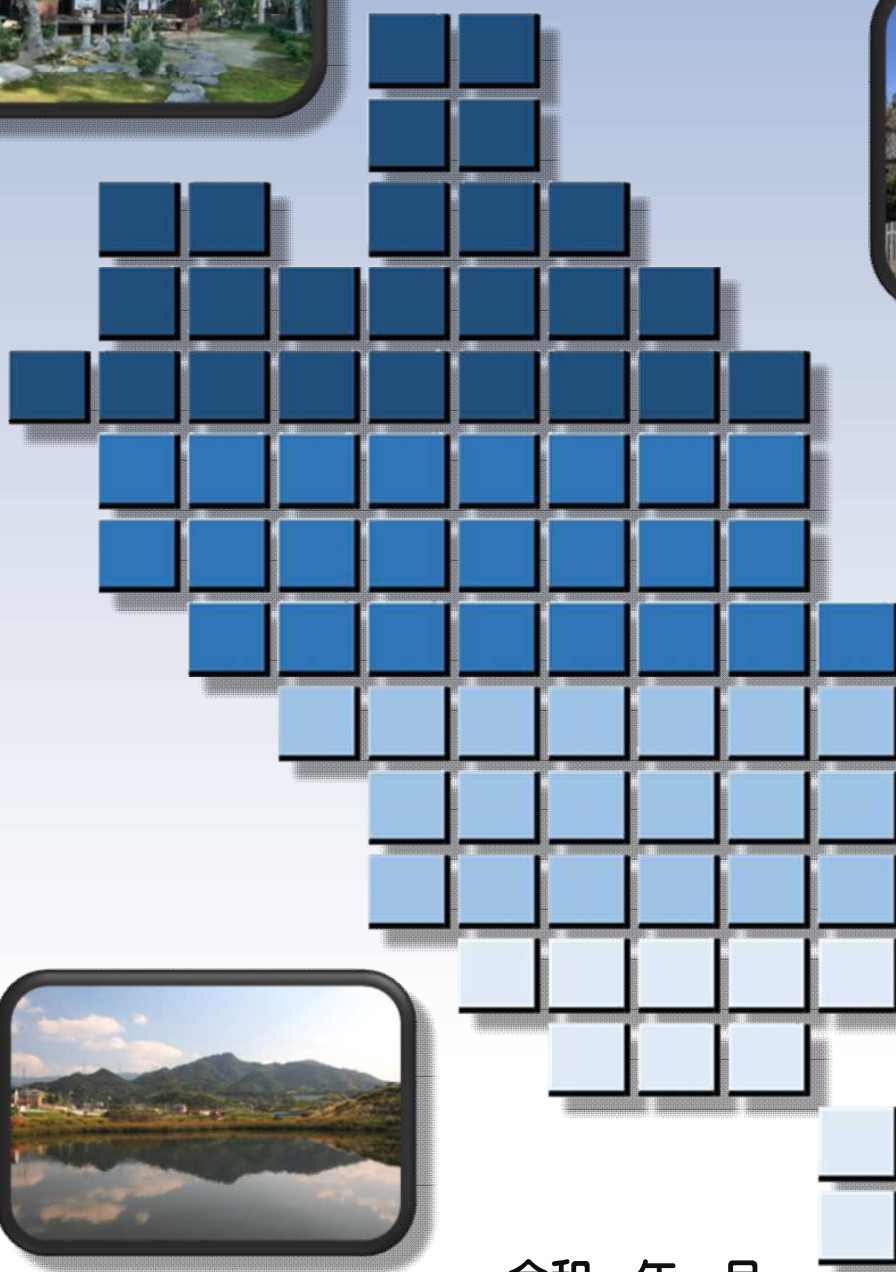


熊取町文化財保存活用地域計画 (案)



令和 年 月
熊取町教育委員会

はじめに

熊取町は、豊かな自然と古くから受け継がれてきた歴史文化の息づく町です。町内には、先人たちが守り伝えてきた貴重な文化財が点在しており、それらは熊取のアイデンティティそのものであり、私たちの誇りです。

文化財保護法の一部改正に伴い、この度、本町では「熊取町文化財保存活用地域計画」を作成いたしました。本計画は、単に文化財を保存するだけにとどまりません。地域の宝である文化財を、まちづくりや観光、教育といった様々な分野と連携させ、次世代へと着実に継承し、さらに活用していくための「未来への指針」です。

現在、少子高齢化やライフスタイルの変化により、地域社会のあり方は大きな転換期を迎えています。こうした中で、文化財が持つ価値を再認識し、それを地域の活力としていくことは、本町の持続可能なまちづくりにおいて極めて重要な意義を持ちます。文化財を通じた地域コミュニティの活性化と住民の皆様へ熊取への愛着を深めてもらうことにより、「熊取らしさ」を未来へつなぐこと、それが本計画の目指す姿です。

本計画の作成にあたりましては、文化財保護審議会をはじめ、地域住民の皆様、関係団体の皆様から、多大なるご支援と貴重なご提言を賜りました。日頃より、それぞれの地域において文化財の保護・継承・活用にご尽力いただいている皆様の、献身的な取り組みに深く敬意を表し、心より感謝申し上げます。

この計画は、作成して終わりではありません。ここからがスタートです。今後とも、行政のみならず、地域社会、そして未来を担う子どもたちと共に、手を取り合って「文化財の守り手」を広げていく所存です。この計画が熊取の歴史文化を未来へつなぐ羅針盤となり、本町の発展に大きく寄与することを願っております、皆様のより一層のご理解と、温かいご協力を賜りますようお願い申し上げます。

令和 年 月

熊取町教育長 吉田 茂昭

例 言

1. 本書の記述は、原則として常用漢字・現代かなづかいを用いました。なお、地名、人名、専門用語、固有名詞にはこれによらないものがあります。
2. 本文に挿図として掲載した写真のタイトルの後ろのカッコ書きは写真を撮影した年代を示しています。
3. 年号は、原則として和暦年を用い、() 内に西暦年を付しました。
4. 専門用語や固有名詞、難読漢字には、適宜ふりがなを付しました。ただし、いくとおりの読み方があるものについては、そのうちの一つを示しました。
5. 記述にあたって、次の用語については、適宜略称を用いています。

重要文化財 → 重文

熊取町文化財保存活用地域計画 目次

序章 はじめに	1
1. 計画作成の背景と目的	1
2. 計画期間	1
3. 計画の位置づけ	1
4. 計画の作成体制と経緯	5
5. 本計画における「歴史遺産」の定義	5
第1章 熊取町の概要	7
1. 自然的・地理的環境	7
2. 社会的状況	11
3. 歴史的概要	18
第2章 熊取町の文化財の概要	29
1. 指定等文化財の概要	29
2. 未指定文化財・その他の歴史遺産の概要	35
3. 日本遺産	42
4. 近代化産業遺産	43
5. くまとり世間遺産	44
第3章 熊取町の歴史文化の特性	45
1. 熊取谷の政治・経済・文化を支えた中家と降井家の歴史文化	45
2. 水とともに生きてきた人々の歴史文化	46
3. まちの発展を支えた繊維産業の歴史文化	47
第4章 文化財の把握調査	48
1. 既存の文化財の把握調査の概要	48
2. 調査の内容	50
3. 文化財の把握調査の状況	54
第5章 文化財の保存と活用に関する将来像	55
1. 将来像	55
2. 文化財の保存・活用に関する方向性	56
第6章 文化財の保存・活用に関する課題・方針	57
1. 文化財の保存・活用に関する課題	57
2. 文化財の保存・活用に関する方針	60
第7章 文化財の保存・活用に関する事業	63
1. 「歴史文化を守り伝える」に関する事業	63
2. 「歴史文化を活用する」に関する事業	64
3. 「歴史文化を継承する仕組みをつくる」に関する事業	64
第8章 文化財の保存・活用の推進体制	65
1. 本計画の推進体制	65
2. 災害等の発生時の推進体制	67
資料編	69

序章 はじめに

1. 計画作成の背景と目的

熊取町は、大阪府南部の泉南地域に位置し、町域の東・西・南の三方は総面積の約3分の2を占める山地と丘陵に囲まれ、豊かな自然環境に恵まれています。また中世からその地名が変わることなく現代まで固有の歴史文化を築いてきました。近世には、岸和田藩の七人庄屋をつとめた中家、降井家の両家を中心とした歴史文化を築き、近代に、まちの発展を支えた繊維産業の隆盛など、時代を経るごとにいくつもの要素を織り成した独自の文化と景観を形成してきました。そのような環境のもとで多くの文化財が継承されています。

一方で、昭和40年代以降はニュータウン開発などが進み、農村型集落から大都市近郊住宅都市へと発展を遂げるにつれ熊取の景観が大きく変貌してきました。さらに近年は、少子高齢化が進むとともに人口減少時代を迎え、文化財や歴史文化に対する関心や愛着が希薄なものになるとともに、これまで文化財や伝統を継承してきた地域の担い手が不足してきています。

このような状況の中、先人たちから引き継がれてきた地域の財産である文化財を未来へ確実に継承していくために、社会環境の変化に関わらず守り、伝えていく仕組みを確立していくことが重要です。そのために文化財に対する住民の関心を高め、郷土愛を育むことで、文化財の継承の担い手を増やし、地域、所有者、専門家、関係団体、行政が連携して地域総がかりで文化財の保存・活用の仕組みを構築し、文化財を活かした観光振興など、将来にわたり活力ある地域社会を維持することを基本方針とし、文化財の保存・活用を計画的に推進していくことを目的として「熊取町文化財保存活用地域計画」（以下、「本計画」という。）を作成します。

2. 計画期間

本計画の計画期間は、令和9年度（2027）から令和18年度（2036）までの10年間とします。なお、この事業の進捗状況は毎年度確認し、計画内容に影響する社会情勢の変化や上位計画の変更や改定などがあった場合は、必要に応じて計画の見直しを行うこととします。

また本計画の変更については、軽微な変更の場合は大阪府及び文化庁に情報提供を行い、軽微な変更にあたらぬ「計画期間の変更」、「町域内に存する文化財の保存に影響を与えるおそれのある変更」及び「計画の実施に支障が生じるおそれのある変更」を行う場合は、文化庁長官の変更認定を受けるものとします。

3. 計画の位置づけ

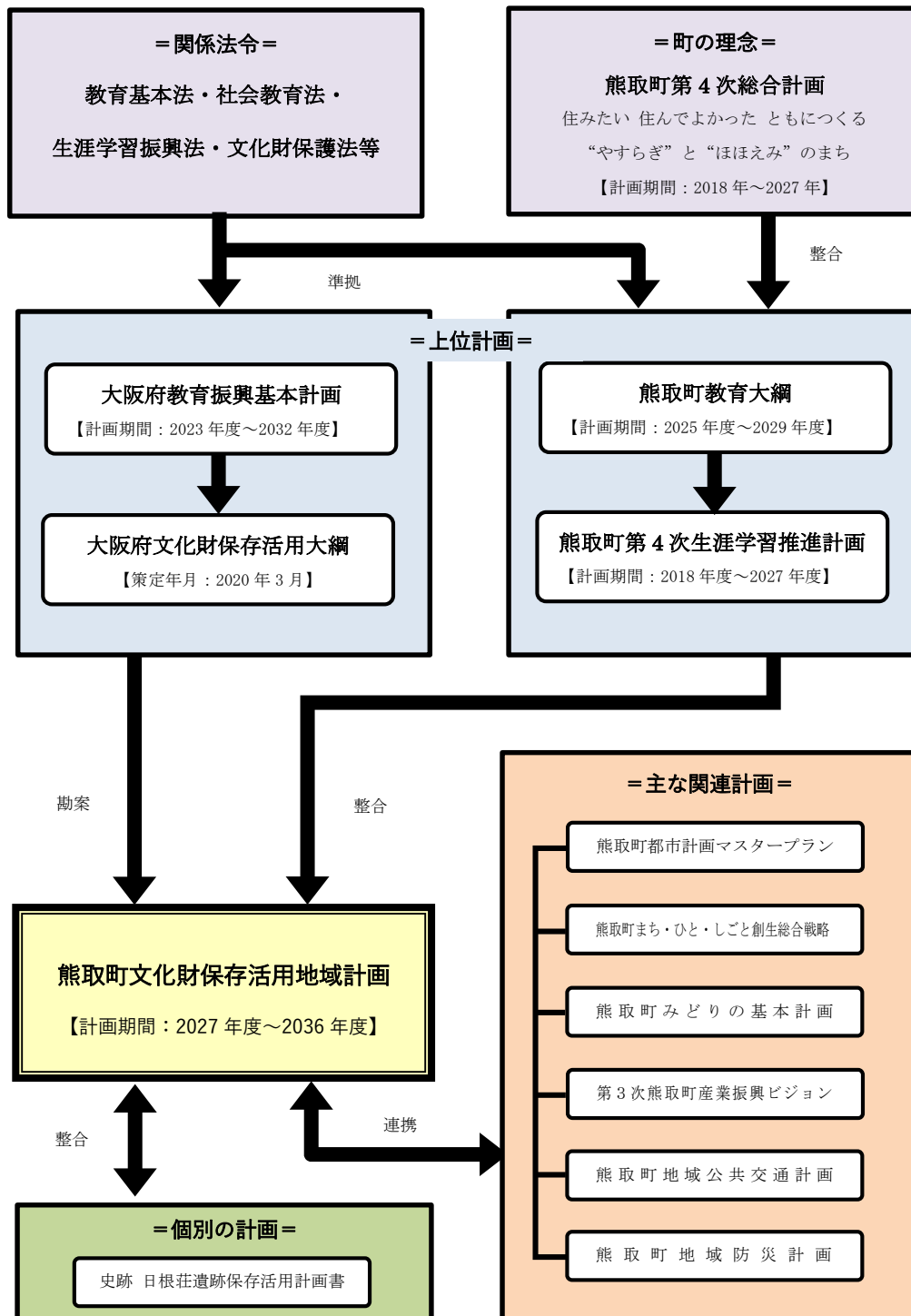
（1）文化財保存活用地域計画について

本計画は、文化財保護法（昭和25年法律第214号）（以下「法」という。）第183条の3に基づき「市町村の区域における文化財の保存活用に関する総合的な計画」として作成します。

また、「大阪府文化財保存活用大綱」を勘案し、本町の総合計画や教育大綱、その他関連計画との整合、連携を図り、実効性のあるマスタープラン、アクションプランとします。

(2) 関連する計画

本計画は、本町の上位計画「熊取町第4次総合計画」や「熊取町教育大綱」に基づき、それに関連する教育、文化、福祉、土地利用、産業、観光、防災、まちづくりなど、様々な分野に係る個別計画及び施策等との整合、連携、調整を図ります。



【大阪府の計画】

①大阪府文化財保存活用大綱

策 定：令和 2 年（2020）3 月

概 要：府域の文化財の保存と活用を体系的、計画的に進めていくためのめざすべき姿を、「歴史が輝き未来と織り成す魅力都市・大阪」とし、「文化財の適切な保存・活用による次世代への確実な継承」と「文化財の適切な保存・活用による継続的な地域の維持発展」を基本理念としています。

府の役割として、①広域的な文化財の保存・活用の施策、②市町村に対する支援（国との調整、専門的・技術的な指導・助言、職員の能力向上、計画策定支援、経費支援等）、③所有者等に対する支援（広域自治体として市町村の実情を踏まえた支援）があげられています。

市町村の役割として、市町村内に所在する文化財にとってもっとも身近な行政組織としての施策の実施、体制の整備、所有者等に対する支援があげられています。所有者の役割として、国・府・市町村の支援を得ながら自ら行う文化財の維持管理、保存修理、公開があげられています。

【上位計画】

①熊取町第 4 次総合計画

策 定：平成 30 年（2018）

計画期間：平成 30 年（2018）から令和 9 年（2027）

概 要：本町の最上位計画で、人口減少社会を乗り越え、将来にわたり活力ある地域社会を維持するため、10 年後に熊取町がめざすまちの姿（将来像）を「住みたい 住んでよかった ともにつくる “やすらぎ” と “ほほえみ” のまち」とし、まちづくりの指針を定めています。

②熊取町教育大綱

策 定：令和 7 年（2025）3 月

計画期間：令和 7 年度（2025）から令和 11 年度（2029）

概 要：本町の教育に関する基本的な計画として、教育の基本的な理念と、教育・学術及び文化の振興に関する施策の取組方針を定めたものです。文化・文化財について、多様化する住民の文化・芸術活動に対応できるよう、地域の歴史資料の収集、保存、活用を図り、各種イベント情報など幅広い情報の収集を行い、より効果的な情報の提供に努めるとともに、伝統文化の継承やまちに愛着がもてる取組みを進めます。

③熊取町第 4 次生涯学習推進計画

策 定：平成 30 年（2018）3 月（令和 5 年（2023）2 月改訂）

計画期間：平成 30 年度（2018）から令和 9 年度（2027）

概 要：「熊取町第 4 次総合計画」や「熊取町教育大綱」の流れを受けて、本町における生

生涯学習の推進を図るための基本的な計画です。多様な学習ニーズに対応した学びの機会を確保し、生涯学習を通じたまちづくりを充実させるため、生涯学習全般を統括する「生涯学習」、文化財や施設を活用した文化活動を担う「文化芸術」、ひまわりドームやスポーツに関する活動を担う「運動・スポーツ」、図書館施設や読書振興を担う「図書館」の4分野を統合した計画です。

【個別の計画】

①史跡 日根荘遺跡保存活用計画書

- 策 定：平成30年（2018）3月（令和6年（2024）3月時点修正）
- 概 要：日根荘遺跡は、中世荘園の姿を今に伝える文化財で、16地点ある指定地が1市1町の広範囲に点在する史跡です。指定地を構成する諸要素の状況を把握し、現状と課題を整理したうえで、保存管理の方針、手法、現状変更等の取扱方針などを定めたものです。

【関連計画】

①熊取町都市計画マスタープラン

- 策 定：平成30年（2018）3月（令和6年（2024）3月時点修正）
- 計画期間：平成30年（2018）から令和9年（2027）
- 概 要：都市計画法に定める「都市計画に関する基本的な方針」で、まちづくりの具体的なビジョンを策定し、地区ごとの整備、開発または保全の課題と方針をきめ細かく定めるものです。景観のまちづくりとして、国の重要文化財の指定を受けている降井家書院、中家住宅、来迎寺本堂や中林綿布工場跡地を活用した熊取交流センターなど、歴史資源を活用して個性ある景観形成を誘導します。

②第3期「熊取町まち・ひと・しごと創生総合戦略」

- 策 定：令和7年（2025）3月
- 計画期間：令和7年度（2025）から令和11年度（2029）
- 概 要：第3期戦略は、「熊取町人口ビジョン」と「熊取町スマートシティ構想」を統合し、人口減少・少子高齢化が進展する中、地方創生の取組みを進め、将来にわたり活力ある地域社会を維持することをめざします。生涯学習の推進として、社会的要請や学習ニーズに応じた講座・学習の機会の提供や、気軽に参加できる文化・芸術の体験会の実施などにより、趣味等をきっかけとした人と人とのつながりを生み出すとともに、生涯にわたり学び続け活躍できる環境づくりに努めます。

③熊取町みどりの基本計画

- 策 定：平成30年（2018）3月
- 計画期間：平成30年（2018）から令和9年（2027）
- 概 要：市町村が主体となって都市における緑地の適正な保全と緑化の推進に関する措置を総合的かつ計画的に実施することを目的とした計画です。町域南部の奥山雨山

自然公園、土丸・雨山城跡などの自然景観の保全を図り、国の重要文化財に指定されている重要文化財中家住宅や熊取交流センター周辺は、歴史的なみどり景観として、保全と活用を図ります。

④第3次熊取町産業振興ビジョン

策 定：令和3年（2021）3月

計画期間：令和3年度（2021）から令和12年度（2030）

概 要：町内産業の継続的な発展を図ることを目的に取組方針を定めたものです。本町の自然や文化等、地域資源の魅力を発掘・発信するとともに、熊取交流センター、重要文化財中家住宅等の既存の観光資源を活かしたイベント等を通じて、認知度を高め、インバウンド振興等、国内外からの交流人口の増加に努めます。

⑤熊取町地域公共交通計画

策 定：令和7年（2025）2月

計画期間：令和7年度（2025）から令和11年度（2029）

概 要：住民や本町に関わる人々にとって利用しやすい、持続可能な地域公共交通体系を構築するための地域公共交通のマスタープランで、観光施設などとの連携について積極的に検討、実行し、地域公共交通が日々の移動手段として選ばれるよう、魅力向上に取り組めます。

⑥熊取町地域防災計画

策 定：令和6年（2024）3月

概 要：災害対策基本法第42条等に基づき、町域に係る防災に関し、防災活動の総合的かつ計画的な推進を図るための計画です。

文化財について、大阪府と連携し、住民にとってかけがえのない遺産である文化財を、災害から保護するため、防災意識の高揚、防災施設の整備等を図ることが明記されています。

4. 計画の作成体制と経緯

本計画の作成にあたっては、学識経験者により構成される法定の熊取町文化財保護審議会に商工関係団体と観光関係団体の代表者2名を臨時委員として加え、さらに大阪府教育庁文化財保護課職員の参画を得て、令和7年度に2回、令和8年度に●回の審議会開催による協議、審議を重ねました。

また住民の意見を幅広く把握し計画に反映させるために、アンケート調査を実施するとともに、熊取町教育委員会定例会などの庁内各種委員会で意見を聴取しました。さらに令和8年●月●日から●月●日に本計画（最終案）に対するパブリックコメントを実施しました。

5. 本計画における「歴史遺産」の定義

法において「文化財」とは、我が国にとって歴史上・芸術上・学術上・鑑賞上等の価値が高い文化的所産で、有形文化財、無形文化財、民俗文化財、記念物、文化的景観、伝統的建造物

群の6類型を定義します。法における保護の対象として、これらに加えて、文化財の保存のために欠くことのできない伝統的な技術または技能である文化財の保存技術、及び主に遺跡など土地に埋蔵されている文化財である埋蔵文化財があります。このうち重要なものについて、法や府、町の条例により指定等の保存の措置が図られています。本計画では、これらの文化財を「指定等文化財」と呼称します。

また前述の文化財（6類型）に該当するものの、国・府・町等においてその価値づけが明確に行われていない、いわゆる「未指定文化財」があります。

本計画では、昔話や伝承、地名、方言、人物にまつわる伝承・事象など文化財としての類型化がなされていなくとも人々の長い営みの中で生み出され、醸成されて今日まで守り伝えられてきた、本町の歴史文化を理解するうえで不可欠であり、町にとって重要で、かつ次世代への継承が必要なものも対象とし、「指定等文化財」、「未指定文化財」をあわせて、すべての有形・無形の文化的所産を「歴史遺産」と位置づけ、計画の対象とします。



第1章 熊取町の概要

1. 自然的・地理的環境

(1) 位置

本町は大阪都心部から33 km、関西国際空港から10 km圏内にあり、大阪と和歌山のほぼ中間地点に位置し、東は貝塚市、西は泉佐野市に接しています。

町域は大阪湾から2.3 km内陸にあり、幅3.5 km、北西から南東方向に長さ7 km、面積は17.24km²で、大阪府全体の0.9%を占めています。

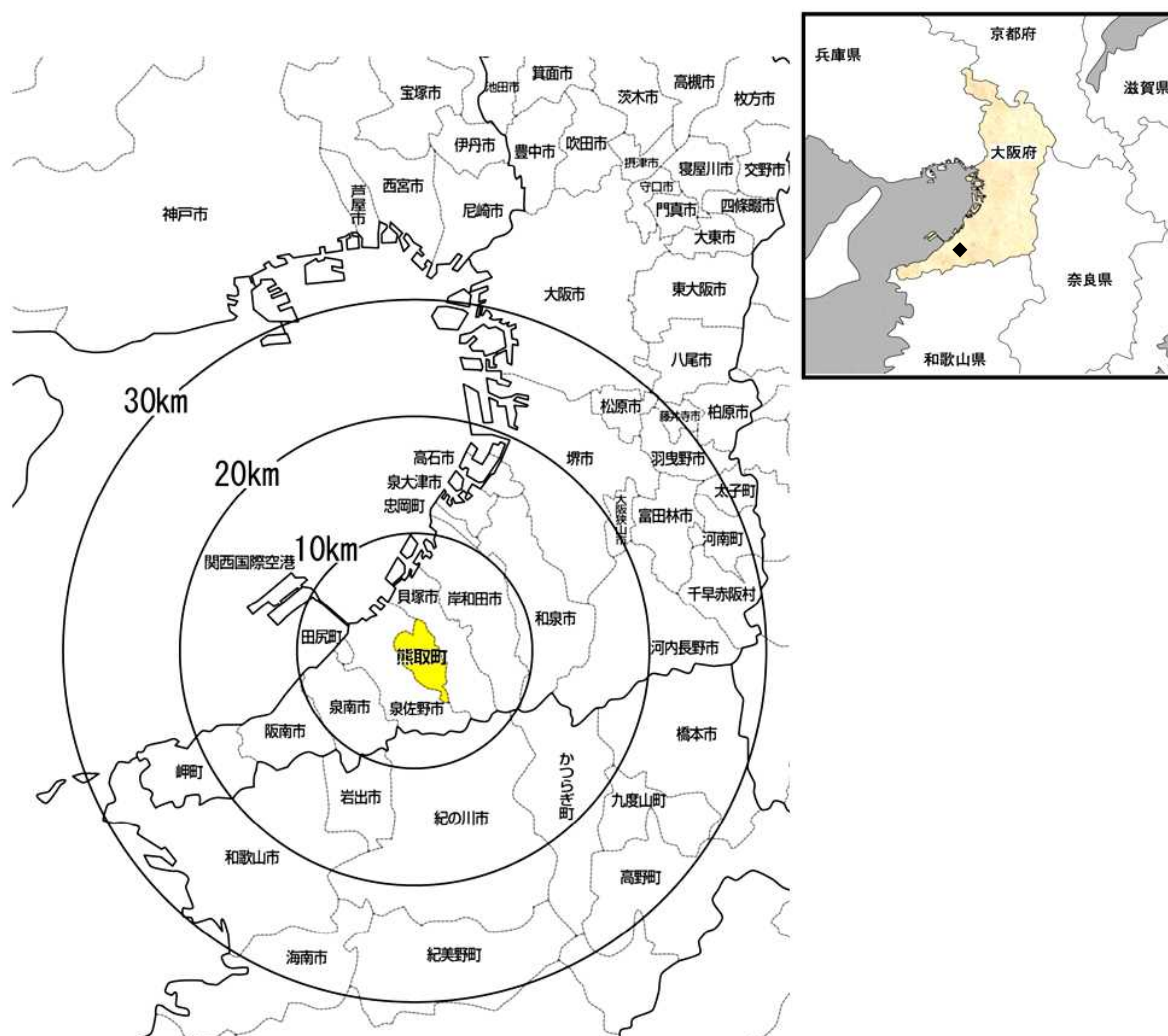


図1 熊取町の位置

(2) 地形

本町の標高は20～406mにわたり、最高地点は和泉山脈内の町最南にある奥山松尾の標高406mです。主な地点の標高はJR熊取駅25m、熊取町役場40m、永楽ダム150mです。丘陵は北西方向にのび、見出川、住吉川、雨山川が南東から北西に流れ、多くのため池が点在し、とくに泉佐野市との境には大きなため池が並んでいます。江戸時代は、三方を丘陵部と山地部に囲まれていたことから「熊取谷」と呼ばれていました。

(3) 地 質

泉南地域は、平野から丘陵部の谷底に低位及び中位段丘層、丘陵部は大阪層群、丘陵の最上面に高位段丘層、山地部に花崗岩類、泉南層群、和泉層群からなる基盤岩類が分布しています。

本町の地質も例外ではなく、中生代の花崗岩類、泉南層群、和泉層群を基盤岩として、それらを新生代の大阪層群、高位段丘堆積層、中位段丘堆積層、低位段丘堆積層、沖積層がおおっています。基盤岩を構成する花崗岩類は水間花崗閃緑岩、成合花崗岩、近木川花崗岩、花崗斑岩からなっています。

水間花崗閃緑岩は和泉市から本町にかけて分布し、本町は分布の西端にあたります。町内では小谷から下高田にかけてみられます。成合花崗岩は朝代付近では東西の走向をもち、北へ76度傾斜した面をもって鉱物が並んでいるようすを観察できます。近木川花崗岩は泉南市から河内長野市にかけて広がり、町内では久保付近に分布しています。花崗斑岩は朝代や永楽ダム東方で泉南層群に貫入してみられます。

(4) 熊取の地名の由来

熊取の地名は、熊取の山の尾根が絵を描く隈取のように見える説、貝塚（現貝塚市）を経て木の間を通过这个の地に行き着くことから「木間通り」がなまって熊取になった説など諸説あります。こうした地名は、江戸時代の熊取の庄屋中左太夫家（降井家）当主中盛彬の著書『かりそめのひとりごと』や『先代考掘略』の中で、詳述されています。

また、『泉州のむかし話』に、「大昔、和泉国で大熊・小熊という盗賊の親子が、多くの手下を抱え、毎晩村里を襲っていました。ある大将が盗賊を退治するよう命じられ、兵糧攻めで大熊は餓死し、小熊は南の方へ逃げ、捕らえられた地域を『熊取』というようになった」とあります。

このように熊取の地名は、諸説あり明確なものはありませんが、周囲を山地・丘陵で「クマドリ」された谷、あるいは盆地地形から名付けられたのではないかと考えられます。

文献に見える熊取の地名の公式の初見史料は、延暦23年（804）10月14日の『日本後紀』に桓武天皇が「熊取野」において遊獵したことが記載されています。また、正和5年（1316）の「日根野村荒野開発絵図」（「九条家文書」宮内庁書陵部蔵）に、絵図の左上隅に「熊取」の書き込みがあり、日根野村北部の丘陵が熊取と接していることがわかります。



図2 空中写真 北から南を望む（昭和61年）

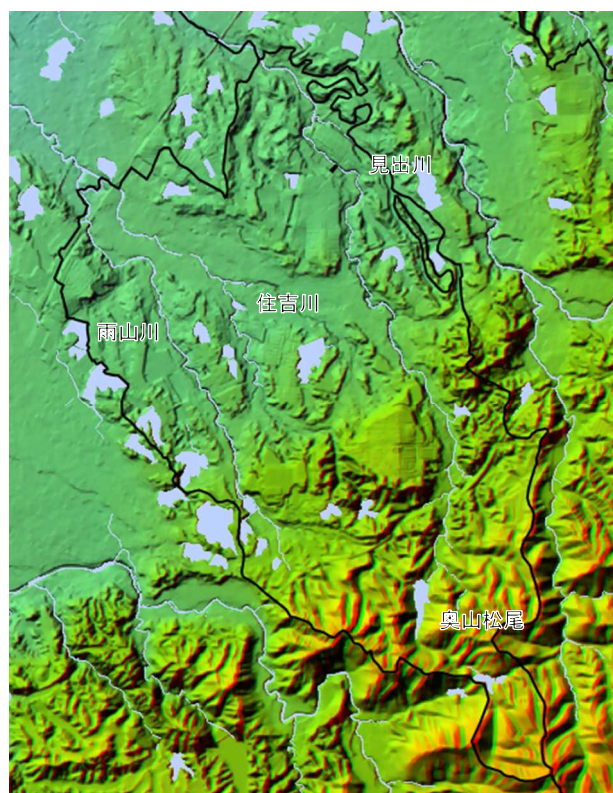


図3 熊取町の地形図（資料：国土地理院）

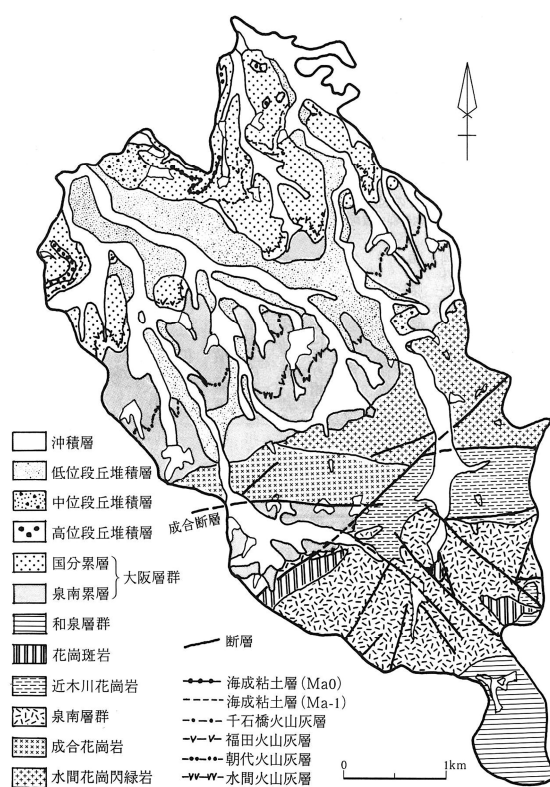


図4 熊取町の地質図（市原ほか（1986）による）

(5) 気 候

本町は瀬戸内気候区内に位置し、夏は高温多雨、冬は低温少雨の気候ですが、夏の多雨は近畿南部や四国南部の太平洋岸側よりかなり少ないのが特徴です。そのため、町内には多くのため池が点在しています。一方、典型的な瀬戸内気候の高松等に比べると多雨です。

瀬戸内気候のもう一つの特徴は、かなり広い内海に接し、しかも盆地地形であるために、強風の回数は少なく典型的な海陸風が顕著なことです。大阪府は西南方向の紀伊水道などで岡山・高松等に比べて強い風の吹く回数がやや多く、本町は府内では他の地域に比べて強い風の回数がかなり多くなっています。

本町の令和5年の年平均気温は16.9℃、年間降水量は1,214.5mm、年間平均風速は2.3m/s、年平均湿度は70%です（「熊取町統計書」）。



図5 ため池群（昭和初期）

(6) 植 生

本町は北西から南東にかけて、しだいに高度が増し、^{あめやま}雨山の312mや^{おくやま まつお}奥山松尾の406m地点において、全域が西南日本の平野部にみられる照葉樹林帯に属し、シイ・カシなどの常緑広葉樹を主とする樹林が成立しています。また、南部の山地はあまり開発が進んでいないためコナラなどからなる林が残っています。

本町は大阪府では南部に位置するため、和歌山県などと共通する暖地性植物が生息し、町内のため池には泉州のため池に多い、アンペライやダンチクなどの水生植物がみられます。

(7) 景 観

本町は肥沃な農地が広がり江戸時代には多くのため池が築かれ、米作や野菜栽培を中心に発達してきました。泉佐野市との境には大きなため池が点在し、長池に「全国ため池百選」に選ばれた^{ながいけ}「長池オアシス」があります。また、熊取を含め泉州は玉ねぎの産地であることから、玉ねぎ小屋が七山や和田に今も数多く残り、七山や成合に田園景観が、また小谷や和田に植木の仮植場が点在しています。山間部には「大阪みどりの百選」に選ばれた^{おくやまあめやま}「奥山雨山自然公園」があるほか、近年は市街地でもホテルの生息が確認されるなど、豊かな自然環境に恵まれています。

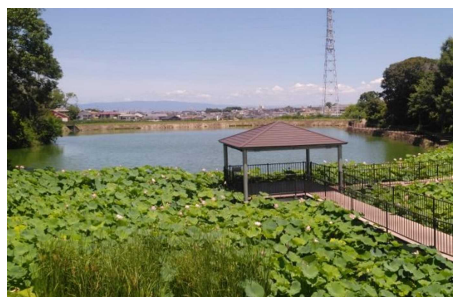


図6 長池オアシス

国道170号沿いには江戸時代に建てられた^{ふるいけしやいん}降井家書院（国指定重文）や、^{なかけじゅうたく}中家住宅（国指定重文）、^{よしもとけ}義本家長屋門など、歴史的な建物が残っています。町内には旧街道である^{こかわ}粉河街道が通り、朝代に粉河街道の一里松と呼ばれた松の石碑があるなど、昔の街道の面影を感じ取ることができます。本町の中心に位置する五門には中家住宅に近接して綿布工場をリノベーションした熊取交流センターがあり、周辺は旧家も残る歴史景観を形成しています。

2. 社会的状況

(1) 人口動向

令和8年(2026)8月の本町の人口は●●●人となっています。大正9年(1920)、国が初めて人口の悉皆調査として実施した「国勢調査」では5,352人でした。1万人を突破するのは昭和35年(1960)の第9回国勢調査で、この時期、本町の人口は基幹産業である繊維・タオル等の工場が数多く設立されたことに伴い、漸次人口は増加しています。

その後、高度経済成長によって宅地の需要が増したことで、大阪都市部のベッドタウンとして注目され、昭和45年(1970)に13,808人であった人口は、以降人口が急増し、同55年(1980)に25,423人と10年前に比べほぼ倍増しました(「国勢調査」)。平成に入ってから人口は増加を続けましたが、平成22年(2010)の45,069人を境に減少に転じていきます。

年齢区分別人口は、平成17年(2005)に老年人口と年少人口が逆転、生産年齢人口も同年から減少に転じており、高齢化の進行が顕著です。なお、令和32年(2050)の将来人口は33,329人と推計されます。



図7 人口の推移と将来推計

人口動態は、自然動態が平成23年(2011)から令和3年(2021)まで死亡が出生を上回っています。転入・転出による社会動態が平成23年(2011)から令和3年(2021)まで社会増と社会減を繰り返しています。

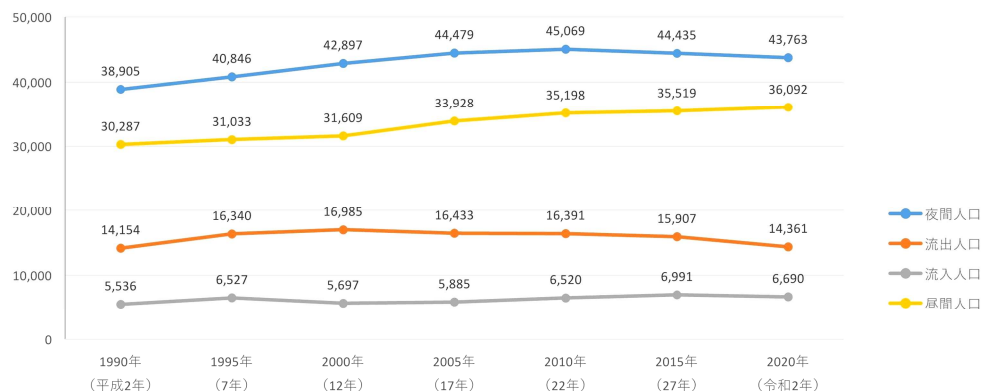


図8 人口流動

人口流動は、夜間人口が平成22年（2010）の45,069人を境に減少傾向となり、昼間人口が増加傾向となっています。流出人口は、平成12年（2000）の16,985人を境に減少しています。流入人口は、平成7年（1995）に6,527人となった後に同12年（2000）に5,697人と減少し、その後再び増加しましたが、令和2年（2020）には6,690人と減少しています。

（2）町の変遷

熊取は中世に熊取荘、近世に熊取谷と呼ばれていました。明治4年（1871）の廃藩置県により、岸和田藩が廃止、新たに岸和田県の管轄となりました。その後、すぐに岸和田県も廃止され、堺県に統合されました。堺県は25の区に分けられ、熊取の各村は第21区に属することになりました。

明治14年（1881）、堺県が廃止され大阪府となり、さらに同17年（1884）に熊取の集落は数村ずつ合併して戸長役場が設けられました。大久保・五門・紺屋・成合・朝代・野田は第21戸長役場、小垣内・上高田・下高田・和田・大浦・久保・宮・小谷・七山は第22戸長役場の管轄になりました。

明治22年（1889）、町村制が施行されると、従来の戸長役場制度を廃止し、新たな行政村である熊取村が成立しました。そして、大久保・五門・紺屋・野田・小垣内・久保・小谷・七山の8ヵ村は熊取村の大字となりました。同29年（1896）、南郡と熊取村が属していた日根郡が合併して泉南郡となり、「大阪府泉南郡熊取村」が誕生しました。

その後、昭和26年（1951）熊取村の人口の増加に伴い町制が施行され、熊取町となりました。現在、旧村として大久保・五門・紺屋・成合・朝代・野田・小垣内・高田・和田・大宮・久保・小谷・七山の名称が残っています。

表1 行政単位の変遷

中世	近 世		近代			現代	
	(岸和田藩)		明治 17 年 (1884)	明治 22 年 (1889) 町村制施行	明治 29 年 (1896) 新郡設置	昭和 26 年 (1951) 町制施行	
熊取莊	熊取村 (熊取谷)	大久保	大阪府南・日根郡所部内 第21戸長役場	大阪府日根郡熊取村	大久保	大阪府泉南郡熊取村	大阪府泉南郡熊取町
		五 門			五 門		
		紺 屋			紺 屋		
		成 合			野 田		
		朝 代					
		野 田	大阪府南・日根郡所部内 第22戸長役場		小垣内		
		上高田			小垣内		
		下高田			久 保		
		和 田					
		大 浦					
		久 保					
		宮					
		小 谷			小 谷		
		七 山			七 山		

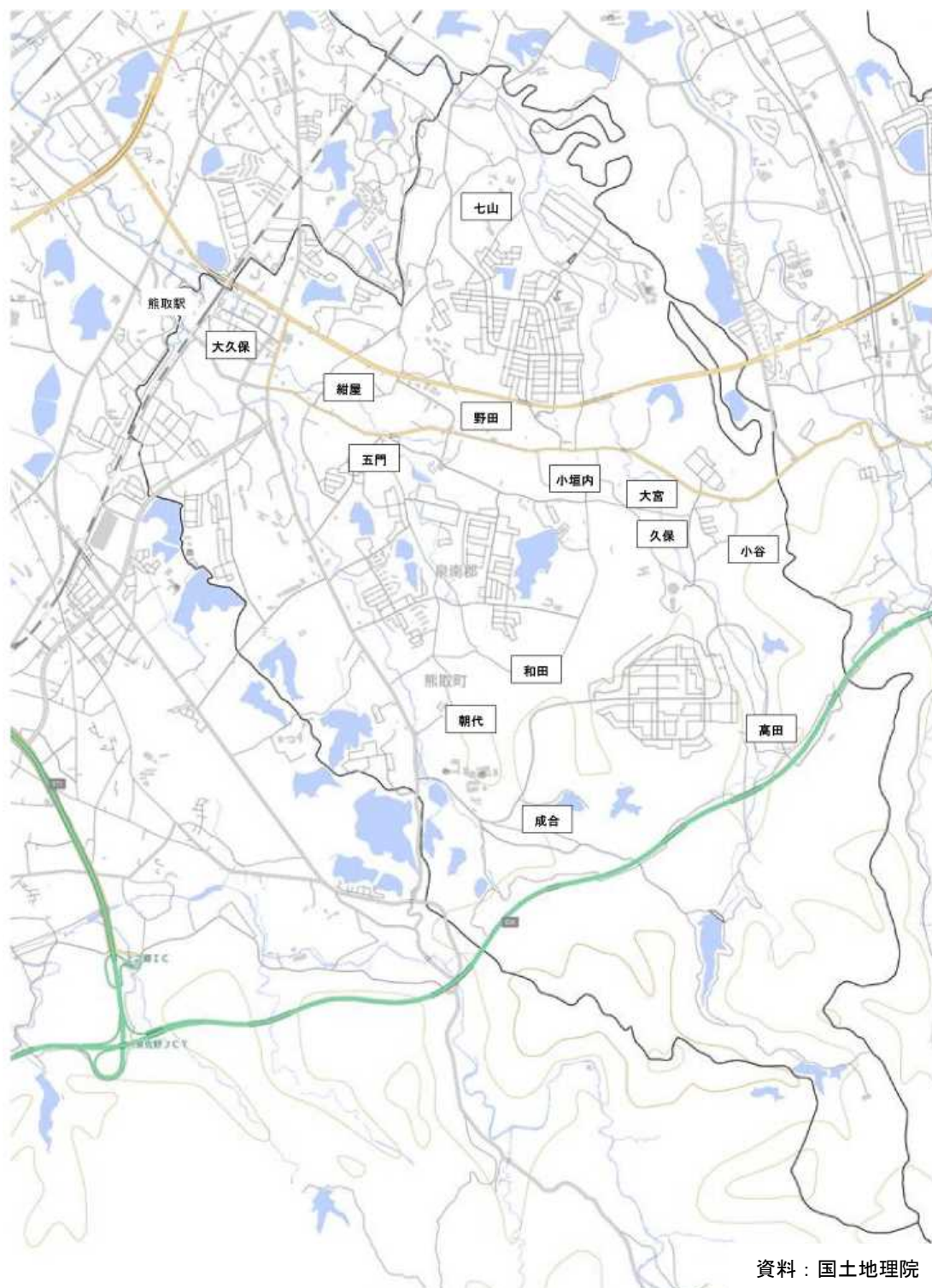


図9 熊取町の旧村

(3) 自治会

昭和45年(1970)、宅地開発により、これまでの8大字14地区の他に新たに3自治会が発足しました。昭和48年(1973)には、小垣内の丘陵地一帯が南海くまとりニュータウンとして、大規模な宅地開発が行われるなど、新しい自治会が誕生しました。その後も宅地開発により、漸次人口が増加、令和8年(2026)現在39の自治会があります。自治会は自主防災活動や自主防犯活動などを実施し、地域の連帯を強め、住みよい地域づくりに努めています。

(4) 交通

町内の主要な道路は、町北部を東西に大阪外環状線、国道170号が横断しており、町西部に府道泉佐野打田線、府道大阪和泉泉南線があります。

公共交通機関は、町の西北端をJR阪和線が走り、町の玄関口である熊取駅（昭和5年設置）があります。昭和39年（1964）、熊取駅に快速電車が停車することになり、大阪市内への通勤の利便性が増し、地価が安価なことがあいまって、大阪都市部のベッドタウンとして発展してきました。

現在は快速を利用してJR大阪駅まで約50分、JR天王寺駅まで約35分と利便性がよく、関西国際空港へも約15分で行くことができます。なお、熊取駅の令和5年（2023）度の乗車人員数は360万3,000人です（「熊取町統計書」）。

また、平成2年（1990）、熊取駅を起点とするバス路線が開通し、大阪・和歌山を結ぶ新しいルートが確保され、現在粉河熊取線として熊取駅から和歌山県紀の川市のJR粉河駅を約45分で運行する広域路線となっています。

一方、町内は熊取駅等を中心に地域を結ぶ路線バス（4路線）や、住民の移動手段の確保のため平成11年（1999）から町内巡回バス（愛称：ひまわりバス）が運行しています。

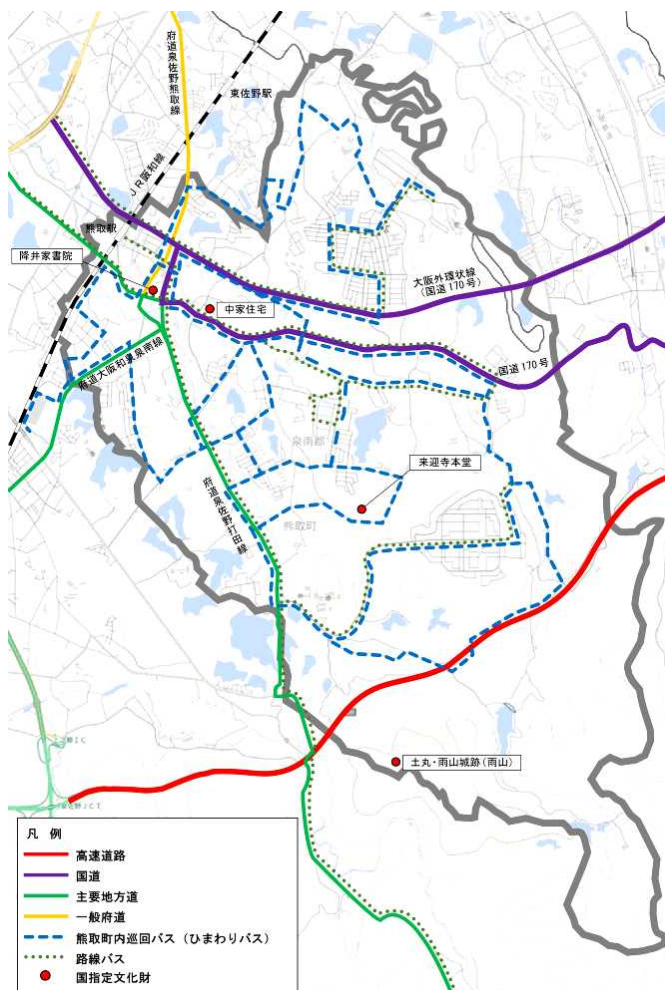


図10 交通ネットワーク



図11 熊取駅（昭和26年）



図12 現在の熊取駅

(5) 産業

農業は、温暖な気候と大都市に近いことから、需要に応じて様々な野菜を栽培しています。主な農産物は玉ねぎ、水なす、ふき、里芋などがあり、本町の特産物として京阪神を中心に市場に出荷しています。

工業は、江戸時代に換金作物である木綿を栽培していたという歴史的背景があり、繊維産業が明治時代末期から大正時代にかけて発展しました。繊維産業の分野では、綿フス織物とタオル生産が中心で、近年、外国製品の輸入が増加し厳しい状況にあります。

商業・サービス業は、熊取駅東の宿泊施設の開業や、大阪外環状線などの幹線道路沿いのロードサイド型店舗の出店など利便性が高くなっています。町内には大規模商業施設2店舗や、中規模商業施設などが所在しています。また、商工業・農業の振興のため、平成30年（2018）から、優れた商品を「くまとりやもん[♪]」としてブランド認定し、活性化を図っており、62商品（令和6年12月現在）がブランド認定されています。

また、熊取の産業の特徴の一つとして、造園業があげられます。明治時代末期より黒松を観賞用として育て、^{せんてい}剪定していたことから、造園業がさかんになりました。とくに松の剪定で自然に近い木の芽を活かした「熊取流ちらし」は有名です。造園業者は和田や朝代、小谷などの山間部の地域で多くみられます。

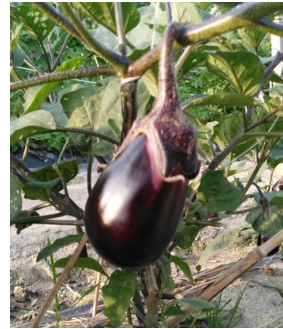


図13 水なす



図14 松

（6）観 光

本町には、江戸時代に建築された重要文化財中家住宅^{なかけじゅうたく}（平成9年（1997）開館）や昭和初期の綿布工場をリノベーションした熊取交流センター（平成17年（2005）開館）等の文化財関連施設、また南部に雨山を含む奥山雨山自然公園（昭和59年（1984）開設）、永楽ゆめの森公園^{えいらく}（平成27年（2015）開設）等の公園があります。奥山雨山自然公園は、「大阪みどりの百選」にも選ばれており、とくに永楽ダム周辺は桜の名所として、賑わっています。永楽ゆめの森公園は大阪府内最大級のすべり台やスケートボード場がある公園で、様々なイベントが行われ、町外から数多くの観光客が訪れています。

平成25年（2013）に「くまとりにぎわい観光協会」が設立され、熊取駅前に観光案内所（駅下にぎわい館）が開館、観光案内や特産品の販売、町内を観光するためのレンタサイクルの貸出しを行っています。

令和元年（2019）、新たな観光客を誘致するためブルーベリー農園「和田山 BerryPark」が開園しました。町内外の方がブルーベリー狩りを楽しんでいます。

また秋のだんじり祭りには、駅前パレードが行われ多くの人で賑わっています。



図15 奥山雨山自然公園



図16 永楽ゆめの森公園



図17 ブルーベリー

（7）文化財関連施設

文化財の収蔵、研究、展示などを行う本町の文化財関連施設は重要文化財中家住宅、熊取交流センター、重要文化財降井家書院の3施設があります。

①重要文化財中家住宅（開館時間：午前10時～午後4時30分）

江戸時代、岸和田藩（岡部氏の時代）の七人庄屋をつとめた中家の庄屋屋敷です。主屋は入母屋造、茅葺、妻入りで江戸時代初期に建築されたと考えられています。昭和39年（1964）に国の重要文化財に指定されました。

平成6年（1994）に町が寄付を受け、整備工事を行った後、一般開放（無料）しています。建物内は中家や中家住宅に関する展示を行うほか、アート作品の展示、コンサートなど文化活動（有料）にも使用することができ、住民の文化芸術の拠点になっています。邸内にある明治時代の蔵には農具を収蔵しています。

また、建物が活きた歴史の教材であることから、小学生の歴史体験学習（社会見学等）に利用されています。



図18 重要文化財中家住宅

②熊取交流センター（愛称：煉瓦館）（開館時間：午前9時～午後10時）

昭和3年（1928）に建設された綿布工場の既存の煉瓦壁を保存し、リノベーションした施設です。「交流」をコンセプトに、住民が憩いの場として集い、住民同士がお互いに学べる生涯学習・文化芸術の拠点施設です。平成7年（1995）に町が寄付を受け、同17年（2005）に開館しました。愛称の「煉瓦館」は、住民から公募したものです。

施設は旧工場の平屋建の特徴を活かし、高齢者や障がい者にも配慮したバリアフリーの建物です。文化芸術を振興する多目的ホールや既存の煉瓦壁を利用したギャラリー、貸館として利用できる会議室等があります。また歴史資料が展示できる展示室、昭和初期の木造事務所



図19 熊取交流センター
（愛称：煉瓦館）

を復原したコミュニティ支援室（町指定文化財。以下、町指定と表記）、藍染体験ができる工房、地場産品を販売するショップ、だんじり（明治13年）を展示しています。展示室は熊取の歴史文化の特性である「建物」・「水」・「綿」の3つのテーマを設け、歴史資料を展示するほか、年間を通して、藍染講座や歴史講座を実施しています。館内には収蔵庫があり歴史資料を保管しています。

泉州地域における往時の繊維産業の隆盛を後世に伝えるとともに、本町の歴史や文化の発信、さらには住民の交流促進の拠点として活用されています。

平成18年（2006）に、第26回大阪都市景観建築賞（愛称：大阪まちなみ賞）大阪府知事賞を受賞、同19年（2007）に経済産業省の近代化産業遺産、同21年（2009）に大阪府の大阪ミュージアム登録物に認定されました。

③重要文化財降井家書院

江戸時代、岸和田藩（岡部氏の時代）の七人庄屋をつとめた降井家の書院で、江戸時代初期に建てられたと考えられています。書院を含む降井家住宅は江戸時代末期、京都の聖護院門跡が行う「葛城灌頂」^{かつらぎかんじょう}（中津川修行）の休息所として利用されたことから、令和6年（2024）、日本遺産『「葛城修験」一里人とともに守り伝える修験道はじまりの地』に追加認定されました。例年、11月初旬には重要文化財の一般公開をしています。



図20 重要文化財降井家書院

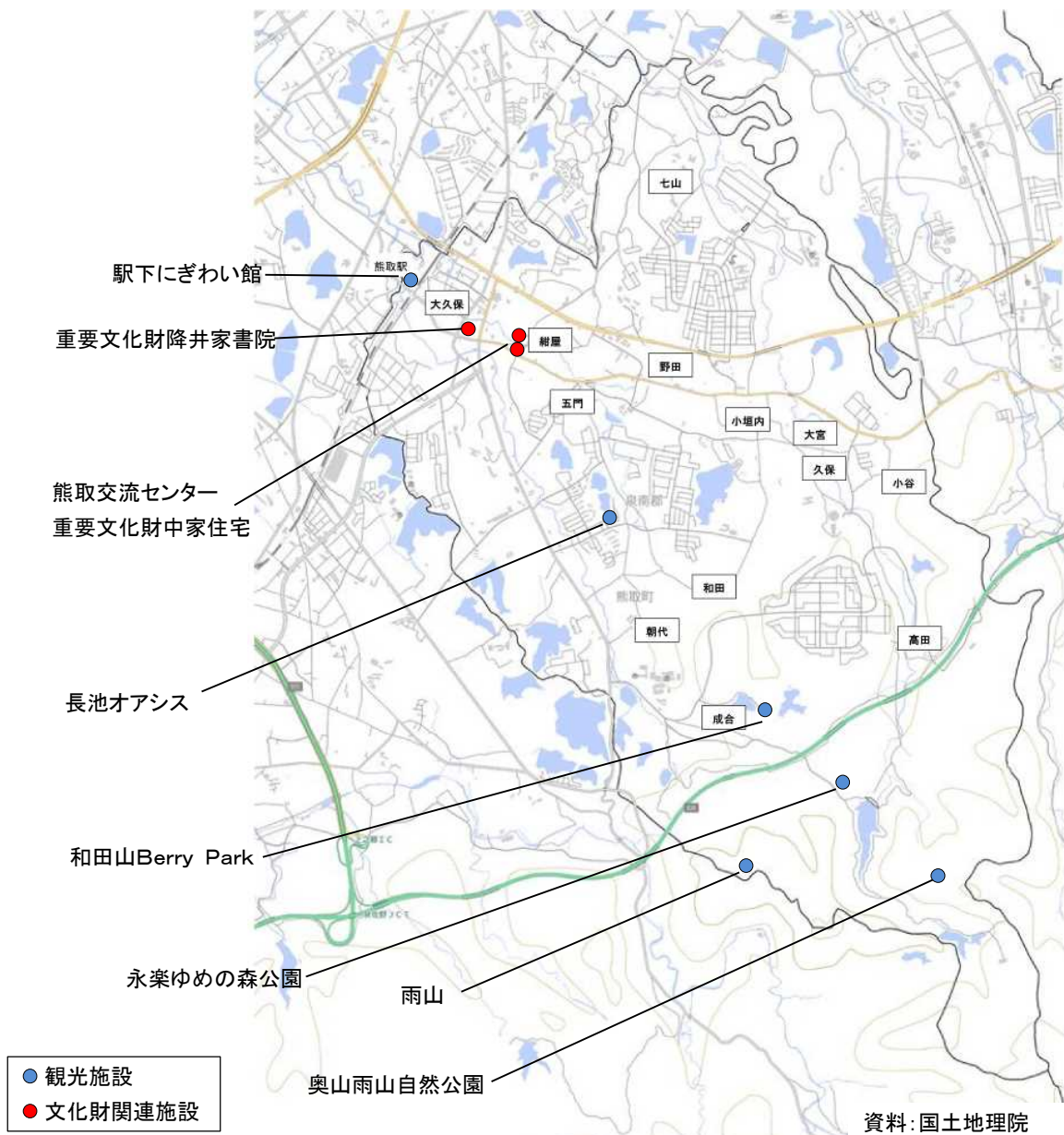


図21 観光施設・文化財関連施設の位置

3. 歴史的概要

(1) 原始（旧石器時代・縄文時代・弥生時代）

町内に旧石器時代の遺跡はなく、もっとも古い遺物は埋蔵文化財包蔵地の東円寺跡から出土した縄文時代の有茎尖頭器です。縄文時代は狩猟・採集を基盤とした生活様式の時代で、有茎尖頭器は投げ槍に使用されたと考えられます。東円寺跡の石器以外にも縄文時代の遺物として、成合の成合寺遺跡から石鏃が出土しています。両遺跡とも海からは遠く、漁労関係の遺物が発見されていないことから、狩猟を生業の主体とした集落があったと考えられます。

弥生時代の遺跡は、大久保遺跡からサヌカイト製の石鏃が、成合寺遺跡からサヌカイト製の剥片と弥生土器破片が出土しています。また山の手台にあった梅谷池北側の谷で弥生土器の破片が採集されています。大久保は平野に近い台地、成合寺・梅谷池は丘陵地ですが、弥生遺跡としての規模や時期については、明らかではありません。なお、サヌカイトは香川県や大阪府と奈良県の境にある二上山が原産地であることから、熊取との交易があったことが推定されます。



図 22 有茎尖頭器

(2) 古代（古墳時代・飛鳥時代・奈良時代・平安時代）

古墳時代の遺跡は、JR 熊取駅東側一帯の住吉川が形成した低位段丘面に立地する大久保E遺跡があり、弥生土器の系譜をひく壺・甕などの土師器や遺構が検出され、古墳時代初期のものと考えられます。土器が大量に発見されたことにより、古墳時代には熊取において人々が住みついていたことがわかります。この遺跡の特徴は、海から遠く離れているにもかかわらず、製塩土器・蛸壺型土器が出土していることです。海の生産活動の関係性が推定されます。



図 23 大久保E遺跡

4世紀の和泉地域には、摩湯山古墳（岸和田市）や黄金塚古墳（和泉市）が築かれますが、熊取ではこれまで古墳は確認されていません。

8世紀の和泉地域は、霊亀2年（716）、河内国から大鳥・和泉・日根の三郡が分割され、「和泉監」を設置しました。監とは国に準じる地方官庁のことです。しかし、天平12年（740）に再び河内国に併合され、天平宝字元年（757）、改めて三郡が河内国から分立し、和泉国が成立しました。

奈良時代は、東円寺跡から掘立柱建物の遺構や土師器・須恵器・製塩土器・土馬の断片などが出土し、本格的に生活が営まれていたことがわかります。



図 24 製塩土器

なお、熊取の地名が公式の文献資料に登場するのは、『日本後紀』延暦23年（804）10月14日の桓武天皇の熊取野遊獵の記事です。

熊取における寺院は、12世紀には建立されたことが、考古資料からわかります。役場の南側に「東永寺」「トヨジ」「豊寺」「大門」などの小字名が残る水田地帯で瓦が出土しており、「東円寺」あるいは「東曜寺」と推定されています。発掘調査により、寺で使用された軒丸瓦・軒

平瓦^{ひらがわら}や遺構^{いこう}が数多く検出され、このうち、「八葉複弁蓮華文軒丸瓦^{はちようふくべんれんげもん}」と「忍冬唐草文軒平瓦^{にんとうからくさもん}」（いずれも町指定）は、平安時代末期に製作されたものです。瓦には焼けた痕跡が残っており、大きな火災にあったと考えられます。

平安時代は、京都から紀伊の熊野に貴賤・男女の別なく参詣する「熊野詣^{くまのもうで}」がさかんに行われました。当時「蟻の熊野詣^{ありのくまのもうで}」といわれ、熊野には上皇^{じょうこう}（法皇）や貴族なども、多くのお供を連れて参詣しました。なかでも白河・鳥羽・後白河の三人の上皇（法皇）はいずれも仏教を手厚く保護し、何度も熊野詣を行いました。熊取は、熊野古道から少し離れていますが、後白河法皇が熊野詣の際、中家に立ち寄り、行宮（仮設の御所）としたという伝承が残っています。それによると、中家が選んだ熊取に住む54人が、法皇の輿^{こし}を担いだといわれ、その際に出入りした門が唐門であると伝えられています。そのことから中家近辺の地名が「御門^{ごもん}」といわれるようになり、それが現在の「五門」の地名の由来とされています。

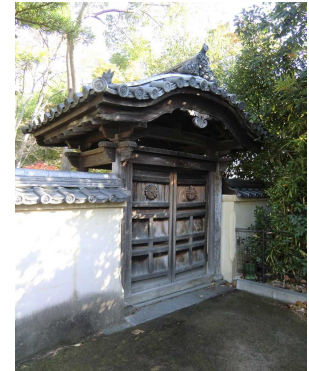


図25 中家住宅の唐門

（3）中世（鎌倉時代・南北朝時代・室町時代）

中世の熊取は、日根荘^{ひね}（現泉佐野市域にあった荘園^{しょうえん}）を治めていた有力貴族で五摂家の九条家が所蔵する「九条家文書」（宮内庁書陵部蔵）によると、熊取が日根荘の北に接する荘園であったことがわかります。また、五月ヶ丘にある建武4年（1337）銘の石造地藏菩薩立像^{せきぞうじざうぼさつりゅうざう}（町指定）の光背^{こうはい}には「熊取庄」の銘文がみられることから、熊取荘が存在していたことを確認することができます。

鎌倉時代は、和田に來迎寺本堂が建立されます。鎌倉時代の建築様式をそなえた三間四方（約30㎡）の小堂で、行基葺^{ぎょうきぎき}という珍しい瓦の葺き方が施され、昭和24年（1949）、国の重要文化財に指定されました。また昭和8年（1933）、『熊取村誌』の編さん調査の過程で建物の棟の端を飾る応永31年（1424）銘の鬼瓦が発見されました。室町時代の鬼面がわかる貴重な鬼瓦といえます。

南北朝時代の和泉では、北朝方と南朝方とが町南部の土丸・雨山城において、争奪戦をくりひろげました。この城は、紀州と泉州を結ぶ粉河街道^{こながわ}を押さえる軍事上重要な山城で、南朝の武将橋本正高が城を整備し、和泉の南朝の拠点としました。天授5年（1379）、北朝方の和泉守護山名氏清^{やまなうじきよ}らにより、土丸・雨山城が落城、翌年正高は北朝方と高名里（現貝塚市海塚付近）の戦いで戦死しました。

室町時代は、応仁の乱前後から泉南地方に根来寺（和歌山県岩出市）や粉河寺（和歌山県紀の川市）、神於寺（岸和田市）などといった寺院勢力が進出してきました。とくに、熊取における根来寺の影響が大きかったと考えられます。

根来寺は新義真言宗の総本山で、平安時代後期に真言宗を中興した覚鑊上人^{かくぼんしょうにん}（興教大師^{こうぎょうだいし}）が高野山上に開創した大伝法院と密厳院を起源としています。紀泉地方の武士や土豪は、子弟を氏人として根来寺の子院に入寺させ、勢力を拡大してきました。「根来寺伽藍古絵図」には室町時代後期（16世紀）頃の根来寺の最盛期のようすが描かれています。

熊取の代表的な地位を占めていた中家も例にもれず、根来寺成真院に代々子弟を送りこむ氏



図26 土丸・雨山城跡曲輪

人でした。根来寺は成真院とともに活動し、16世紀を中心にして多くの田畠を集積しました。このことは、中家と成真院に関わる田畠・屋敷についての「中家文書」(売券)が残っており、室町・戦国期に台頭する土豪層の実態を究明できる史料として、広く知られるところとなっています。また同じく岸和田藩の庄屋をつとめた降井家も中家同様子弟を根来寺寿命院に入寺させています。

戦国時代の動乱期は、降井太夫が織田信長の配下となり、毛利の水軍との木津川口の戦いで、討死してしまいます。そのため熊取の中家の次男が養嗣子として降井家を継ぎ、近世以降は降井家の当主は「中左太夫」、中家は「中左近」を名乗ります。

そして、天正10年(1582)、織田信長が本能寺の変で倒れると、実権を手中にした羽柴(のち豊臣)秀吉は、紀州の根来・雑賀の一揆への押さえとして、中村一氏を岸和田城に入れ、さらに和泉の地侍の一部を味方にひき入れました。

一方、根来・雑賀の一揆衆は、岸和田城を拠点とした秀吉の勢力に対抗して、中村・沢・畠中・積善寺・千石堀といった現在の貝塚市域に出城を構えます。その中でももっとも重要であった出城が橋本の積善寺城です。この城兵のなかには、熊取出身の根来寺の僧、熊取寿明院(降井盛永)や根来盛重の名前がみられます。その東南2km、熊取の七山村に接するところに千石堀城がありました。周囲には大小多数のため池があり、これを天然の堀として数千人がこれを守りましたが、秀吉は千石堀城、畠中城、高井城を攻め落とし、積善寺城、沢城も貝塚ト半斎の説得により開城しました。この秀吉の根来攻めにより野田の東円寺、大久保の平福寺、小垣内の正法寺などの各寺院が焼失、泉南の村々は焦土となり、根来寺も炎上し、これをもって和泉の中世は、終焉を迎えました。

秀吉が死去した後、慶長5年(1600)の関ヶ原の合戦、慶長19・20年(1614・15)の大坂冬の陣と夏の陣によって豊臣氏は滅亡、徳川幕府が成立しました。この時、中家の根来盛重は還俗して「根来大納言盛重」を名乗り、関ヶ原の合戦や大坂の陣に参戦、元和5年(1619)に徳川家旗本として、和泉国内にある徳川家の他の直轄領を支配する代官に任命されました。

(4) 近世(江戸時代)

元和元年(1615)岸和田藩は、豊臣恩顧の小出氏に替わり、丹波国篠山から徳川家譜代の松平康重が入封しました。この時に熊取も岸和田藩に組み込まれ、中家・降井家は郷士代官に任命されました。寛永17年(1640)、2代康映が播磨国山崎へ転封されると、康映の岳父である岡部宣勝が摂津国高槻から入封、岸和田城主となります。以後、明治4年(1871)まで岡部氏が岸和田藩を治めました。岡部氏は村々を支配するために、大庄屋にあたる七人庄屋の制度を設け、熊取の各村々は中家(中左近)と降井家(中左太夫)の両家の支配下に置かれました。熊取谷(熊取村)は大久保・五門・紺屋・成合・朝代・野田・小垣内・上高田・下高田・和田・大浦・久保・宮・小谷・七山の15ヵ村によって構成されました。七人庄屋の一員であった中家と降井家の権威は、岸和田藩内においては大変重く、その職務は岸和田郷会所に詰めたり、領内の村方騒動の調停、他村の庄屋補佐のための附庄屋といったものでした。

熊取谷の運営はこの両家に任されており、谷内での年貢の統轄はもちろん、15ヵ村の年寄・組頭の決定権や谷内の裁判権までも委ねられていました。貞享2年(1685)に降井家が、元禄5年(1692)に中家が岸和田藩の財政を賄うため札元となり藩札を発行したほか、両家は永楽池など谷内のため池築造に深く関わりました。

中家・降井家の両家以外に注目すべきは、徳川家旗本の根来家です。もとは中家(中左近)の三男盛重を始祖とし、盛重は泉州の幕領代官として、熊取を含む泉州や泉北一帯の幕領を支

配していました。盛重が没した後、三家は150年近く疎遠になっていましたが、幕府が寛政11年(1799)から文化9年(1812)にかけて編さんを行った大名・旗本・幕臣の系譜『寛政重修諸家譜』の調査を契機に三家の関係が復活、根来家から中家に養子に入り(中瑞雲斎)、その姉も降井家中盛彬のもとに嫁いでいます。

文化面は、中家・降井家が人形浄瑠璃や六斎念仏・興行相撲などの都市の芸能を積極的に招き入れています。そして、熊取の文化人として特筆すべき人物が降井家中盛彬です。長年庄屋をつとめるかたわら、様々な研究を行い、著作も多く、天文学などの諸学問を学ぶとともに、和歌・漢詩をつくるなど多才ぶりを発揮しました。とくに天文学は、望遠鏡の製作で知られている貝塚の岩橋善兵衛のもとに入門して、自ら天体観測を行い、『太陽明界六曜運旋正儀釈』などを著しています。

農業面は、「米は熊取、日根野は小豆、大木土丸桃(ヤマモモ)どころ」と民謡にうたわれるように、熊取は良質の米がとれることで有名でした。肥沃な土地ときれいな水が「熊取米」を作ってきたと考えられます。米作以外は、換金作物である木綿やさとうきびが栽培されました。木綿は貞享3年(1686)から元禄9年(1696)に編さんされた和泉国の地誌『和泉一国高附名所誌』によると、熊取谷では総生産高の2割は木綿と記されています。また、岸和田藩は特産物としてさとうきび栽培・製糖を奨励していました。文政(1818~29)頃には急速に泉南地方に普及し、元治元年(1864)、熊取に62人のくり屋(製糖を行う)と20人の仲買人がいました。

幕末になると、全国各地で尊皇攘夷の運動に身を投じる、「草莽の志士」が現れてきました。嘉永6年(1853)、長州藩士の吉田松陰が泉州に立ち寄り、中家に滞在しています。松陰は当主であった中瑞雲斎から清国の太平天国の乱の情報を耳にし、当時熊取で医者をやっていた左海祐斎と漢詩を交換しています。

その後瑞雲斎は熊取を飛び出し、京都で尊皇攘夷運動に奔走することになります。根来氏の領地の大和国宇智郡丹原村(現奈良県五條市)において大砲を試射したり、崇徳天皇の神霊を讃岐国から京都に遷還させる運動をくりひろげました。戊辰戦争には息子たちを従軍させましたが、明治維新後は政府の開化路線と合わず、横井小楠暗殺事件などに関与し、明治4年(1871)に外山光輔卿事件に連座して、内乱隠謀罪の名のもとに処罪され獄死しました。これにより瑞雲斎たちの維新は終わったのです。



図27 中盛彬肖像画

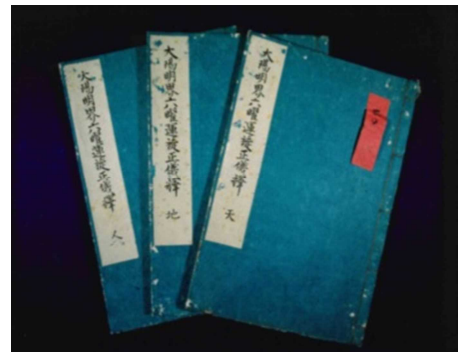


図28 『太陽明界六曜運旋正儀釈』

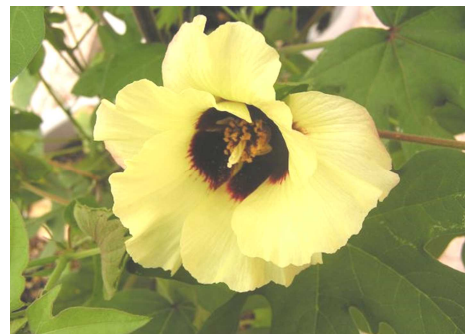


図29 綿の花



図30 中瑞雲斎肖像画

(5) 近代（明治時代・大正時代・昭和時代（戦前））

明治時代は、幕藩体制における岸和田藩による支配が終わり、明治4年（1871）7月、廃藩置県が行われ、熊取は岸和田県下に置かれていましたが、11月堺県に編入されます。堺県の中では第21区に配置され、岸和田に出張庁が置かれ、堺県からの布達には岸和田出張庁を通じ、伝達されました。

明治22年（1889）に町村制が施行されると、熊取村が成立し、明治23年（1890）に府県制、郡制が施行され、南郡と熊取村が属していた日根郡が合併して泉南郡となり、「大阪府泉南郡熊取村」が誕生しました。そして、初代村長に原勝造^{はらかつぞう}が就任しました。

産業面は、江戸時代に換金作物である木綿を栽培していたという歴史的背景もあり、明治時代後期から大正時代にかけて繊維産業がめざましい発展を遂げました。

明治40年（1907）に泉南織布工場、翌年に中林綿布工場、同45年（1912）に熊取織物株式会社、道明織物工場など数多くの織物・タオル工場が設立されました。とくに、道明織物工場は熊取村でのタオル産業発展の先駆けとなりました。大正14年（1925）、熊取村の織物工場数は17、従業員数は859人であり、これらの工場で作られた製品は、国内はもとより海外（中国・インドなど）に輸出されました。



図 31 中林綿布工場（昭和初期）

昭和3年（1928）、五門に煉瓦造、平屋建の中林綿布の新工場（約5,300㎡）が建設されました。工場は最新鋭の遠州織機株式会社の阪本式自動織機529台をいち早く導入し、生産を拡大するなど、泉州の織物業界をリードする存在となりました。工場の敷地は従業員用の宿舎や食堂が建ちならび、ひとつの町のような賑わいを呈していました。

農業面は、明治16年（1883）頃に、泉州において玉ねぎが栽培され始めたといわれ、熊取でもこの頃に栽培されたと考えられます。大正13年（1924）、政府は熊取村にタバコの栽培を指定し、タバコ耕作組合が結成され、耕作が開始されました。



図 32 玉ねぎ畑（昭和初期）

交通面は、昭和5年（1930）6月、阪和電気鉄道（現JR阪和線）が天王寺と東和歌山間61kmを結んで開通し、大久保に熊取駅が設置され、熊取村にも待望の鉄道が走るようになりました。この阪和電気鉄道の開通によって交通が至便になり、その後の熊取村の発展に大きな影響をもたらしました。また当時、阪和電気鉄道では秋の行楽シーズンになると、天王寺駅から山中溪駅までを結ぶ「ハイキング列車」などが運行され、パンフレットには雨山、土丸城址コースが掲載されています。



図 33 熊取尋常高等小学校講堂（昭和初期）

政治面は、明治維新後、100町歩以上の田畑を集積し、大地主になった小谷の原文平（初代）が、明治20年代から30年代前半にかけて政治の中心となっていく。五門の中左近家へ養子に入った文平の次男辰之助^{たつのすけ}は衆議院議員になったほか、分家の甥である原勝造^{はらかつぞう}・定吉は村長

を歴任しました。また、当時熊取村の財政は決して裕福な状況とはいえず、地域の人たちが熊取尋常高等小学校（明治44年開校）のために協力をおし、寄付などを行い学校の環境を整備していきました。中林綿布なかばやし まごじろうの中林孫次郎は小学校講堂を、義本一よしもと はじめ（村長）はグロトリアンシュタインヴェッヒのピアノ（現在、熊取図書館で使用）を、大宮出身の福助足袋社長辻本豊三郎は、郷土の児童のために奨学金として1万円を寄付しています。

そして、昭和になると、村民の共有意識を喚起するため、村の歴史を顕彰する事業が行われました。例えば、村の発展の基礎を築いた初代村長原勝造の顕彰碑の建設や、当時府下でさかんに行われていた郷土史の編さん事業などです。昭和7年（1932）、熊取村誌の編さん事業が開始され、同11年（1936）に村誌は完成し、『熊取郷土調査基本編』と題して刊行されました。

昭和10年代になると、日中戦争や太平洋戦争など戦争の時代でもありました。熊取駅において、出征兵士が村民一同の激励と歓呼の声援に送られて、村を発っていきました。昭和16年（1941）3月に国民学校令が公布され、4月に熊取尋常高等小学校は熊取国民学校に改称されました。太平洋戦争が始まると、熊取駅付近において戦闘機の機銃掃射を受けています。昭和18年（1943）1月に熊取国民学校正門横にあった二宮尊徳にのみや さんとくの銅像も供出されました。また集団疎開も始まり、大阪市内の西成区弘治国民学校の児童353人が疎開し、村内の寺院や区の各戸に分かれて生活を送りました。



図34 原勝造顕彰碑

（6）現代（昭和時代（戦後）以降）

昭和20年（1945）8月14日、ポツダム宣言の受諾をもって太平洋戦争は終結しました。昭和21年（1946）地方制度改革が始まり、20歳以上の男女に選挙権が与えられ、熊取村でも同年4月の衆議院選挙の後、翌年に初めて村長選挙・村議会選挙が行われました。

昭和26年（1951）11月3日、熊取村の人口の増加に伴い町制が施行されることになり、熊取町が成立します。初代町長しもなかり たろうに下中利太郎が就任、同時に町歌・町章も制定されました。翌年には町の「広報誌」や「町勢要覧」も発行され、人口は10,067人でした（「町勢要覧」）。そして、前後して保育所の建設、小中学校や町道の改築、水道事業などの施設整備が進められました。

文化財は、昭和24年（1949）に和田の来迎寺本堂、同27年（1952）に降井家書院、やや遅れて同39年（1964）に中家住宅が国の重要文化財に指定されました。

しかし戦後10年がたつと、自治体の財政負担が増大し、効率的に自治体行政を進めるため、国や大阪府の指導で近隣市町村の合併が促進されました。昭和28年（1953）、貝塚市、泉佐野市との間で単独合併の構想がもちあがり、12月に合併調査委員会が結成され、町民大

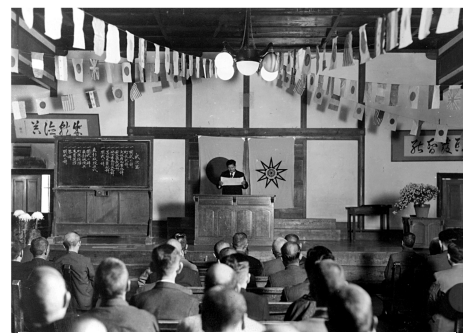
図35 町制施行記念式典
（昭和26年）

図36 住民投票（昭和29年）

会が開かれました。この問題をめぐり町議会や住民の間で、貝塚市、泉佐野市、それぞれに合併を希望するものに分かれて対立し、昭和29年（1954）5月に住民投票が行われました。この時の投票率は92.7%で、貝塚市との合併を選ぶ住民が多数を占めました。町議会などの合意決定ができず合併には至りませんでした。

昭和35年（1960）5月、熊取町は原子炉実験所誘致を大阪府に申し入れました。原子炉実験所誘致は宇治や高槻などが候補地にあがりましたが、住民の反対により頓挫していました。同様に熊取でも申し入れに対し隣接する泉佐野市で反対の運動がまき起こりました。しかし、同36年（1961）京都大学と泉佐野市との間に覚書が交換され、同38年（1963）、朝代に原子炉実験所が完成しました。

これにより昭和39年（1964）10月、国鉄阪和線熊取駅に快速電車が停車することになったことで、大阪市内への通勤の利便性が増し、熊取は一躍、大阪都市部のベッドタウンとして注目されるようになりました。そして、昭和40年代から50年代にかけて本格的な宅地開発が始まります。とくに、丘陵地を中心に宅地開発が進み、なかでも桜が丘がその先駆けとなりました。桜が丘は、大阪府警における警察職員の住宅対策を解消するという目的がありました。その後、昭和48年（1973）小垣内の丘陵地一帯で南海くまとりニュータウンの大規模な宅地開発が行われました。開発計画は面積74ha、戸数1,900戸、人口7,600人の規模を有するもので、同58年（1983）に完工しました。南海くまとりニュータウンの開発によって、転入者が増え、それに伴い児童数も増えたことから、小中学校の建設が進められ、平成元年以降、町内の小・中学校数は小学校5校、中学校3校の現在の体制になりました。

また、昭和60年（1985）には大阪明浄女子短期大学（現大阪観光大学）と関西鍼灸短期大学（現関西医療大学）、平成元年（1989）に大阪体育大学が茨木市より全面移転し開学しました。

福祉や文化施設面では、平成11年（1999）に住民の健康づくりの拠点施設である総合保健福祉センター（愛称：熊取ふれあいセンター）、また教育文化施設として、公民館・町民会館（昭和45年）、図書館（平成6年）、総合体育館（平成8年）、重要文化財中家住宅（平成9年）、熊取交流センター（愛称：煉瓦館 平成17年）が開館しました。令和6年3月に文化振興の拠点施設である熊取町文化ホールと公民館（リノベーション）が新たに開館しました。他にも熊取駅が橋上駅（平成9年）に、また長池オアシス（平成12年）や野外活動ふれあい広場（平成17年）、永楽ゆめの森公園（平成27年）も開設しました。



図37 京都大学原子炉実験所
（現 京都大学複合原子力科学研究所）



図38 桜が丘（昭和42年）



図39 熊取町文化ホール

(7) 人物にまつわる伝承・事象

本町の歴史において、町の発展に尽力した出身者や熊取にゆかりのある歴史上の人物がいます。

かんむ

①桓武天皇の熊取野遊獵

『日本後紀』によると、桓武天皇（737～806）は延暦23年（804）10月14日に熊取野で遊獵したことが記されています。

ごしらかわほうおう

②後白河法皇と中家

熊野詣の際、後白河法皇（1127～92）は中家に立ち寄り、行宮（仮設の御所）としたという伝承が残っています。それによると、中家が選んだ熊取に住む54人が、法皇の輿を担いだといわれています。現在は江戸時代に建てられた唐門が残っており、門扉には天皇家の菊の御紋が陽刻されています。

はしもとまさたか

③橋本正高と土丸・雨山城

橋本正高（？～1380）は、楠木氏の一族で貝塚市橋本の出身といわれています。南北朝時代に、北朝方と南朝方が争奪戦をくりひろげた要城、土丸・雨山城（国史跡日根荘遺跡）を整備し、和泉の南朝の拠点としました。

ねごろもりしげ

④根来盛重と徳川家

中家出身の根来盛重（1556～1641）は、根来寺の子院成真院の院主でした。羽柴秀吉の紀州攻めの際に抵抗した僧侶の一人で、還俗して「根来大納言盛重」と名乗りました。徳川家直臣として、関ヶ原の合戦や大坂の陣で奮戦したと伝えられ、その時、「根来同心」を率いていたといわれています。盛重は熊取を含む日根郡の代官に任命され、寛永18年（1641）86歳で大坂において死去し、大坂の中寺町にあった法雲寺に葬られました。和歌山県の高野山奥之院に、「泉州熊取根来家墓所」があります。

いつき せいさい えいらくいけ

⑤斎静斎と永楽池

高田奥の谷に位置する永楽池は、広島出身の儒学者斎静斎（1729～78）の助言のもと中・降井の両庄屋をはじめ、熊取の人々が総力を結集し築造しました。明和8年（1771）、谷に流れていた見出川をせき止めることから工事がはじまり1年をかけ完成しました。永楽池の名は、静斎が名付けたもので、熊取の人々の「永世の楽」の源としての思いが込められています。そのため静斎は水の利用にあたり、不公平のないよう「永楽池四ヵ条」を定めました。その四ヵ条は、「一つ、水の流れを妨げてはならない。一つ、人の水まで奪って自分の田地に引き入れてはいけない。一つ、村役人が依怙臆んではならない。一つ、村役人も皆自分より他の人のことを優先するよう心掛けなければならない」というものでした。

なか もりしげ

⑥中盛彬と天文学

中盛彬（1781～1858）は、中左太夫家（降井家）に生まれました。天文学について、望遠鏡の製作で知られている貝塚の岩橋善兵衛（1756～1811）のもとに入門し、自ら天体観測を行い、『太陽明界六曜運旋正儀 釈』などを著しています。

ぬきな かいおく そうしんどう

⑦貫名海屋と爽神堂

七山にある浄見寺は、慶長4年（1599）、爽神堂（現七山病院）として創設され、わが国最初の精神医療施設として有名です。幕末の書家である貫名海屋（1778～1863）が浄見寺中興の祖第11代住職義勸に宛てた手紙が発見されました。

なか ずいうんさい

⑧中瑞雲斎と大砲

中瑞雲斎（1809～71）は、嘉永年間（1848～53）、南部藩士で鉱山学者であった大島高任（1826～1901）を熊取に招き、大砲を鑄造し、根来氏の領地の大和国宇智郡丹原村（現奈良県五條市）で大砲を試射しました。これは近畿地方における洋砲発射の先駆けといわれています。

す と く

⑨中瑞雲斎と崇徳天皇の神霊遷還

中瑞雲斎は、熊取で庄屋をつとめる間も尊王攘夷の志をもつ者として知られ、直接尊王攘夷運動に身を投じ、崇徳天皇の神霊を讃岐国から京都に遷還させる運動をくりひろげました。瑞雲斎は、平安時代末期の保元の乱後、讃岐に配流されて憤死した崇徳天皇が「怨霊」となって、世の中の災いのもととなっていると考えました。明治元年（1867）、運動が実り新政府の手によって崇徳天皇神霊遷還が実現し、瑞雲斎は御用掛に任命されています。

はしもと そうきち

⑩橋本宗吉の電気実験

江戸時代中期、大坂の蘭学の開祖橋本宗吉（1763～1836）は、フランクリンが凧を使って雷が電気であることを確かめた実験と同様の実験を中家の協力のもと、邸内にあった巨松を使って再現しました。そのようすは、宗吉の著書『阿蘭陀始制エレキテル究理原』に「泉州熊取谷にて天の火を取りたる図説」という挿絵入りで紹介されています。

さと い ふきゅう

⑪里井浮丘の筆塚

里井浮丘（1799～1866）は、泉佐野の富商里井家の幕末期の当主で、教養が高く尊皇攘夷の志士たちとも交流があったことで有名です。浮丘自身の蔵書を閲覧に来る人を記録した『展鑑例』に中盛彬や中瑞雲斎の名がみられます。大久保の法禅寺に浮丘の長男である孝準が建てた筆塚が残っています。

たみやかざえもん

⑫田宮嘉左衛門と来迎寺本堂

田宮嘉左衛門は、代々岸和田藩領の大工組頭をつとめています。享保3年（1718）、来迎寺本堂の修理をした際の棟札や、大森神社拝殿の棟札（文化5年 1808）にその名がみられます。

そうま はじめ

⑬相馬肇と雨山城碑（町指定附）

雨山城碑は、嘉永5年（1852）、粉河街道と成合街道の分岐点に建てられたものです。碑文は岸和田藩主岡部長発の命によって、岸和田藩士の相馬肇が作成し、南北朝の内乱の舞台となった土丸・雨山城を根拠として戦った南朝の橋本正高の「忠誠」を讃える内容となっています。

⑭降井詮彬と辻の井

小谷の興蔵寺参道下の辻の井は、簡易水道が小谷に敷設されるまでの水源でした。江戸時代の安政年間（1854～60）、降井詮彬によって作られたものです。

はら ぶんぺい

⑮原文平（初代）と大森神社の鳥居

大森神社の境内にある鳥居は、明治13年（1880）、小谷の大地主原文平（初代）によって建てられたものです。

つじもととよさぶろう

⑯辻本豊三郎の奨学金

大宮出身の辻本豊三郎（1881～1959）は、堺の足袋商辻本福松の婿養子となり、経営に参画、機械化による大量生産を進め販路を拡大、大正8年（1919）、福助足袋を設立、社長となりました。熊取尋常高等小学校の児童のために奨学金として1万円を寄付するなど、地域に貢献した人物です。

はら かつぞう

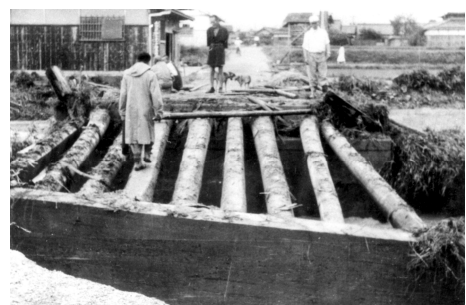
⑰原勝造の顕彰碑

昭和6年（1931）、熊取村の村長を24年間勤めた原勝造の顕彰碑が大森神社境内に建設されました。

（8）災害史

①風水害

風水害の記録がわかるものとしては大正時代に、大雨によって橋梁（大宮橋・休場橋・大橋）が破損、架換工事が行われました。昭和時代は、昭和9年（1934）9月21日、四国沖から近畿地方に來襲した室戸台風が、未曾有の超大型台風となり、瞬間最大風速60m以上を記録しました。熊取村では、5人の重傷者と36人の軽傷者を出し、



被害家屋は1,215戸を数え、そのうち全壊は35戸、半壊は46戸でした（「昭和9年中事務報告書」）。この他倉庫・納屋・工場も被害を被っています。とくに深刻だったのは、村の公共施設がのきなみ破壊され、使用不能に陥ったため、役場事務は停滞しました。また、府道沿いの大久保と五門の境付近にあった「熊取座」という芝居小屋も被害を受けましたが、当時の人々の身近な娯楽であったことからすぐに復活しました。

昭和10年（1935）、集中豪雨により甚大な被害を出しました。豪雨についての記録は残っていませんが、町内のほとんどの橋梁が流失し、多くのため池が破壊されたといわれています。

戦後熊取を襲った主な災害は、昭和25年（1950）のジェーン台風、同27年（1952）7月10日の集中豪雨、同36年（1961）の第二室戸台風による被害がありました。

図40 集中豪雨による向田橋の被害状況（昭和27年）

昭和27年の7月災害は、岸和田付近の観測によると総雨量が362.5mmに達し、時間雨量では最高120mmを記録しました。熊取だけで死者1人、負傷者5人、全壊・流失家屋5戸、半壊・床上浸水261戸、田畑流失・埋没77町1反、冠水300町歩、橋梁流失21カ所、道路決壊19カ所、堤防決壊30カ所、崖崩56カ所に及んだと報告されています。和田の別所池にこの災害に関する復旧の石碑があります。

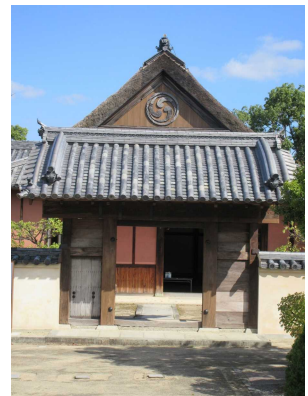


図41 耐震工事をした表門

また、平成30年（2018）9月4日、台風21号が近畿地方を縦断、熊取では最大瞬間風速51.2mを記録し、重要文化財中家住宅の表門が倒壊、主屋の屋根、壁が破損するなどの被害がありました。同年に文化庁の補助金を得て、中家住宅の災害復旧工事を実施し、あわせて表門の耐震工事を行いました。

②地震

本町はこれまで大きな被害をだした地震は発生していませんが、成合に断層が存在していることがわかっています。なお、岸和田藩の庄屋をつとめた中盛彬の著書『かりそめのひとりごと』によると、江戸時代の宝永4年（1707）に発生した大地震について、「宝永四丁亥年十月四日未の刻より半時ばかり地震しぬ」と、地震についての記述があります。宝永の大地震は、東海から四国にかけての広い地域を襲った地震で、災害史上最も大きな災害のひとつといわれています。

第2章 熊取町の文化財の概要

1. 指定等文化財の概要

文化財保護法、大阪府文化財保護条例、熊取町文化財保護条例による本町内に所在する指定等文化財は、令和8年（2026）8月現在18件です。

指定等の内訳は、国指定文化財4件、府指定文化財1件、町指定文化財12件、府登録文化財が1件となっています。類型でみると、有形文化財が9件、民俗文化財が3件、記念物が6件です。

文化財の保存技術に選定されているものはありません。

表2 本町の指定等文化財の状況（令和8年8月現在）

類型			国指定・選定	国選択	府指定	府選択	町指定	国登録	府登録	合 計
有形文化財	建造物		3	—	0	—	1	0	0	4
	美術工芸品	絵 画	0	—	0	—	0	0	0	0
		彫 刻	0	—	0	—	1	0	0	1
		工芸品	0	—	0	—	0	0	0	0
		書跡・典籍	0	—	0	—	0	0	0	0
		古文書	0	—	0	—	0	0	0	0
		考古資料	0	—	0	—	2	0	0	2
		歴史資料	0	—	0	—	1	0	1	2
無形文化財		0	0	0	—	0	0	0	0	
民俗文化財	有形の民俗文化財	0	—	0	—	3	0	0	3	
	無形の民俗文化財	0	0	0	0	0	0	0	0	
記念物	遺跡		1	—	0	—	2	0	0	3
	名勝地		0	—	0	—	1	0	0	1
	動物、植物、地質鉱物		0	—	1	—	1	0	0	2
文化的景観			0	—	—	—	—	—	—	0
伝統的建造物群			0	—	—	—	—	—	—	0
合 計			4	0	1	—	12	0	1	18

「—」は制度がないものを示しています。また町登録は制度がありません

（1）有形文化財

①建造物

建造物の指定は、国指定文化財3件、町指定文化財1件の計4件です。国指定文化財は社寺建築1件、民家等（書院）2件、町指定文化財は工場建築1件です。

社寺建築は、和田にある鎌倉時代の建築様式をもつ来迎寺本堂です。昭和24年（1949）に国指定文化財に指定されました。三間四方（約30㎡）の小堂で、屋根は寄棟造、行基葺、基壇はなく野面石上に柱を建て、三方に濡れ縁を設けています。行基葺は丸瓦の端部を細くして一枚ずつずらすように葺きあげる古い葺き方です。堂内は、天井の四隅の梁がエビ虹梁という珍しい建築で、煤気が多く、この本堂は当初護摩堂ではなかったかと推定されています。また、もとは土丸・雨山城にあって南北朝時代の南朝の武将橋本正高が八大龍王殿と称し、武運長久・

繁栄安泰の祈願堂であったといわれています。後年になって現在の和田の地に移したとの説がありますが、明らかではありません。

民家等2件は、江戸時代初期に建築された降井家書院と中家住宅です。

降井家書院は、岸和田藩の七人庄屋をつとめた降井家の書院です。地方の庄屋の邸宅に附属する好例とみなされ、昭和27年(1952)に国指定文化財に指定されました。屋根は茅葺で、八畳の上段の間と十二畳の次の間からなり、数寄屋風を多分に加味した造りは、熊取の庄屋の生活の一端を知ることができます。なお、令和3年(2021)から4年にかけて、書院内の狩野派絵師による障壁画の保存修理を実施しました。

中家住宅は、同じく岸和田藩の七人庄屋をつとめた中家の庄屋屋敷です。入母屋造・茅葺・妻入りで、独立性の強い土間は、近畿地方でも最大規模のもので寺院の庫裏や武家の台所を思わせます。また、架構形式をもつ土間と柱の省略の多い居室部は中世の雰囲気があります。間取りは、ダイドコロが大きく土間に張り出し、踏込みのあるナンドとザシキまわりは喰違三間取りを骨格とした古い様相をとどめています。この形式は泉南地域や和歌山県紀の川筋に分布しています。江戸時代末期の古図によると、屋敷構えは今よりもはるかに大きく、主屋の東側は式台玄関のつく客殿があるほか、長屋門や郷蔵をはじめ付属屋が多く建ち、背後に堀がめぐらされていました。昭和39年(1964)に国指定文化財に指定されました。

町指定文化財1件は、昭和3年(1928)に建てられた煉瓦造の旧中林綿布工場(現熊取交流センター)の汽かん室・受電室・事務所棟を平成15年(2003)に町指定文化財に指定しました。なお、汽かん室にあったランカシャーボイラー(町指定附)は二炉筒丸ボイラーと呼ばれるもので、工場操業時は、糸が切れないよう常に工場内ボイラーから発生する蒸気により加湿していました。工場の煉瓦は岸和田・貝塚などに工場があった大阪窯業(株)の煉瓦を使用しています。



図42 来迎寺本堂

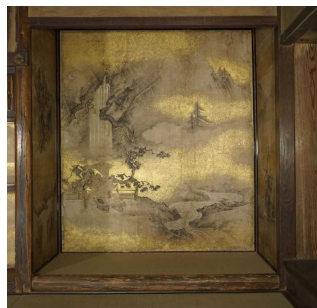


図43 降井家書院障壁画



図44 中家住宅の土間

②美術工芸品

【彫刻】

彫刻の指定は町指定文化財1件です。五月ヶ丘にある建武4年(1337)につくられた町内で一番古い和泉砂岩製の石造地藏菩薩立像です。オオガチ長者の建立寺院であった正福寺(廃寺)のものといわれています。像高65cm、幅28.8cmの厚肉彫りで、像容はデフォルメされており、右手に錫杖を持ち、杖頭部には五輪塔を陽刻し、左手に宝珠を持つなど、精巧な持物表現により優れた作行を示しています。蓮座は単弁5葉に間弁を入れ、その下に敷茄子を刻出しています。円形の光背には「熊取庄」の銘文がみられ、当時熊取荘が存在したことがわかる遺品として、平成9年(1997)に指定しました。



図45 石造地藏菩薩立像(昭和初期)

【考古資料】

考古資料の指定は2件です。いずれも町指定文化財で東円寺跡出土軒丸瓦及び軒平瓦と大久保E遺跡出土土器です。

東円寺出土軒丸瓦及び軒平瓦は、平安時代末期に創建されたと推定される東円寺で使用された八葉複弁蓮華文軒丸瓦と忍冬唐草文軒平瓦です。蓮華文軒丸瓦の特徴は、花びらを表現した蓮弁が非常に短いことと、中央の中房と呼ばれる不規則な円の周囲に鋸歯文と呼ばれる波線が巡っているところです。唐草文軒平瓦は、蓮華文軒丸瓦と対になるものと考えられ、唐草文が不定形の中心飾りを中心に左右非対称であることが特徴です。泉南地域の古代から中世期の地方寺院の特徴を表している貴重な資料であることから、平成8年（1996）に指定しました。

大久保E遺跡出土土器は、古墳時代初期の土器と考えられます。器種には壺・甕・高坏・器台・鉢・製塩土器・蛸壺型土器があり、土器が発見されたことにより、古墳時代には熊取において人々が住みついていたことがわかる貴重な資料です。とくに、製塩土器・蛸壺型土器が出土していることから、海の生産活動の関係性が推定されます。残存状態の良い土器161点を平成11年（1999）に指定しました。



図46 東円寺跡出軒丸瓦及び軒平瓦



図47 大久保E遺跡出土土器

【歴史資料】

歴史資料の指定は町指定文化財1件、大阪府登録文化財は1件です。町指定文化財は昭和初期に編さんされた熊取村誌関係資料です。『熊取村誌』は、熊取尋常高等小学校の南川幸助ら教員が中心となり史資料の調査・収集・編さんが行われ、昭和11年（1936）に刊行しました。関係資料は、『熊取村誌』のほか郷土調査資料、乾板写真などがあります。内容は、郷土の歴史・自然・住民・交通及び通信・村の仕組み・官公署・公共団体・教育・産業・村の生活など幅広く、また当時の熊取の風景や建物、学校、祭礼などの写真も多く掲載しています。これらは熊取の史資料を収集記録し、産業や社会生活の実態を示す貴重な資料であり、令和5年（2023）に指定しました。

大阪府登録文化財は降井家関係資料です。中世以来続く降井家に伝来した江戸時代初期から明治時代初期にわたる古文書、記録、絵図、典籍、棟札などで構成された334件（412点）の資料群です。江戸時代の和泉地域の地域史、岸和田藩政史、教養文化などがわかる貴重な資料として令和8年（2026）に大阪府登録文化財に登録されました。



図48 熊取村誌関係資料

(2) 無形文化財

無形文化財の指定等はありません。

(3) 民俗文化財

①有形の民俗文化財

有形の民俗文化財の指定は3件です。いずれも町指定文化財で、伊勢型紙、熊取神踊り用具、小谷の文政おかげ灯籠です。

伊勢型紙は、現在の三重県鈴鹿市白子・寺家の型紙師によって独占的に生産された染色用の型紙です。江戸時代に紀州藩の保護や株仲間の結成によって、全国に広がっていきました。熊取と伊勢型紙の関係は、江戸時代の『岸和田当地往来』に「熊取紺屋」の記述がみられるほか、伊勢型紙を所有していた旧家の屋号が「紺利」といい、江戸時代から明治時代初期まで紺屋を営み、その旧家から伊勢型紙の寄贈を受けたものです。伊勢型紙は本町の繊維産業の歴史を知ることができる貴重な資料であり、平成8年(1996)に指定しました。

熊取神踊り用具は、和泉地域に広く分布した「太鼓踊り」の一種で雨乞いの踊りに関係する締太鼓3口です。締太鼓は明治6年(1873)の紀年銘のもの1口があり、また歌本(町指定 附5冊)の中には江戸時代末期のものが含まれ、熊取独自の地域の文化財として平成8年(1996)に指定しました。

小谷の文政おかげ灯籠は、大阪府内で一番南に位置する文政13年(1830)のおかげ灯籠です。江戸時代、伊勢神宮への民衆の集団参拝を「おかげ参り」といい、それを記念して建てられました。おかげ灯籠は興蔵寺門前にあり、高さ230cmの花崗岩製で、基壇正面に「おかげ」の文字が刻まれています。泉州地域の伊勢信仰を知るうえで貴重な資料として平成19年(2007)に指定しました。

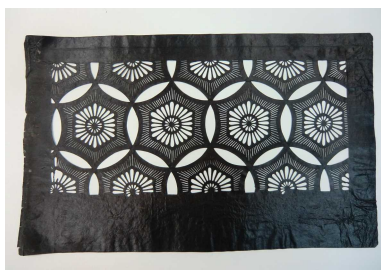


図 49 伊勢型紙



図 50 熊取神踊り用具 締太鼓



図 51 小谷の文政おかげ灯籠

②無形の民俗文化財

無形の民俗文化財の指定等はありません。

(4) 記念物

① 遺跡

史跡の指定は3件です。国指定史跡1件、町指定史跡2件です。国指定は日根^{ひね}荘^{のしょう}遺跡土丸・雨山城跡です。日根荘遺跡は、正和5年（1316）の「日根野村荒野開発絵図」（「九条家文書」宮内庁書陵部蔵）に描かれた寺社などの建築物やため池、丘陵などの景観がよく残されている全国的にも有名な中世の荘園遺跡です。その遺跡の指定地の一つが土丸・雨山城跡です。本町の雨山山頂の雨山城跡と泉佐野市の城^{じょう}の山山頂の土丸城跡とを結ぶ範囲に、南北朝から戦国時代にかけて階段状に削られた曲輪や、武者隠し、堀切など城郭に関わる遺構が残り、土器や瓦などが見つかっています。平成25年（2013）に日根荘遺跡の16カ所目の指定地に追加指定されました。

町指定文化財2件は橋本宗吉電気実験の地と旧熊取村道路元標^{どうろげん}です。橋本宗吉電気実験の地は、江戸時代中期に大坂の蘭学の祖といわれる橋本宗吉が中家の協力のもと、電気誘導の実験を中家住宅邸内の巨松を使い行いました。そのような、宗吉の著書『阿蘭陀始制エレキテル究理原^{きゅうりげん}』に「泉州熊取谷にて天の火を取りたる図説」として紹介されています。宗吉の行った実験は、わが国の電気学の発展に大きく寄与したとして平成8年（1996）に指定しました。



図52 橋本宗吉電気実験の地

旧熊取村道路元標は、道路の起点・終点を示す道路の付属物で、大正8年（1919）公布の旧道路法により、各市町村に1カ所設置されました。本町には当時の熊取村役場前の府道水間佐野線（現国道170号）の北側に昭和4年（1929）に設置されました。高さ58cm、幅奥行ともに25cmの角柱で花崗岩製です。全国の市町村に設置された道路元標は、交通網の広域・複雑化に伴いその役割を終え、その多くが撤去されました。旧熊取村道路元標は、近代熊取町における地域社会の様相を示す貴重な文化遺産として令和5年（2023）に指定しました。



図53 旧熊取村道路元標

② 名勝地

名勝地の指定は町指定文化財雨山の1件です。雨山は本町の南部に位置し、標高312m、山頂に雨山神社（雨山龍王社）が鎮座し、古くから雨乞いの山として信仰を集める熊取の象徴的な山です。山頂からは熊取と泉佐野のまちなみが眼下にひろがり、遠くは淡路島を一望できます。江戸時代



図54 雨山

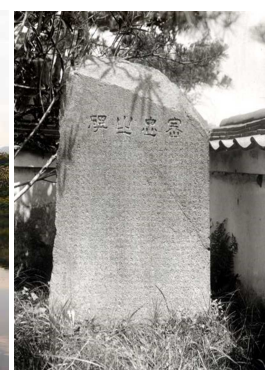


図55 雨山城碑
（昭和初期）

の寛政7年(1795)に編さんされた『和泉名所図会』によると、「熊取荘にあり、円頂、秀麗にして、松檜森蔚たり、歳旱に及ぶときは、ここに雨を祈る也」と記され、すでに江戸時代に名勝地として知られ、雨乞いの山であったことがわかります。昭和30年代まで旱魃の際、村人が雨乞いのために雨山に登りました。今でも9月1日には雨山の麓、成合の人々が雨山に登り、八朔の神事が執り行われています。平成8年(1996)に指定しました。

なお、幕末に土丸・雨山城を根拠として戦った南朝の橋本正高の忠誠を讃えるため、岸和田藩主岡部長発が藩士相馬肇に命じ、粉河街道と成合街道の分岐点に雨山城碑(町指定 附)が建てられました。

③動物・植物・地質鉱物

植物の指定は2件です。府指定文化財1件、町指定文化財1件です。府指定文化財は雨山のヤマモモです。江戸時代の地誌『和泉志』日根郡の部の土産の項に、泉佐野の大木・土丸や熊取の高田付近にヤマモモが自生していたことが記されており、雨山周辺も含めヤマモモが自生していたと考えられます。このヤマモモは、雨山山頂の雨山神社の社前にあり、樹高8.5m、幹回り3.8m、枝張12mで、樹高は低いものの、高地でありながら、これだけの大きさがあることが珍しく、平成28年(2016)に指定されました。

町指定文化財は降井家のくろがねもちです。国指定文化財である降井家書院の庭園内にあり、樹高17m、幹回り2mです。降井家の歴史を著した中盛彬の『先代考掘略』によると、延享2年(1745)の項に「大なるもちの木有之し也」という記述があり、当時も大きな樹木であったことがわかります。個人所有の樹木として貴重であることから平成8年(1996)に指定しました。



図 56 雨山のヤマモモ

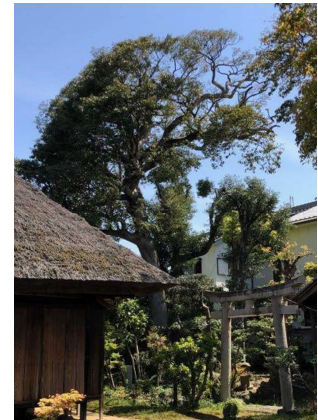


図 57 降井家のくろがねもち

(5) 文化的景観

文化的景観の選定はありません。

(6) 伝統的建造物群

伝統的建造物群の選定はありません。

2. 未指定文化財・その他の歴史遺産の概要

本町において把握している未指定文化財・その他の歴史遺産の件数は、令和8年（2026）8月現在で1,106件です。

表3 本町の未指定等文化財・その他歴史遺産（令和8年8月現在）

種 類			把握件数
有形文化財	建造物		253
	美術工芸品	絵 画	1
		彫 刻	45
		工芸品	0
		書跡・典籍	0
		古文書	43
		考古資料	87
		歴史資料	5
		石造物	93
無形文化財			0
民俗文化財	有形の民俗文化財		505
	無形の民俗文化財		8
記念物	遺跡		46
	名勝地		0
	動物・植物・地質鉱物		0
文化的景観			0
伝統的建造物群			0
文化財の保存技術			0
その他の歴史遺産			20
合 計			1,106

（1）有形文化財

①建造物

令和5年（2023）に（公社）大阪府建築士会による歴史的建造物の把握調査を実施し、1,051件の建造物が確認され、登録文化財候補も含め未指定文化財247件を把握しています。調査は民家、長屋門、蔵、工場、地蔵堂、農業小屋などを中心に行いました。主な建造物として、七山に昭和9年（1934）地元の篤志家により寄贈された和洋折衷様式の七山青少年センターがあります。小垣内に江戸時代の岸和田藩の七人庄屋をつとめた泉佐野の藤田家の長屋門が移築され残っています。大宮に明治時代、酢を醸造していた茅葺の民家があります。京都大学複合原子力科学研究所内に京都大学工学部の増田友也教授（1914～81）の設計による昭

表4 歴史的建造物把握調査

地区名	茅葺	鍔葺平屋	入母屋 つし二階	その他	合計件数
七山	1	13	14	47	75
大久保	1	69	26	95	191
紺屋	0	20	10	13	43
五門	1	36	23	84	144
野田	0	29	4	29	62
小垣内	0	26	17	15	58
大宮・久保	2	30	27	61	120
小谷	0	36	7	23	66
朝代	0	31	30	34	95
和田	0	23	24	42	89
成合	1	14	9	22	46
下高田	0	23	4	15	42
上高田	0	7	0	6	13
京都大学	0	0	0	7	7
合 計	6	357	195	493	1,051

※その他：平屋・二階建の入母屋、切妻、陸屋根など

※京都大学は、京都大学複合原子力科学研究所を示す

和 30 年代の現存する建物群があり、モダニズム建築として貴重なものです。

また、他にも橋 梁^{きょうりょう}やため池、ダムなどの土木遺産があります。

橋梁は国道 170 号の見出川^{みで}に架かる大宮橋があります。その主構のワーレントラスは明治 7 年（1874）に開通した神戸－大阪間の鉄道で使用されたイギリスのダーリントンアイアン社製のものが移築されたもので、現存するわが国最古の鉄道錬鉄製^{れんてつせい}トラスです。また、昭和 25 年（1950）に認可され、建設中止となった紀泉鉄道（貝塚市清見^{せいちご}駅から和歌山県粉河町^{こながわ}を結ぶ鉄道）のアーチ橋跡や、見出川橋梁橋台跡が今も七山に残っています。

ため池・ダムは見出川上流に江戸時代中期に築造された永楽池があるほか、灌漑用水^{かんがい}・上水道用水を確保するため永楽ダムが昭和 43 年（1968）に完成しました。



図 58 七山青少年センター



図 59 大宮橋渡初め式
（昭和 6 年）

②美術工芸品

【絵画】

絵画は昭和 57 年（1982）の寺院調査の際に、寺院で所有する仏画が把握されていますが、詳細調査は行われていません。正法寺には岸和田城主岡部宣勝画像^{おかべのふかつ}が伝わり、岸和田市の泉光寺所蔵のものと同一画像といわれ、文化 5 年（1808）の紀年があります。

【彫刻】

彫刻は同じく昭和 57 年（1982）の寺院調査の際に、寺院で所有する仏像が把握されていますが、詳細調査は行われていません。来迎寺には平安時代末期と推定される阿弥陀如来坐像^{あみだにょらいざぞう}、観音菩薩立像^{かんのんぼさつりゅうざう}、勢至菩薩立像^{せいしぼさつりゅうざう}の阿弥陀三尊像があり、台座・光背は当初のもので貴重です。

【工芸品】

工芸品は現在のところ把握していません。

【書跡・典籍】

書跡・典籍は現在のところ把握していません。

【古文書等】

これまで把握している古文書は熊取町史の編さん事業の際に、古文書調査によって、25 件を把握しています。個人所有の古文書の他、寺院の古文書、地区や講・座の共有文書、役場所蔵文書などがあります。とくに個人所有の古文書は中家が所蔵する中世以来の膨大な中家文書があり、とりわけ 820 点にのぼる中世文書^{じゅうけんじ}は、全国的にも希有なものとして高い評価^{けいちよう}を得ています。寺院の古文書は真宗大谷派浄見寺文書があります。寺の由緒がわかる慶長 4 年（1599）

の古文書をはじめ、幕末三筆の一人で画家・書家として有名な貫名海屋^{ぬき なかいおく}の書簡が残っています。役場所蔵文書は128点あり、その中には、鉄道計画^{とんさ}が頓挫^{とんざ}した紀泉鉄道や橋梁、自治体警察（昭和22～26年）に関係する文書があります。

【考古資料】

発掘調査等により町内から出土した考古資料は、遺物収納コンテナ250箱分があり、教育・子どもセンターで保管しています。

【歴史資料】

歴史資料は明治2年（1869）、岸和田藩知事名により発給された太政官高札^{だじょうかんこうさつ}（五榜^{ごぼう}の掲示）や同5年（1872）の火付高札^{ひつけこうさつ}、野田神社が氏子に接授した氏子札、岸和田藩主第5代岡部長^{おかべながあきら}著による西方寺の扁額^{へんがく}があります。

古写真は昭和11年（1936）に刊行した『熊取村誌』（町指定）に添付されているものです。熊取の風景や建物、学校、産業、祭礼（雨山踊り^{とうろまうり}、灯籠祭^{みょうこくじ}）、堺市^{さかい}の妙国寺の蘇鉄^{そてつ}、貝塚市^{こつみ}木積の釘無堂^{くぎなしどう}、お夏清十郎の墓、泉佐野市の茅渚宮^{ちのみのみや}旧跡など、熊取以外の写真も含め当時のことがわかる貴重な古写真142点（図62、63、64）がガラス板に画像が写った乾板写真として残っています。



図 60 熊取尋常高等小学校
（昭和初期）



図 61 雨山踊りのいでたち
（昭和初期）



図 62 燈籠祭（昭和初期）

【石造物】

石造物は道標や地蔵、石灯籠、供養塔、榜示石、力石、石祠、墓碑、戦争関係の歴史遺産である忠霊碑^{ちゅうれいひ}など93件を把握しています。

道標は石仏や供養塔などと兼ねあわせて作ったものが多くみられます。また雨山の登山道に町石6基（町指定附）があります。

地蔵は新しいものを含め51件です。とくに、阪上水神の地蔵は桜が丘にあり、四国八十八ヵ所参りができる地蔵として、大正時代には多くの参詣者で賑わったといわれています。また、和田にある「まれくす地蔵」は中盛彬の著した『かりそめのひとりごと』に、地蔵が安置されている「まれくす堂」として記されています。

石灯籠は「両宮大神宮」「天照皇大神宮」と刻された伊勢灯籠^{いしほくら}が和田（文久2年（1862）と朝代^{けいおう}（慶応4年（1868））にあります。また和田には「愛宕山大権現^{あたごさんだいこんげん}」と刻された石灯籠があります。大久保には「金毘羅大権現^{こんぴら}」と刻された天保9年（1838）の石灯籠があり、高田には上部が山形となった角柱型の天保6年（1835）の「金毘羅大権現^{てんぽう}」の石塔があります。

また、大森神社には大正時代に廃絶した五十四名座^{ごじゅうしみようざ}の石灯籠があります。五十四名座は後白河法皇が熊野詣の際、法皇の輿^{こし}を担いだ中家が選んだ熊取に住む54人で構成された宮座といわ



図 63 道標（小垣内）

れています。

庚申^{こうしん}信仰に関する青面金剛^{しょうめんこんごう}の石像が大久保^{ほくぼ}の法禅寺^{ほうぜんじ}と成合^{なりあひ}の西方寺で確認されています。法禅寺の青面金剛石像は境内の庚申堂に安置されており、貞享^{じょうきやう}3年(1686)の紀年が刻されています。また法禅寺には江戸時代末期に泉佐野^{いみせんどんや}の廻船問屋当主で文人の里井浮丘^{さといふきゅう}の長男が建てた筆塚があります。

朝代には大正3年(1914)に建立された大峰山の供養塔があります。

榜示石は大久保の降井家邸内に「南大畑村分 是より大宮橋見通 北中分」と彫られたものがあります。大畑村とは小谷村のことを指します。

力石は五門(中家住宅邸内)や七山(神社境内)、野田(区民会館)などでみられ、町内で8基を把握しています。

石祠は家屋形の石造物で、入母屋造^{いりもや}のものが多くみられます。大將軍、金比羅宮^{ことひらぐう}、福の神、上の宮明神などです。これらの中で、福の神は明治41年(1908)の神社合祀の際に集められ、大森神社に祭られています。また、若葉の川田橋付近に泉南地域で多くみられる牛を守護する神をまつる牛神^{うしがみ}の石祠があります。

墓碑は大久保共同墓地に中盛彬^{なかもりしげ}の「盛彬大人之墓」と刻された墓があり、高さ110cm、幅約50cm、側面には安政5年(1858)とあります。

また、町内の共同墓地に村相撲の力士の墓碑があります。「武蔵野之碑」(七山三ヵ字共同墓地)、「順浪碑」(大久保共同墓地)を把握しています。他にも鉄州和尚^{てつしゅうおしょう}の墓(延宝9年1681)が、五月ヶ丘にある町指定文化財の石造地藏菩薩立像のお堂の敷地内にあります。

戦争で亡くなられた方の慰霊のために建立された忠魂碑は大久保に2基あるほか、朝代・久保・和田・大宮に1基ずつ把握しています。大宮共同墓地のものは頌薫碑と刻されています。大久保共同墓地入口にある忠魂碑と朝代の忠魂碑は戦前に、その他の忠魂碑は戦後に建てられたものです。

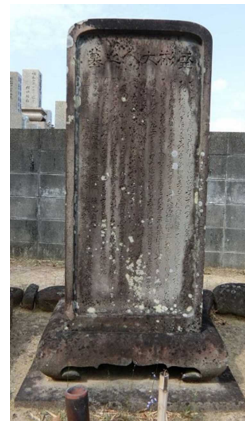


図 64 盛彬大人之墓



図 65 忠魂碑(久保)

(2) 無形文化財

無形文化財は現在のところ把握していません。

(3) 民俗文化財

①有形の民俗文化財

有形の民俗文化財は地車や生活用具等の民具があります。地車の歴史は古く、天保12年(1841)の「熊取谷檀尻書上げ」(中家文書)によると、8ヵ村が所有していたことがわかっています。現在は旧村の朝代・和田・大久保・紺屋・五門・野田・七山・小谷・久保・小垣内・大宮の11地区が地車を所有し、10月の大森神社の祭礼には宮入や駅前パレードが行われます。地車は、明治・大正時代に製作されたものがあり、今も地域で大切に曳行されています。

表5 熊取地車一覧

地 区	新 調	大 工	彫物師	備 考
朝代	大正11年(1922)	朝代 市松	一元 林峰、吉岡 義峰、森 晴秋	
和田	大正15年(1926)	絹井 楠次郎	玉井 行陽、金山 源兵衛	
大久保	大正7年(1918)	小川 喜兵衛	上間 庄平、伊藤 松吉	大正10年岸和田市宮本町より購入
紺屋	大正10年(1921)	森 某(大若門下)	開 正藤、西本 舟山	
五門	令和2年(2020)	板谷 始	木下 健司	
野田	明治22年(1889)	大崎 平兵衛	安田 卯ノ丸、相野 徳兵衛、保田 卯之松	大正11年岸和田市堺町より購入
七山	大正11年(1922)	久納 久吉、久納 幸三郎	開 正藤、開 生眠、西本 舟山、黒田 正勝	昭和4、5年岸和田市筋海町より購入
小谷	平成26年(2014)	植山工務店	岸田一門	
久保	昭和9年(1934)	植山 宗一郎	松田 正幸、石田 範治、後藤 更星、吉岡 喜代志	
小垣内	平成22年(2010)	井上 英明	木下 健司	
大宮	昭和8年(1933)	植山 宗一郎	吉岡 義峰、森 曲江	

※小垣内の先代地車は、大正9年(1920)に岸和田市筋海町より購入。現在、熊取交流センターに展示。



図66 だんじり祭り宮入
(昭和初期)



図67 だんじり祭り宮入
(令和4年)

民具は旧家で使用されていた生活用具や農具などがあります。民具の中には、江戸時代に正法寺で使用していた駕籠や、明治時代の朝和組消防ポンプ、燭台などから、昭和時代の氷冷蔵庫や木製レジスター、手回し式計算機、扇風機、蚊帳などの生活用具があります。

民具は熊取交流センター(煉瓦館)の倉庫や中家住宅の蔵で保管しています。



図68 朝和組消防ポンプ

②無形の民俗文化財

無形の民俗文化財は、いずれも祭礼行事があります。だんじり祭り、盆踊り、寺座（モミナ座）、宮座（中西座・福之神座）、八朔などです。寺座・宮座は神仏の前に座して祭祀を執り行う組織のことで、寺座は大久保の法禅寺において、宮座は紺屋の地区会館で行われています。八朔は例年9月1日に成合の人々が雨山山頂にある雨山神社にお参りし神事が執り行われています。

また、食文化は祭礼行事に伴う行事食があります。だんじり祭りは「カニ祭り」と呼ばれ、山盛りのワタリガニで招待客をもてなすほか、じゃこをむいて具にしたえびじゃこ寿司を食べます。古漬けのなすとじゃこ（あかえび）を醤油で炊いた「じゃこごうこ」が有名です。

熊取の伝統野菜は、泉州地域において水なすやふきの栽培が知られています。とくに水なすは気候風土、食習慣に対応して育成されたといわれています。皮が非常にやわらかく、浅漬けなどの漬け物に適し、今では全国ブランドになっています。

また、熊取と関係ある食文化の歴史として、砂場そばと久保の白ヤマモモがあげられます。

砂場そばは老舗そば屋の一つで、その発祥は大坂であるというのは有名な話です。江戸時代の寛政10年（1798）に刊行された地誌『摂津名所図絵』によると、大坂で評判のそば屋として「砂場いずみや」が挿絵入りで紹介され、和泉国熊取郷御門村の中家の一族が開いた店であると記されています。砂場の名の由来は大坂城築城の砂、砂利置き場のことで、現在の大阪市西区新町周辺あたりになります。新町南公園には「ここに砂場ありき」という石碑が建っています。砂場そばの歴史と熊取の中家が関係があることから、町内に「そば打ちクラブ」の団体があり、活動を通して歴史の普及に取り組んでいます。

久保の白ヤマモモは江戸時代の地誌『和泉志』の日根郡の部の土産の項に、「揚梅、大木・土丸二村に出ず、顆大にして核細く、味甜の蜜の如し、久保村の白揚梅また佳し」と記しています。果実の外がわが白っぽく、水気が多くておいしかったといわれ、高田付近（久保）に白ヤマモモが自生していたようです。江戸時代、ヤマモモは岸和田藩主にも献上されていました（『先代考拠略』）。



図 69 中西座



図 70 じゃこごうこ
（出典：熊取町 HP）

（4）記念物

①遺跡

町内に分布する埋蔵文化財包蔵地は 45 ヲ所が周知されています。主な内訳は、散布地がもつとも多く 15 ヲ所、ついで集落跡が 9 ヲ所、城館跡が 7 ヲ所、寺院跡が 6 ヲ所です。

また令和 6 年（2024）、産業発展の歴史を伝える歴史的価値をもつ「旧中林綿布工場跡」があらたに埋蔵文化財包蔵地として登載されました。

町内の神社は大宮にある大森神社の 1 社になります。平安時代中期に編纂された『和泉国神

名帳』日根郡の部によると、「従五位上^{おおもり}大杜社」が、大森神社にあたると考えられています。例年10月初旬には五穀豊穡^{ごこくほうじょう}を祈願し、豊作を感謝するだんじり祭りが行われ、11台のだんじりが大森神社に宮入し、境内は多くの人々で賑わいます。

なお、町内にあった56の村社や無格社は明治41年(1908)の廃仏毀釈により「大森神社」に合祀されました。



図 71 大森神社

一方、町内の寺院は14ヶ寺があり、宗派別でみると、臨済宗が5ヶ寺、曹洞宗が4ヶ寺、浄土真宗大谷派が2ヶ寺、浄土真宗本願寺派が1ヶ寺、浄土宗が1ヶ寺、日蓮宗が1ヶ寺が所在しています。禅宗系の寺院が大半を占めています。

旧街道は主なものとして粉河街道^{こかわ}、大熊街道^{おおくま}があります。粉河街道は貝塚市脇浜から王子、本町大久保、泉佐野市土丸、紀の川市粉河に至る紀州と泉州を結ぶ重要な街道です。粉河街道を押さえる山城として南北朝時代に南朝方の武将^{はしもとまさたか}橋本正高が土丸・雨山城を整備したほか、江戸時代には京都の聖護院門跡^{しょうごいんもんぜき}が行う「葛城灌頂」^{かつらぎかんじょう}(中津川修行)のルートとして、大久保の降井家住宅で休息し、粉河中津川に向かったことがわかっています。また、明治時代以降は千歯^{せんば}扱きの産地として有名な粉河(現紀の川市)から、熊取にも千歯扱きが流通するなど、生活には欠かせない街道であったことがわかります。

大熊街道は岸和田市土生から貝塚市の千石堀城、本町小垣内^{おがいと}、小谷^{おだに}、高田^{こうだ}、成合^{なりあい}を経て、泉佐野市大木で粉河街道に合流していました。室町時代は、粉河街道の間道として根来寺^{ねごろじ}・粉河寺の軍勢が往来する要路でした。なお、水間寺へと続く国道170号(水間街道)には水間寺までの道程を示す道標がみられます。

②名勝地

名勝地は現在のところ把握していません。

③動物・植物・地質鉱物

動物・植物・地質鉱物は現在のところ把握していません。

(5) 文化的景観

文化的景観は現在のところ把握していません。

(6) 伝統的建造物群

伝統的建造物群は現在のところ把握していません。

（7）文化財の保存技術

文化財の保存技術は現在のところ把握していません。

（8）その他の歴史遺産

その他の歴史遺産は昔話、地名があげられます。

昔話は「七里地蔵縁起」や「成合寺と愚白和尚」など本町に關係する昔話が14話あります。また、小谷や七山には水と人々の関わりを示す弘法大師伝説が残っています。

地名はその土地の地形や歴史、人々の活動などを反映しており、地元の自然や歴史を物語る重要な遺産です。本町は8大字、2,500の小字があります。なかでも久保には中世城跡に關係する「的場」「中堀」「土居の内」や条里制に由来する「二ノ坪」「五ノ坪」「八ノ坪」といった小字名がみられます。野田の中央小学校付近は、「タタリ」「ロノ後」といった小字名があり鍛冶屋跡と考えられます。

【関連する制度】

3. 日本遺産

日本遺産とは日本各地の歴史的な魅力や特色など、日本が世界に誇る文化や伝統を語る「ストーリー」を、地元の単独または複数の自治体が申請し、その「ストーリー」を文化庁が認定するもので、全国で104件が認定されています。ストーリーを構成する有形・無形の文化財を積極的に活用・発信し、地域振興につなげることを目的としています。

かつらぎしゅげん

『葛城修験』一里人とともに守り伝える修験道はじまりの地』の概要

令和2年（2020）、日本遺産『^{かつらぎしゅげん}葛城修験』一里人とともに守り伝える修験道はじまりの地』が認定されました。当初は和歌山県、大阪府、奈良県の3府県にまたがる19市町村、構成文化財91件でしたが、令和3年（2021）に2件の文化財が追加認定されたことで20市町村、93件となりました。さらに令和6年（2024）に熊取町、貝塚市、泉南市の2市1町の文化財が追加認定され、23市町村、97件となりました。

本町は、大久保にある降井家住宅が葛城修験に関わることを示す古文書が見つかったことにより、追加認定を受けたもので、本町にとっては、初めての日本遺産になります。

認定自治体

和歌山県（和歌山市、橋本市、紀の川市、岩出市、かつらぎ町）・大阪府（岸和田市、泉佐野市、河内長野市、和泉市、柏原市、^{ごせ}阪南市、岬町、河南町、千早赤阪村、太子町、泉南市、貝塚市、熊取町）・奈良県（五條市、御所市、香芝市、^{かつらぎ}葛城市、王寺町）

ストーリーの概要

大阪と和歌山の府県境を東西に走る和泉山脈、大阪と奈良の府県境に南北にそびえる金剛山地。総延長 112 km に及ぶこの峰々一帯は「葛城」と呼ばれ、修験道の開祖といわれる役行者^{えんのぎょうじや}がはじめて修行を積んだ地であり、世界遺産の吉野・大峯と並ぶ「修行の二大聖地」と称されています。そしてその修行にはいつの時代も、この地に暮らす人々の深いつながりがありました。

本町所在の構成文化財

名 称：降井家住宅

所在地：本町大久保

概 要：降井家は江戸時代の岸和田藩庄屋です。泉佐野市の奥家に残る「奥家文書」(「阿遮羅院書状」)^{あしゅらいん}によると、江戸時代後期の文化年間(1804～1818)に、京都の聖護院門跡^{しょうごいんもんぜき}が行う「葛城灌頂」^{かつらぎかんじょう}(中津川修行)において、修行の休息所として利用されたことが記されています。中津川大護摩供養修行に関する「阿遮羅院書状」によると、3月12日に貝塚宿泊の後、翌日13日に熊取の大久保にある中左太夫家^{なかさだゆうけ}で小休止することが記されています。この中左太夫家は降井家のことです。



図 72 降井家住宅

4. 近代化産業遺産

近代化産業遺産とは、日本の産業の近代化に貢献した建造物や機械、文書などを経済産業省が認定する文化遺産のことです。幕末から第二次世界大戦期までの間に近代的な手法で建設され、日本の近代化に貢献した産業、交通、土木に関する遺産を指します。平成 19 年(2007)に 33 件の「近代化産業遺産群」と、それに付随する「近代化産業遺産ストーリー」が公表され、これらを構成する 575 件が認定されました。

本町は 33 件のうち、『東洋のマンチェスター』大阪と西日本各地における綿産業発展の歩みを物語る近代化産業遺産群の構成遺産として、熊取町の綿産業関連遺産である旧中林綿布工場(現熊取交流センター)が認定遺産となりました。なお、大阪府内では綿業会館(大阪市中央区)、田尻歴史館・旧谷口家吉見別邸(泉南郡田尻町)も認定されています。

構成遺産の自治体

大阪府(大阪市・熊取町・田尻町)・兵庫県(尼崎市・洲本市)・三重県四日市市・和歌山県有田市・岡山県(倉敷市・井原市)・愛媛県八幡浜市・熊本県熊本市

熊取町の綿産業関連遺産

旧中林綿布工場（熊取交流センター）、同汽かん室、同受電室、同事務所棟、同機械類（ランカシャーボイラー・広幅綿織機）

5. くまとり世間遺産

（一社）くまとりにぎわい観光協会は、身近な場所に残る珍しいもの、その地域にしかない希少なものを「くまとり世間遺産」として認定しています。幻の「紀泉鉄道」アーチ橋跡、見出川の一枚岩、手書きの七山青年団法被、熊取の棚田（成合・和田）など、人・もの・風景 35 遺産が認定されています。

第3章 熊取町の歴史文化の特性

本町は、中世以来今日まで地名が変わらない歴史的特性があり、「熊取」という地域独自の歴史文化を形成してきました。そこで、これまでの本町の歴史の変遷や町内文化財の概要を踏まえ、熊取の歴史文化の特性は以下の3つのテーマに整理することができます。そして、いずれも江戸時代、岸和田藩（岡部氏の時代）の七人庄屋をつとめた中家や降井家と関係しています。

1. 熊取谷の政治・経済・文化を支えた中家と降井家の歴史文化

江戸時代、中家・降井家は岸和田藩の七人庄屋をつとめた旧家である。両家は、熊取谷の行政全般を委ねられ、村々の年貢の徴収や年寄・組頭の決定を行うほか、岸和田藩の財政を賄うため札元となり藩札を発行した。また、人形浄瑠璃など都市の芸能を招き入れるなど、豊かな歴史文化を育み、当時の庄屋の暮らしがわかる建物が文化財として遺っている。

江戸時代、中家・降井家は岸和田藩の七人庄屋をつとめた旧家です。中家は平安時代、後白河法皇が熊野行幸の際に立ち寄り、行宮（仮設の御所）とした伝承が残り、当主は代々「中左近」を名乗りました。室町・戦国時代に紀伊国根来寺の氏人となり、その勢力を背景に和泉国や紀伊国北部の田畠を買い集めるなど、この地方における政治・経済の担い手として活躍しました。

中家には中世以来の膨大な古文書（中家文書）が伝来し、820点にのぼる中世文書は、歴史資料として全国的にも高い評価を得ています。

降井家は中家同様、根来寺の氏人となり、江戸時代、代々「中左太夫」を名乗りました。江戸時代末期、京都の聖護院門跡が行う「葛城灌頂」（中津川修行）において、降井家が休息所になっています。

両家は、熊取谷の行政全般を委ねられ、村々の年貢の徴収や年寄・組頭の決定を行うほか、熊取の水がめである永楽池の築造に関わりました。経済面では岸和田藩の財政を賄うため札元となり藩札を発行しました。文化面では人形浄瑠璃や六斎念仏・興行相撲など都市の芸能を積極的に招きいれています。

また、中家からは徳川家旗本の根来盛重や幕末の思想家瑞雲斎、明治時代に衆議院議員をつとめた中辰之助、降井家からは天文学や地誌などの書物を著した中盛彬が輩出されるなど、熊取の政治・文化面で大きな影響を与えています。

現在、国の重要文化財中家住宅（町所有）や重要文化財降井家書院（個人所有）が保存・管理され、中家住宅は1年を通して一般公開を行い、当時の庄屋の歴史文化が建物を通して継承されています。

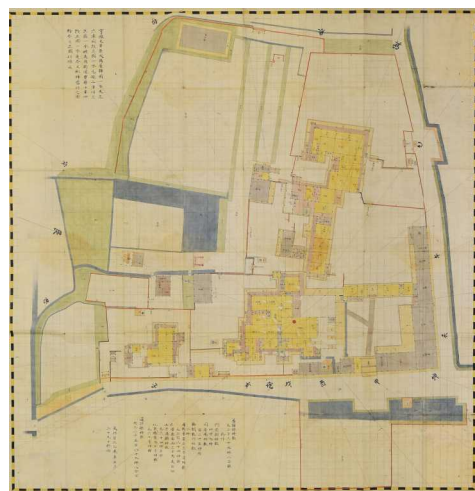


図73 降井家屋敷図（天保6年降井家蔵）



図74 永楽池

2. 水とともに生きてきた人々の歴史文化

本町は、瀬戸内気候区内に位置し、大きな河川が少なかったことから、永楽池などのため池や井堰がつくられ、町内のいたるところに水路がはりめぐらされ、田畑を潤してきた。また、南部に位置する雨山は、古くから雨乞いの山として信仰を集め、江戸末期から昭和初期にかけて旱魃が続くと、雨山山頂において雨乞いが行われた。現在でも雨乞いに関する民俗行事が継承されている。

水は日常生活を営むうえで、また稲作等の農業活動を行ううえで欠くことのできないものです。時には、水をめぐって村同士が水争いをし、村では水利について厳しい取り決めがなされるなど、水を確保することは村を運営するうえでもっとも重要でした。

熊取は、江戸時代から良質の米がとれることで知られています。瀬戸内気候区内に位置し、大きな河川が少なかったことから丘陵部に入り込んだ谷をせき止め、ため池や井堰が造られ、水を確保してきました。中世の「中家文書」によると口無池や青池など、数多くのため池がすでに16世紀頃に築造され、江戸時代には140近いため池が存在しました。その中でも高田奥の谷に位置する永楽池は、儒学者 斎 静斎の助言により中・降井の両庄屋をはじめ、熊取の人々が総力を結集し、明和8年（1771）に完成しました。静斎は水の利用にあたり、不公平のないよう「永楽池四ヵ条」を定めました。永楽池の水は昭和43年（1968）、下流の見出川をせき止めた永楽ダムが完成するまで熊取谷12ヵ村の田畑58町を潤しました。また、万治3年（1660）、熊取でもっとも大きい大浦の大池の築造にも降井家関わっています。

ため池以外には現在でも町内のいたるところに水路がはりめぐらされ、熊取ではため池の樋を管理する責任者をバンドウ・ミズイレと呼び、水の管理を行っています。

また、本町の南部に位置する雨山（標高312m）は、水を取水する重要な水源であり、熊取の人々にとって象徴的な山となっています。山頂には闇 龍神を祭神とする雨山神社（雨山龍王社）が鎮座し、古くから雨乞いの山として信仰を集めました。江戸末期から昭和初期にかけて旱魃が続くと、雨山山頂において雨乞い祈願のため雨山踊りが行われました。この雨山踊りは大久保の降井家邸内で踊り始め、その後雨山山頂に登ったといわれています。

そして、昭和30年代まで旱魃時に村人が雨乞いのために雨山に登りました。現在でも毎年9月1日に雨山の麓、成合の人々が雨山に登って、雨山神社にお参りする八朔と呼ばれる神事を執り行うなど、人々の生活の中に水にまつわる民俗行事が継承されています。



図 75 永楽池絵図（降井家蔵）



図 76 雨山踊り（昭和初期）

3. まちの発展を支えた繊維産業の歴史文化

江戸時代、熊取を含む泉州地域は、換金作物である木綿栽培がさかんで、「和泉木綿」として広く知られていた。そうした歴史的背景もあり、明治時代末期から大正時代にかけて繊維産業が発展した。中でも五門の中林綿布工場は泉州の織物業界をリードする存在であり、工場周辺には従業員の宿舎や芝居小屋などがあり、ひとつの町のような賑わいがあった。工場は熊取交流センターとして再生し、今も繊維産業の歴史を伝えている。

江戸時代、熊取谷の運営は中家・降井家の両家が行い、換金作物である木綿がさかんに栽培され、当地で作られた木綿は「和泉木綿」として広く知られていました。熊取谷では農産物の総生産高の2割を木綿が占めており、そうした歴史的背景もあり、明治時代末期から大正時代にかけて繊維産業が発展しました。

明治40年(1907)には泉南織布工場、同41年(1908)中林綿布工場、同45年(1912)熊取織物株式会社、道明織物工場など数多くの織物・タオル工場が設立されました。大正14年(1925)に熊取村の織物工場数は17、従業員数は859人で、「国勢調査」によると、当時の人口が5,689人であったことから、多くの人が繊維産業に携わっていました。これらの工場で製造された製品は、国内はもとより海外(中国・インドなど)に輸出されていきました。

昭和3年(1928)、五門に建設された中林綿布の新工場は、最新鋭の自動織機をいち早く導入し、生産を拡大するなど、泉州の織物業界をリードする存在となりました。工場敷地には従業員用の宿舎や食堂が建ちならび、周辺には「熊取座」などの芝居小屋があるなど、ひとつの町のような賑わいがありました。

戦後、繊維産業は好不況を繰り返し、昭和40年代以降、まちの発展を支えてきた繊維産業は衰退していきました。昭和26年(1951)に制定された町歌の歌詞に「工場の煙霞して積み出す織布」とあり、熊取が繊維産業のまちとして発展しているようすがわかります。平成17年(2005)、熊取で繊維産業の中心的役割を果たしてきた中林綿布工場は、熊取交流センターとして再生し、町の生涯学習・文化の拠点施設として住民活動を支援しています。館内には工場が稼働していた頃の自動織機や繊維産業の資料を展示しており、当時工場では人が働き続けていた姿を想像することができます。



図 77 中林綿布工場（昭和初期）

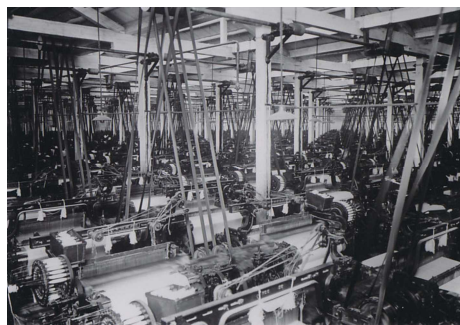


図 78 中林綿布工場の自動織機（昭和初期）

第4章 文化財の把握調査

1. 既存の文化財の把握調査の概要

本町の文化財に関する把握調査の現況については、概ね次のとおりです。

(1) 総合把握調査

総合的な把握調査は、昭和11年(1936)に刊行した「熊取村誌関係資料」(町指定)があげられます。熊取尋常高等小学校教員の南川幸助みなみがわこうすけらが中心となり史料の調査・収集・編さんが行われました。その内容は郷土の歴史・自然・住民・交通及び通信・村の仕組み・官公署・公共団体・教育・産業・村の生活など幅広く網羅し、当時の熊取の風景や建物、学校、祭礼などの写真が数多く掲載されています。また、村は『熊取村志』と題した小冊子を刊行し、他の町村に配布、周辺町村の郷土史編さん事業の参考となりました。

昭和50年代にはいと、大規模な宅地開発によってかつての農村景観は姿を変え、本町の文化財が危機的状况になり、先人が大切にしてきた歴史文化を残すべく文化財調査が行われるようになりました。その成果は『熊取町小字名集』(昭和48年)、『熊取町の歴史(Ⅰ)』(昭和51年)、『熊取町の民具』(昭和54年)、『熊取町の方言』(昭和56年)、『熊取町の石造物』(昭和56年)、『熊取町の寺院』(昭和57年)を刊行しました。

そして、本格的に町史編さん事業が始まるのは昭和60年代になってからです。昭和59年(1984)に町史編さん準備委員会を設置、同60年(1985)、執筆委員長三浦圭一みうらけいいち(立命館大学)のもと編さん委員会による編さん事業を開始し、『熊取町史』本文編1冊、史料編2冊を刊行するというものでした。編さん事業開始後まもなく、昭和61年(1986)に町制施行35周年記念事業として、町史ダイジェスト版『熊取の歴史』を刊行しました。平成2年(1990)、執筆委員長水本邦彦みずもとくにひこ(京都府立大学)が中心となり『史料編Ⅰ』を刊行、その後、同7年(1995)に『史料編Ⅱ』、同12年(2000)に『本文編』・『史料編補遺』を刊行して、町史編さん事業は完結しました。その間、町史紀要として、昭和60年(1985)に『家記・先代考かき掘略せんたいこうきりやく』、昭和63年(1988)に『中瑞雲斎関係書簡集』、平成8年(1996)に『考古学から熊取地域を考える』、『京都大学研究用原子炉の誕生』の4冊を刊行しました。



図 79 熊取町史

表 6 熊取町史 (全 3 巻)・町史紀要 (全 4 冊) 刊行状況

資料名	刊行年
熊取町史紀要第 1 号 家記・先代考掘略	昭和 60 年 (1985)
熊取町史紀要第 2 号 中瑞雲斎関係書簡集	昭和 63 年 (1988)
熊取町史史料編Ⅰ	平成 2 年 (1990)
熊取町史史料編Ⅱ	平成 7 年 (1995)
熊取町史紀要第 3 号 考古学から熊取地域を考える	平成 8 年 (1996)
熊取町史紀要第 4 号 京都大学研究用原子炉の誕生	平成 8 年 (1996)
熊取町史本文編	平成 12 年 (2000)
熊取町史史料編補遺	平成 12 年 (2000)

（２）国・府の調査

大阪府は昭和 32、33 年にかけて民家調査を実施しました。府内の重要な民家 14 棟の調査が行われ、中家住宅も対象となり、『大阪府の民家』の報告書が刊行されました。

昭和 57・58 年度（1982・1983）に府下 135 ヲ所の民俗文化財分布調査、昭和 61 年度から平成 2 年度（1986～1990）に歴史の道調査、昭和 62・63 年度（1987・1988）に民謡緊急調査、平成 10・11 年度（1998・1999）に近代和風建築総合調査、平成 16 年度（2004）に盆踊り調査、平成 16 年度から 18 年度（2004～2006）に近代化遺産総合調査が実施されました。本町も府の要請に応じて調査に協力し、民俗文化財分布調査は和田が対象となりました。民謡緊急調査は熊取の民謡 51 曲が録音され、そのうち 8 曲の歌詞が報告書に掲載されています。近代和風建築総合調査は住宅 2 件・酒蔵 1 件の 3 件が調査対象となりました。盆踊り調査は町内 12 ヲ所で盆踊り（横山くどき）が行われていることが報告書でわかります。近代化遺産総合調査は旧中林綿布工場（熊取交流センター煉瓦館）が報告書に掲載されています。

（３）民間団体等の調査

大学など民間団体等が本町において、文化財調査を実施した事例は多くはありません。

昭和 49 年（1974）、大越勝秋が著した『宮座』は、泉州地域の宮座・寺座について、つぶさに調査しまとめたものであり、本町の宮座についても詳細に記されています。平成 16 年（2004）、本町の「泉州の古文書を読む会」は真宗大谷派浄見寺の古文書調査を行い、『七宝山浄見寺文書』が刊行されています。その後、平成 27 年（2015）に「泉州の古文書を読む会」から『貫名菰翁書簡集』が刊行されています。

（４）住民へのアンケート調査

教育委員会において、文化財保存活用地域計画に係る住民アンケート調査（WEB アンケートを含む）を令和 7 年 12 月 14 日から令和 8 年 1 月 31 日にかけて実施しました。文化財に興味・関心があるか、文化財を次世代に継承していくためには、どのようなことをすべきか、未来に残したい「くまのりの宝物」は何かなど 7 項目について質問を行い、住民 393 名から回答が得られました。結果については、本町における今後の文化財の保存・活用を行うにあたり、取り組みに反映していきます。

2. 調査の内容

既存の文化財の把握調査の概要であげた調査を中心に、類型ごとに調査の内容を整理します。

(1) 有形文化財

①建造物

【民家調査】

昭和11年(1936)、熊取尋常高等小学校教員の南川幸助らが中心となり、熊取村誌の編さん事業に伴う史料調査が行われ、降井家の奥書院が桃山時代のものであることが判明しました。

昭和62年(1987)は、町内に残る15棟の茅葺民家^{かやぶきみんか}の調査を行い、調査報告書を作成しました。平成15年(2003)、建造物把握調査を実施し、令和5年(2023)、「文化財保存活用地域計画」の作成にあたり、文化庁文化芸術振興補助金を受け(公社)大阪府建築士会に委託を行い、歴史的建造物調査を実施しました。外観を観察するというものでしたが、旧村以外にも京都大学複合原子力科学研究所や府営団地なども調査を行い、調査結果として1,051件の歴史的建造物を把握しました。全体として伝統的工法の大きな住宅や工場・寺社などが残っていることがわかりました。

【社寺調査】

昭和11年(1936)、熊取村誌の編さん事業に伴う史料調査が来迎寺において行われ、応永31年銘(1424)の鬼瓦が発見されました。

昭和24年(1949)に、来迎寺本堂が重要文化財に指定され、昭和34年度(1966)から35年度(1968)にかけて解体修理工事が行われ、その際、過去の修理の年代がわかる棟札が見つっています。

町内の社寺調査は、昭和55年度(1980)に大森神社と14ヶ寺の調査を実施し、『熊取町の寺院』(昭和57年)を刊行しました。

【近代産業遺産調査】

平成14年(2002)、旧中林綿布工場跡汽かん室内ボイラーの調査を実施しました。ボイラーはランカシャータイプのボイラーで、現存しているのは珍しく、熊取交流センターに一部を保存・展示しています。

【橋梁調査】

令和7年(2025)、町内の橋梁の把握調査を実施しました。土木学会評価基準等を参考に5件の橋梁と建設当時の設計図面などの関係資料2件を把握しています。

②美術工芸品

【絵画】

把握調査は実施していません。

【彫刻】

平成 29 年（2017）、6 ヶ寺（^{しょうほうじ}正法寺・^{ほうじゅじ}法樹寺・^{えりんじ}恵林寺・^{しょうえいじ}正永寺・^{ほうげんじ}芳元寺・^{こうしょうじ}興正寺）の仏像調査を実施しました。すべての寺院の仏像に関しては十分に調査できていない状況です。

【工芸品】

把握調査は実施していません。

【書跡・典籍】

本町は書跡・典籍の把握調査は実施していません。なお、大阪府は令和 7 年（2025）、大阪府登録文化財の候補として、降井家関係資料の調査を行い、典籍があることを把握しています。

【古文書】

古文書は、中家が所蔵する古文書調査を行い、昭和 62 年（1987）に『和泉国日根郡熊取谷中家文書目録』を刊行しました。その後は町史編さん事業において、町内に残る古文書の調査を行い、降井家や旧家などを中心に目録を作成し、本町にとって重要な史料は『熊取町史』史料編Ⅱに掲載しました。

【考古資料】

考古資料は、町が実施した発掘調査によって発見された遺物の整理・調査を行い、台帳によって管理しています。また、発掘調査の成果は報告書として刊行し、図書館などで公開しています。

【歴史資料】

道標を含めた石造物は、昭和 53・54 年度（1978・1979）に町内に所在する石造物の把握調査を実施し、その成果は『熊取町の石造物』として刊行しました。

また、地名は小字集として『熊取町史』史料編Ⅱに掲載しました。

（2）無形文化財

把握調査は実施していません。

（３）民俗文化財

①有形の民俗文化財

生活用具などの民具資料は、昭和 51・52 年度に調査を行い、『熊取町の民具』を刊行しました。

なお、町民から寄贈を受けて本町が所蔵している生活用具や農具などの民具資料は、熊取交流センターなどで展示・公開しています。

②無形の民俗文化財

昭和初期に復活した雨山踊りは戦後途絶えましたが、昭和 49 年（1974）、これまでの雨山踊りに関係する資料をとりまとめて『熊取町雨山踊り』を刊行しました。民俗調査は昭和 54 年（1979）に高田地区において、宮座・講・墓制について聞き取り調査を行い、報告書を作成しました。昭和 57 年（1982）、方言調査を行い、『熊取町の方言』を刊行しました。その後、昭和 60 年（1985）から始まった町史編さん事業において、民俗編の項目がないことから、平成 8 年から 11 年度（1996～1999）にかけて旧村 13 ヲ村（大久保・五門・紺屋・成合・朝代・野田・小垣内・高田・和田・大宮・久保・小谷・七山）を対象とした民俗調査を実施し、『熊取の民俗』を刊行しました。また、平成 5 年（1993）以降、寺座（モミナ座）・宮座などを調査し、記録を整理しています。この他、大阪府が平成 17 年度（2005）に盆踊り調査を行っています。

（４）記念物

①遺跡

遺跡は、泉佐野市と共同で平成 21・22 年度に土丸・雨山城跡の調査を実施しました。その結果、土丸・雨山城跡が国史跡日根荘遺跡の変遷と密接な関係をもつことが明確になり、平成 24 年（2012）に報告書を刊行しました。同 25 年（2013）、国史跡日根荘遺跡に追加指定されました。

②名勝地

把握調査は実施していません。

③動物・植物・地質鉱物

平成 6 年（1994）に熊取ため池生き物調査、熊取自然観察マップ調査が行われ、翌年（社）大阪自然環境保全協会に委託し、動物・植物などの自然調査を実施し、『熊取の自然』を刊行しました。

(5) 文化的景観

把握調査は実施していません。

(6) 伝統的建造物群

把握調査は実施していません。

(7) 文化財の保存技術

把握調査は実施していません。

(8) その他の歴史遺産

大阪府が昭和 61 年度（1986）から 5 年間にわたり実施した歴史の道調査事業によって総合的調査が行われました。昭和 61 年に熊野・紀州街道の調査が行われ、本町を通る粉河街道、水間街道とあわせて街道沿いの建造物、美術工芸品、道標の石造物などの文化財が把握されています。

3. 文化財の把握調査の状況

本町はこれまで、歴史文化に関する把握調査として、昭和50年以降、文化財の調査を行い、その成果を冊子として刊行してきました。昭和60年代になると町史編さん事業に伴う調査以降、総合的な調査が実施されていません。

文化財類型別にみると有形文化財の建造物、美術工芸品の古文書、考古資料、石造物、民俗文化財、記念物の遺跡、その他の歴史遺産については、概ね調査が完了している状況です。一方で有形文化財の美術工芸品の歴史資料、記念物の動物・植物・地質鉱物は一部の調査にとどまっています。有形文化財の美術工芸品の絵画、彫刻、工芸品、書跡・典籍、無形文化財、記念物の名勝地、文化的景観、伝統的建造物群、文化財の保存技術は未調査であり、今後は計画的な把握調査の実施が求められます。

これまで実施されてきた把握調査による把握状況は表7のとおりです。

表7 本町の文化財の把握状況

種 類		実施状況	
有形文化財	建造物		○
	美術工芸品	絵 画	×
		彫 刻	×
		工 芸 品	×
		書跡・典籍	×
		古文書	○
		考古資料	○
		歴史資料	△
		石造物	○
無形文化財		×	
民俗文化財	有形の民俗文化財	○	
	無形の民俗文化財	○	
記念物	遺跡	○	
	名勝地	×	
	動物・植物・地質鉱物	△	
文化的景観		×	
伝統的建造物群		×	
文化財の保存技術		×	
その他の歴史遺産		○	

○：概ね調査完了 △：一部の調査にとどまっている
 ×：未調査

第5章 文化財の保存と活用に関する将来像

1. 将来像

本計画は、指定等文化財だけでなく未指定文化財も含めた地域の文化財すべてを保存・活用することにより、地域の特性を活かし、地域振興につなげ、未来に歴史文化を継承していくことを目的とします。

本町は、中世以来今日まで地名が変わらない歴史的特性があり、「熊取」という地域独自の歴史文化を形成してきた町といえます。その特性は、熊取谷の政治・経済・文化を支えた中家と降井家の歴史文化、水とともに生きてきた人々の歴史文化、まちの発展を支えた繊維産業の歴史文化など、時代ごとに熊取の人々の叡智と生きた足跡がつまった豊かな歴史文化にあります。

しかし、先人によって生み育まれてきた知恵や経験は、時を経ていく間に人々の中から消え、何もしなければ貴重な歴史文化が失われてしまうおそれがあります。こうした先人から受け継いできた伝統ある歴史文化を大切にするとともに、その重要性を認識し、地域の宝を次世代に引き継いでいかなければなりません。そのためには、行政はもとより地域、所有者、専門家、関係団体などが協力することにより、計画に関わるすべての人が総がかりとなって推進していくことが重要です。

本章では、その目標に向けた将来像を定め、次章以降において保存・活用に関する課題と方針、さらには取組みを定めます。

上位計画である『第4次熊取町総合計画』は、「住みたい 住んでよかった とともにつくる “やすらぎ” と “ほほえみ” のまち」を町の将来像に掲げ、その実現に向けて、地域社会全体で歴史文化を保存・活用・継承することにより、住みたい魅力あるまちづくりにつながるものと考えます。

これらを踏まえ、本町が目指す本計画の「文化財の保存と活用に関する将来像」を次のとおり定めます。

**中世以来の地名を引き継ぐ「くまとり」の
豊かな歴史文化を守り、伝え、みんなとともに未来を紡ぐ**

2. 文化財の保存・活用に関する方向性

上記の将来像を実現していくために、文化財の保存・活用に関する基本的な方向性として以下の3つを示します。

(1) 方向性1 歴史文化を守り伝える

町内に所在する文化財の調査は十分ではなく、把握調査も進んでいない分野があります。まずは文化財を把握するための調査を実施し、さらに詳細調査を進め適正な評価と価値づけを行ったうえで、文化財の指定や登録などの取組みを行い、その価値を維持し将来に守り伝え、未来に紡いでいきます。

(2) 方向性2 歴史文化を活用する

文化財の確実な保存を図っていくためには、行政のみならず、地域、関係団体など総がかりで取り組んでいく必要があります。地域や関係団体の関心を高め、意識向上を図るため、行政、所有者、商工・観光関係団体等が連携して、実物の文化財を活用した展示などの取組みやICTを活用した学ぶ機会の充実や情報発信など、魅力ある取組みを行い、地域の活性化や新たなまちづくりにつなげていきます。

(3) 方向性3 歴史文化を継承する仕組みをつくる

文化財を守り伝えていくのに重要なのは、マンパワーにほかなりません。保存・活用を担う人材づくりが不可欠となります。行政や所有者、関係団体が連携して、推進体制を強化し、歴史文化を継承していく仕組みをつくるとともに、人材育成に取り組んでいきます。

第6章 文化財の保存・活用に関する課題・方針

1. 文化財の保存・活用に関する課題

前章までの本町における文化財の現状や特徴を踏まえ、また前章で設定した将来像や方向性を実現していくために、文化財の保存と活用に関する主な課題として、以下があげられます。

(1)「歴史文化を守り伝える」に関する課題

①文化財の把握のための確認調査が必要

これまでは、主に町史編さん事業に伴い確認調査等を行い、また本計画の作成にあたり歴史的建造物等の確認調査を行いました。未調査の分野があり、また、調査から一定の期間が経過し更新の必要があるなど、調査されていない分野の文化財が多く残されています。

文化財類型でみると、有形文化財（美術工芸品）、とくに絵画や彫刻、工芸品、書跡・典籍はこれまでに調査を行っておらず、記録作成は十分ではありません。今後の適切な保存・活用を進めていくためには、まず未調査の文化財の把握のための確認調査が必要です。

②調査成果のデジタル化が必要

これまでの調査等で得られた成果について、情報の整理・保管が一元化されておらず、その活用や管理が有効に図られているとはいえない現状があります。また、調査結果等については紙媒体が多く、経年劣化等の物理的な損傷は避けられず、その成果を後世に継承していくためには資料のデジタル化を行うなど多様な手段を講じていく必要があります。

③文化財を適切な環境で保管するための環境整備が必要

本町が管理、保管している古文書や民具、出土遺物などは熊取交流センターなどの社会教育施設に分散保管されているため、文化財の紛失等が起きないよう適切な環境で保管できるように保管施設の整備が必要です。

④未指定文化財の評価、価値づけを行い、適正な保存対策が必要

町内の未指定文化財の把握が十分ではない現状であり、また現在把握している未指定文化財1,106件に対して、指定文化財は18件にとどまっています。未指定文化財の詳細調査が進んでいない状況で十分な評価、価値づけができていません。文化財の適正な保存を進めていくためには、詳細調査を行ったうえで評価、価値づけを行い、文化財の指定や登録を進めていく必要があります。

⑤重要文化財中家住宅の適正な保存修理が必要

重要文化財中家住宅は、昭和39年（1964）に重要文化財に指定され、現在は本町が所有し、文化財活用の中心施設として常時一般公開を行うとともに各種イベントの開催などを行っています。

これまでに、昭和43年（1968）の解体修理、平成3年（1991）に屋根の葺替え、平成6年（1994）に一般公開のための各種整備工事の大規模改修工事を行ってきました。しかし近年、経年劣化により各所で傷みが目立ってきており、とくに茅葺、瓦葺の屋根の葺替え工事が必要な時期となっていますが、保存活用計画を作成しておらず、事後保全的な対応に追われています。適正な保存修理を実施するためには、計画的、予防保全的な対策が必要です。

⑥文化財の保存修理を進めるため、町による支援が必要

文化財の保存修理を適正に実施するためには、多額の経費が必要となることがあり、そのために修理が進まなかったり、取り壊されたり消滅するものもあります。修理を行いやすくするため、町による財政的、技術的支援が必要です。

⑦文化財を継承していく担い手の確保が必要

人口減少や少子高齢化の中で、文化財所有者等の後継者も不足している現状であり、所有者等の保存・活用に係る負担が増大していくこととなり、文化財の滅失や流出という危機につながる可能性があります。文化財継承の担い手を確保していく必要があります。

⑧多様化する災害等のリスクから文化財を守る環境整備が必要

多様化する災害等のリスクから文化財を守るため、それぞれの防災、防犯対策の現状を把握し、ハード、ソフトの両面から実効性のある対策を講じるための環境整備が必要です。

（２）「歴史文化を活用する」に関する課題

①活用推進のため、関係団体との連携が必要

文化財を活用したまちづくりを進めていくためには、行政、所有者等による取組みに加え、観光や商工などの関係団体との連携による多方面にわたる取組みが必要です。

②文化財に関する情報発信の強化が必要

本計画作成のために行ったアンケート調査では、「文化財に興味・関心がありますか」との問いに、「ない」、「どちらかと言えない」と回答の方が合わせて13%ありました。そのうち、「興味・関心がないのはなぜか」との問いには、「どんなものがあるかわからない」という回答が多く、また興味関心がある方も含めて「文化財保存・活用のために町はどのようなことをすべきか」との問いには、「文化財に関する情報発信」をあげる方が多数を占めました。

町内の指定文化財については、ホームページで情報発信をしています。未指定文化財の情

報については十分ではありません。また屋外に所在する指定文化財の説明看板等が十分に整備されていないところがいくつかみられます。また合わせて、あらゆる場面で情報が得られるようにICTの活用などによる発信の強化が必要です。

③学校教育の場との文化財情報の共有強化が必要

初めて郷土の文化財等を学ぶ小学生に対して、重要文化財中家住宅や熊取交流センターにおいて社会見学の受け入れを行っていますが、さらなる活用を図っていくために文化財の情報について学校との情報共有を強化することが必要です。

④文化財に触れる、学ぶ機会の充実が必要

広く住民に文化財に対する関心を高め、意識向上を図っていくためには、実際の文化財に触れ、学ぶ機会が必要不可欠です。これまでも熊取交流センターの展示スペースを活かし展示等を実施していますが、さらに機会の増加や内容の充実、地域や関連団体等との連携、デジタル技術の活用などあらゆる方法で積極的に取り組んでいくことが必要です。

(3)「歴史文化を継承する仕組みをつくる」に関する課題

①所有者、行政、地域が連携した取組みが必要

文化財の保存・活用のための人材が減少しており、今までどおり地域や所有者等だけで継承していくことが難しくなっています。

地域総がかりで文化財の保存・活用を進めていくためには、所有者だけではなく、行政、地域等が連携しながら、主体となっていく必要がありますが、所有者、行政、地域等との連携による体制は十分に整っていません。

②庁内関係部局の連携強化が必要

地域や所有者等による保存、活用を担う人材が不足していく中で、行政が主導して取組みを進めていく必要がありますが、庁内関係部局間の連携体制が十分ではありません。連携を強化し、推進体制を構築していく必要があります。

③継続した専門職員の配置による推進体制が必要

多種多様な文化財を保存し、活用を進めていくためには、文化財部局をはじめ、関連する部局における専門職員を継続して配置していくことが必要不可欠です。専門職員の配置による体制を築くことで文化財情報やノウハウの確実な継承が可能となります。

また専門職員は当然ながらそれ以外の担当職員についても文化財に関する知識のアップデートなどが不可欠です。各種研修会の開催や専門研修の受講などにより資質向上の取組みを進めます。

2. 文化財の保存・活用に関する方針

前章で設定した将来像や方向性を実現していくために、前節で抽出した文化財の保存と活用に関する主な課題に対して、以下のとおり方針を示します。

また前節で見出した課題は多岐にわたり、問題が多く残されていることが浮き彫りとなった状況でこれらすべてをこの計画期間において確実に進めていくためには、効率的に優先順位を定めて取り組む必要があります。

そこで、特に優先して、重点的に取り組むものについては、【重点方針】と位置づけることとします。

(1)「歴史文化を守り伝える」に関する方針

①把握できていない文化財の確認調査の実施 【重点方針】

今後の文化財の保存・活用を計画的かつ確実に進めていくために、また、文化財を活かした、まちづくりや地域活性化を図っていくためには、まず文化財の状況を把握することが必要不可欠であることから、最優先事項として、町内の文化財を把握するため、第4章でまとめた把握できていない分野の文化財について計画的に確認調査を進めます。

また、これまでどおり開発等に基づく埋蔵文化財の発掘調査を継続して実施し、埋蔵文化財の記録保存を行います。

なお本計画では、「関連文化財群」、「文化財保存活用区域」の設定は行っていません。これは、総合的な文化財把握調査を実施し、データを蓄積したうえで設定できるものと考えています。そして「関連文化財群」や「文化財保存活用区域」を設定することは、本町における文化財の保存・活用を戦略的に推し進めていくことができるものです。

本計画において、まず文化財の状況を把握することで、「関連文化財群」や「文化財保存活用区域」の設定を見出すことができれば、次期計画において設定する、もしくは、早期に実現すれば本計画の見直しを行うことを想定します。

②文化財管理の作成 【重点方針】

文化財情報のデータをデジタル化を図り、調査成果や文化財の情報を一元的に適正に保存、管理するとともに公開するなどの活用を行います。

③文化財の保管場所の整理による適正な管理

管理システムを活用し、本町が所有や保管している文化財資料などの保管場所を整理し、適正な管理を行います。

④未指定文化財の詳細調査による適正な評価、価値づけ

把握した文化財の詳細調査や研究を進め、その適正な評価、価値づけを行います。

また明らかになった価値に応じて、文化財の指定、登録などの保存措置を進めます。

⑤重要文化財中家住宅の保存修理の推進 【重点方針】

本町が所有、管理している重要文化財中家住宅は経年劣化等により茅葺屋根の葺替えなどの保存修理が必要な時期となっています。保存修理にあたっては、一般公開を行っている施設であることに鑑み、安全安心のための耐震診断・改修の是非も検討する必要があるなど、大規模かつ長期間の事業になることが想定されるため、中家住宅の保存活用計画を作成するなど計画的に進め、財源については、国の文化財補助金等を活用して保存修理の取組みを進めます。

⑥文化財の所有者、管理者への財政的、技術的支援

文化財の価値を将来にわたり維持していくため、所有者、管理者による保存修理の実施にあたり財政的、技術的な支援を行います。

また、保存修理の財源確保のために国等の支援制度を活用するとともに、クラウドファンディングなどの独自に財源を確保する手法の検討を進めます。

⑦文化財の担い手を確保するための環境整備

文化財を継承していく担い手を確保するために相談窓口の設置や地域との連携強化、人材の育成を進めます。

⑧防災・防犯のための環境整備

文化財を災害や犯罪等から守るため、所有者等との情報共有を図り、現状の防災、防犯体制を把握し、マニュアルの作成や防災訓練の実施などの支援を行います。

また盗難や災害が発生した際に速やかに対応が行えるよう、事前に関係団体等の連携構築を図ります。

なお、これらを進めるにあたっては、『国宝・重要文化財（建造物）等の防火対策ガイドライン』『国宝・重要文化財（美術工芸品）を保管する博物館等の防火対策ガイドライン』を参考にしながら進めていきます。

（２）「歴史文化を活用する」に関する方針

①観光・商工関係団体との連携強化

文化財を活用した取組みを充実させるため、くまとりにぎわい観光協会、熊取町商工会などの関係団体との連携を深め、新たなコンテンツの創造や持続可能な取組みの検討を進めます。

②ＩＣＴの活用などによる情報発信の強化 【重点方針】

文化財情報の発信を強化するため文化財等の記録のデジタル化を進めるとともに、屋外に所在する文化財の説明看板の設置や場所・時間を選ばず文化財の情報が得られるＩＣＴを活用した情報発信の強化を行います。

③学校教育の場との連携強化

学校教育の場での文化財の活用を推進するため、見学可能な文化財や貸出し可能な資料の再整理を行い児童、生徒、教員が利用しやすいように文化財の情報を整理し情報共有を図るなど、学校との連携強化を図ります。

④実物の文化財を活用した取組みの充実 【重点方針】

文化財の保存・活用を地域総ぐるみで取り組むためには、住民が熊取の歴史や文化財をより深く理解し、拠り所とし、熊取に対する愛着心、郷土愛を育んでもらうことが重要です。そのために観光部局等と連携しながら、様々な文化財について、あらゆる世代が地域の文化財に触れ、その価値や魅力を体感し、知ってもらい、学ぶことのできる展示や講座の開催や、場所・時間を選ばず学習ができるデジタル技術を活用したコンテンツの提供など学習機会の充実を図ります。

（３）「歴史文化を継承する仕組みをつくる」に関する方針

①所有者、行政、地域との連携体制の構築 【重点方針】

指定文化財の所有者等と行政と間で情報の共有や保存・活用の取組み内容の協議などを行うことができるように連携体制の構築を図ります。

また文化財活動団体による取組みの支援と文化財の調査や事業を担う組織、人材の育成を図ります。

②庁内関係部局の連携強化

庁内関係部局による情報共有や協働での取組みを進めるために、連絡会議の設置などの連携強化を図ります。

③庁内推進体制の持続と向上 【重点方針】

様々な文化財の保存・活用に関する課題に対応するためには、文化財保護部局のみならず、庁内関係部局や地域、所有者、関係団体が連携して、地域総ぐるみで取り組んでいく必要があります。

地域総ぐるみで取組みを進めていくために、まず文化財保護部局において継続して専門職員を配置しリーダーシップを発揮して進めていくことが前提条件となります。この専門職員を中心に庁内関係部局、地域、所有者、関係団体との連携を進め、文化財保存・活用の取組みを推進する仕組みを構築し、体制の強化を図っていきます。

また合わせてこの計画を推進していく職員の資質向上を図ります。

第7章 文化財の保存・活用に関する事業

第6章において設定した方針に基づいて、本計画期間内に、以下の事業を実施します。事業ごとに実施期間〔前期（令和9年度～11年度）、中期（令和12年度～15年度）、後期（令和16年度～18年度）〕及び取組主体（地域（住民、自治会）、所有者、専門家（専門機関、大学、博物館など）、関係団体（文化財の保存・活用に取組む団体）、行政（庁内各部局）の5つに分類し、主体的に取り組むものは◎で示す）を整理し、前章で重点方針に掲げたものについては、重点事業として位置づけます。

また事業の実施にあたっては、町費に限らず、府費や国の補助金（文化財補助金、地域未来交付金など）、民間資金等を活用して取り組みます

1. 「歴史文化を守り伝える」に関する事業

表8「歴史文化を守り伝える」実施計画

「実施期間」の●●●●●：条件が整えば実施する期間

方針	事業	事業の内容	実施期間			事業主体
			前期 R9～11	中期 R12～15	後期 R16～18	
①	1-1 重点事業 文化財確認調査の実施	美術工芸品などの把握できていない分野の文化財の確認調査を行う	●	●	●	◎行政 ◎専門家、地域
	1-2 埋蔵文化財の発掘調査の実施	開発工事等に対し適正な指導を行うとともに埋蔵文化財発掘調査等を実施する	●	●	●	◎行政 ◎専門家
②	1-3 重点事業 調査成果のデータベース化	【新規】これまでに調査を行った成果のデータベースを整備する	●			◎行政 ◎専門家
③	1-4 収集資料の整理	本町が所有、保管している文化財資料の保管場所を整理し、適正な管理を行う		●	●	◎行政 ◎専門家
④	1-5 確認調査の成果に基づく詳細調査の実施	確認調査の成果等に基づき、文化財指定や登録に向けた詳細調査を実施する	●	●	●	◎行政 ◎専門家
	1-6 歴史的建造物の詳細調査の実施	令和5年度に実施した確認調査の成果に基づき詳細調査を実施する	●	●	●	◎行政 ◎専門家、所有者
	1-7 熊取町文化財保護審議会の開催	熊取町文化財保護審議会による未指定文化財の適正な評価、価値づけを行い、文化財指定・登録を進める	●	●	●	◎行政 ◎専門家、所有者
⑤	1-8 重点事業 重要文化財中家住宅の保存修理の推進	【新規】建物等の耐震診断並びに保存修理を実施し、安心・安全な一般公開事業を行う（国宝重要文化財建造物保存修理強化対策事業）		●	●	◎行政 ◎専門家
	1-9 重要文化財中家住宅保存活用計画の作成	【新規】保存活用計画を作成し、計画的な保存修理を進める（重要文化財建造物公開活用事業）	●	●	●	◎行政 ◎専門家
⑥	1-10 指定文化財等の保存修理への補助	町内の指定文化財等を適切に保存するため、所有者等が行う保存修理に対し助成を行う	●	●	●	◎行政
	1-11 だんじり祭りの用具修理への支援	本町の伝統文化であるだんじり祭りに使用される用具の修理に対し、技術的支援を行う	●	●	●	◎行政
	1-12 保存活用のための財源確保の推進	国の支援制度を活用するとともに、クラウドファンディングなどの手法を検討する	●	●	●	◎行政、◎専門家 所有者
⑦	1-13 相談窓口の整備	保存、管理が困難となった所有者等からの相談窓口を整備する	●	●	●	◎行政 ◎専門家、地域
	1-14 地域連携による情報収集と支援	文化財の情報の早期入手のため地域や関係団体との連携を深め、協働して対策にあたる	●	●	●	◎行政 所有者、地域
	1-15 人材育成の推進	観光ボランティアガイド等の観光分野も含め、人材の育成を推進する	●	●	●	◎行政 関係団体
⑧	1-16 定期的な巡回点検の実施	定期的に町内を巡回し、日頃から状況を確認するとともに所有者等との情報共有を図る	●	●	●	◎行政 関係団体、地域
	1-17 連絡体制の構築と防犯・防災マニュアルの作成	【新規】盗難や災害が発生した際の連絡体制を構築するとともに対応マニュアルを整備する	●			◎行政 ◎専門家、所有者
	1-18 防災訓練の実施	所有者や消防署等関係機関と連携し定期的に防災訓練を実施する	●	●	●	◎所有者、行政 地域、関係団体
	1-19 文化財復旧団体との連携構築	災害等発生時に速やかに対応できるよう文化財復旧ができる団体との連携を構築する	●	●	●	◎行政 ◎専門家、所有者

2. 「歴史文化を活用する」に関する事業

表9 「歴史文化を活用する」実施計画

「実施期間」の■■■■■: 条件が整えば実施する期間

方針	事業	事業の内容	実施期間			事業主体
			前期 R9~11	中期 R12~15	後期 R16~18	
①	2-1	観光、商工関連団体との連携の強化				◎行政、専門家 ◎関係団体
②	2-2	重点事業 説明看板等の整備				◎行政 関係団体、所有者
	2-3	熊取駅下にぎわい館との連携による情報発信				◎行政 関係団体
	2-4	ホームページによる情報発信の充実				◎行政 関係団体、専門家
③	2-5	学校教育における郷土学習の支援				◎行政 関係団体
④	2-6	重点事業 熊取交流センターでの展示等の充実				◎行政 関係団体、専門家
	2-7	国史跡土丸・雨山城跡の活用の推進				◎行政 専門家
	2-8	井戸端セミナー（出前講座）の推進				◎行政
	2-9	日本遺産葛城修験の普及啓発				◎行政 関係団体、専門家
	2-10	中家住宅におけるイベントの充実				◎行政 関係団体
	2-11	大宮橋の活用				◎行政 関係団体、専門家
	2-12	古民具の活用の推進				◎行政 専門家、地域
	2-13	古民家などの建造物の活用の検討				◎行政 地域、関係団体

3. 「歴史文化を継承する仕組みをつくる」に関する事業

表10 「歴史文化を継承する仕組みをつくる」実施計画

「実施期間」の■■■■■: 条件が整えば実施する期間

方針	事業	事業の内容	実施期間			事業主体
			前期 R9~11	中期 R12~15	後期 R16~18	
①	3-1	重点事業 文化財所有者連絡会の設置				◎行政 所有者、地域
	3-2	文化財活動団体への支援				◎行政 関係団体、地域
	3-3	文化財の調査・事業等を担う人材の育成				◎行政 関係団体
②	3-4	文化財保存活用連絡会の設置				◎行政 関係団体、専門家
③	3-5	重点事業 文化財専門人材の確保				◎行政
	3-6	広域連携の検討				◎行政
	3-7	職員への研修会実施				◎行政 専門家

第8章 文化財の保存・活用の推進体制

1. 本計画の推進体制

文化財の保存・活用に関する推進体制としては教育委員会生涯学習推進課文化振興グループが担っており、管理職1名、埋蔵文化財担当職員2名、行政職員1名の4名が配置されています。

また教育委員会の附属機関として文化財の保存及び活用に関する重要事項について調査審議を行う熊取町文化財保護審議会を設置しており、また本計画の進捗を検証する組織として、文化財保存活用連絡会を設置します。

本計画で定めた各種事業の推進にあたっては、文化庁、大阪府をはじめとする関係行政機関と情報共有を図るとともに、専門的分野に関する指導助言などの協力を得ながら進めるものとし、観光、まちづくり、防災等を所管する庁内関係部局や関係団体と連携し、施策や情報の共有、調整を進めていくこととします。

表 11 推進体制

本計画推進に関連する組織		主な業務内容
行政 (庁内関係部局)	教育委員会事務局 生涯学習推進課	町史に関すること 文化財の保護に関すること 埋蔵文化財に関すること 熊取交流センターの企画及び運営に関すること 重要文化財中家住宅に関すること
	総合政策部 企画財政経営課	総合計画、実施計画の策定及び見直しに関すること 町政の総合調整に関すること 協働の総合調整に関すること
	総合政策部 自治・防災課	防犯に関すること その他災害に伴う危機管理の総合調整に関すること 消防団に関すること 自治会との連絡調整に関すること
	総合政策部 広報・未来戦略課	シティプロモーションに係る総合的企画、調整及び推進に関すること
	総務部 人事課	職員の定数その他人事計画に関すること 職員の研修及び教養に関すること
	住民部 産業振興課	商工団体との連絡に関すること 観光及び誘客事業に係る総合的企画、調整及び推進に関すること
	都市整備部 まちづくり計画課	都市計画の調査、企画及び立案に関すること
	都市整備部 道路公園課	道路及び里道の管理に関すること 道路橋りょう台帳等の整備に関すること 町有林の管理、設計及び施工ならびに森林の病虫害防除に関すること
	都市整備部 下水道河川課河川農水室	河川、洪水調整池、ため池及び水路の管理に関すること
	教育委員会事務局 学校教育課	学校教育計画に関すること
	熊取図書館	図書館資料の収集、整理及び保存に関すること

本計画推進に関連する組織		主な業務内容
行政 (庁外)	大阪府教育庁 文化財保護課	文化財保護行政に関すること
	大阪府泉佐野警察書	防犯に関すること 埋蔵文化財、銃砲刀剣類の発見届に関すること
	泉州南消防組合 熊取消防署	南泉州地域の3市3町を管轄する一部事務組合。町内唯一の消防署
専門家	熊取町文化財保護審議会	文化財の保存及び活用に関する重要事項について調査審議し、これらの事項について教育委員会に建議する
	熊取町社会教育委員会	社会教育に関する諸計画を立案すること 教育委員会の諮問に応じ、これに対して、意見を述べること
	独立行政法人国立文化財機構 文化財防災センター	文化財の減災、被災した文化財を救援するための体制づくりと技術開発、災害時の救援活動を行う
	大阪観光大学	熊取町内に所在し、観光学部を有しており、熊取町とは地域活性化に関する協定を締結し、様々な連携事業に取り組んでいる
	公益社団法人大阪府建築士会 (ヘリテージ委員会)	当会の社会貢献部門としてヘリテージ委員会を有し、地域の歴史文化遺産の保全・活用に関する活動を行っている
	公益財団法人文化財建造物 保存技術協会	文化財保護法に基づく「建造物修理」「建造物木工」分野の選定保存技術保持団体に認定され、重文等多くの文化財建造物等の保存修理に携わっている
地域	自治会	防犯、防災活動や福祉活動など様々な地域活動を自主的に行う団体
	消防団	町内の5個分団で構成される非常時の消防組織で、郷土を災害から守っている
関係団体 (町内)	くまとりにぎわい観光協会	町の歴史、文化及び産業の特性を活かし、観光を軸とした地域活性化に寄与する事業を行っている 独自に後世に残したい珍しい物や希少なものを「くまとり世間遺産」として認定している
	熊取町商工会	町内の商工業者の経営支援や地域の活性化を図るために様々な事業を行っている
	くまとりドキドキ博物館 実行委員会	熊取町に所在する文化財や史跡等を活用して、魅力ある事業を展開するために組織された団体
	熊取の歴史と文化を学ぶ会	熊取の歴史と文化を自主的に学び、活用事業に取り組む住民団体
	泉州の古文書を読む会	泉州地域の古文書について自主的に学習等を行い、活用事業に取り組む住民団体
	熊取手打ち蕎麦クラブ	熊取と砂場そばにちなんで開催したそば打ち講座の受講生を中心に結成された住民団体
	くまとりわたっ子くらぶ	熊取交流センターの染め工房において、藍染普及と啓発に取り組む住民団体
	熊取地車祭礼運営委員会	明るく、楽しい、事故のない地車祭(試験曳き・曳き出し・宮入行事並びにパレード行事等)の運営を推進するとともに、地車祭の保存と振興を図ることを目的としている
	健康くまとり探検隊	町の健康づくりの中長期指標となる「健康くまとり21」を推進するボランティアグループの1つで文化財等を巡る町内ウォーキングなどの活動を行っている
所有者	歴史遺産の所有者	歴史遺産を管理する所有者として、適切な保存活用に取り組むこと

2. 災害等の発生時の推進体制

台風などの大規模災害発生時には、まずは人命最優先の行動が大前提ですが、その上で歴史遺産に対する被害を把握し、損壊や散逸など被害の拡大を可能な限り防ぐために、表 12 のとおり、各主体が連携して対応にあたります。また被災歴史遺産に対する応急的な措置、二次被害の防止策などについて、大規模災害発生から時系列での各主体は、表 13 の対応を目安として、災害の種類等に応じて取組みを進めます。

表 12 災害発生時の各主体の役割

行政	
熊取町 (生涯学習推進課)	・ 歴史遺産の被害状況を確認し、指定等文化財については大阪府教育庁文化財保護課へ報告する。 ・ 必要に応じて歴史遺産の応急措置、一時避難等の救済措置を講じる。 ・ 所有者に応急的な保護措置等について指導、助言を行う。 ・ 必要に応じて、大阪府等に支援を要請する。 ・ 大規模災害の場合は、大阪府を通じて文化財防災センター等への外部支援（文化財レスキュー・文化財ドクターの派遣）を要請する。
泉州南消防組合 (熊取消防署)	・ 歴史遺産の所有者や管理者と連携のうえ、消火活動等を行う。
所有者	
・ 危険のない範囲で歴史遺産を一時避難させるなどの応急的な保護措置を行う。 ・ 歴史遺産の被害状況を確認し、熊取町へ報告を行う。	
地域（住民）	
・ 歴史遺産に被害が及ぶ可能性または被害を確認した場合は、関係機関等へ連絡を行うとともに、危険のない範囲で可能な限り、歴史遺産の応急的な保護措置の協力を行う。	

表 13 大規模災害発生時の対応

段階	所有者	熊取町
災害発生時	・所有者自身の避難、見学施設等の場合は見学者等の避難誘導 ・危険のない範囲で、歴史遺産の応急的な保護措置 ・安全を確認したうえで、応急的な二次被害の防止措置	・災害対策本部による事務分担や地域防災計画に基づく対応 ・所管施設（文化材施設等）利用者の安全確認、被害状況の把握と二次被害の防止措置 ・歴史遺産の被害状況調査 ・必要に応じて歴史遺産の応急的な保護措置や二次被害の防止措置と所有者等への指導、助言
発生後（2週間）	・歴史遺産の被害状況の確認と被害状況の熊取町への報告 ・被災した指定等文化財の滅失・き損・修理等の届出	・把握した歴史遺産の被害状況を大阪府に報告 ・必要に応じ、大阪府等へ応援要請
発生後（1か月）	・被災した歴史遺産の修復の検討、準備（経費算定）	・修復方法等について文化庁、大阪府、専門家へ相談 ・指定等文化財の場合は修復に向けた財源の調整（補助金の活用）
復興段階	・修復事業の実施（国庫補助等の申請）	・修復事業における所有者、関係機関等との調整

資 料 編

1. 指定等文化財一覧
2. 主な文献一覧（郷土史・町史類）
3. 熊取町歴史年表一覧
4. 文化財の分布状況・文化財等一覧
5. 熊取町文化財保存活用地域計画に係る住民アンケートの集計

1. 指定等文化財一覧

番号	文化財の種類		指定	名 称	員数	年代	所有者	所在地	指定年月日
			登録						
1	有形	建造物	重文	来迎寺本堂	1 棟	鎌倉時代後期	来迎寺	和田	S24. 5. 30
2	有形	建造物	重文	降井家書院 附：屋敷図	1 棟	江戸時代初期	個人	大久保	S27. 3. 29
3	有形	建造物	重文	中家住宅 附：表門・唐門	1 棟	江戸時代初期	熊取町	五門	S39. 5. 29
4	有形	建造物	町指定	旧中林綿布工場汽罐室・受電室・事務所棟 附：ランカシャーボイラー・広幅綿織機・乾板写真	3 棟	昭和 3 年 (1928)	熊取町	五門	H15. 3. 3
5	有形	美術工芸品 (彫刻)	町指定	石造像地蔵菩薩立像 附：乾板写真	1 軀	建武 4 年 (1337)	正福寺座	五月ヶ丘	H9. 3. 5
6	有形	美術工芸品 (考古資料)	町指定	東円寺跡出土軒丸瓦及び 軒平瓦	1 括	平安時代後期	熊取町	五門	H8. 3. 13
7	有形	美術工芸品 (考古資料)	町指定	大久保 E 遺跡出土土器	161 点	古墳時代初期	熊取町	五門	H11. 2. 3
8	有形	美術工芸品 (歴史資料)	町指定	熊取村誌関係資料 熊取郷土調査基本編 乾板写真 郷土資料調査 熊取村志原稿	1 冊 一式 1 冊 1 冊	昭和 11 年 (1936)	熊取町	五門	R5. 2. 10
9	民俗	有形	町指定	伊勢型紙	268 点	江戸時代後期～ 明治時代初期	熊取町	五門	H8. 3. 13
10	民俗	有形	町指定	熊取神踊り用具 附：神踊目録・野田村神踊 記・神踊音頭歌本・御神 踊・乾板写真	3 口	明治 6 年 (1873) うち 1 口に 紀年有	熊取町	五門	H8. 3. 13
11	民俗	有形	町指定	小谷の文政おかげ灯籠	1 基	文政 13 年 (1830)	興蔵寺	小谷	H19. 2. 28
12	記念物	史跡	国指定	日根荘遺跡土丸・雨山城跡		南北朝時代	熊取町 大森神社	野田	H25. 10. 17
13	記念物	史跡	町指定	橋本宗吉電気実験の地 附：乾板写真		江戸時代中期	熊取町	五門	H8. 3. 13
14	記念物	史跡	町指定	旧熊取村道路元標	1 基	昭和 4 年 (1929)	熊取町	野田	R5. 2. 10
15	有形	名勝地	町指定	雨山 附：雨山町石・雨山城碑・ 雨山城碑拓本・乾板写真			熊取町 大森神社 成合区	野田・ 朝代・ 五門	H8. 3. 13
16	有形	植物	府指定	雨山のヤマモモ	1 本		大森神社	野田	H28. 4. 5
17	有形	植物	町指定	降井家のくろがねもち	1 本		個人	大久保	H8. 3. 13
18			日本遺産	降井家住宅			個人	大久保	R6. 6. 20
19	有形	美術工芸品 (歴史資料)	府登録	降井家関係資料	412 点	江戸時代初期～ 明治時代初期	個人	大久保	R8. 3. 24

2. 主な文献一覧（郷土史・町史類）

●郷土史・町史類

番号	書 籍 名 等	編集者・発行者	発行年
1	和泉国村々名所旧跡附(抄)		延宝 9 年 (1681)
2	泉州志	石橋直之	元禄 13 年 (1700)
3	和泉志	関祖衡、並河誠所	享保 21 年 (1736)
4	和泉名所図会	秋里籬島	寛政 8 年 (1796)
5	摂津名所図会	竹原春朝齋	寛政 8 年 (1796)
6	先代考拠略	中盛彬	文化 12 年 (1815)
7	かりそめのひとりごと	中盛彬	文政 2 年 (1819)、 天保年間 (1830~44)
8	葛嶺雜記	三浦茂樹 (智航道人)	嘉永 3 年 (1850)
9	大阪府誌第 5 編	大阪府	明治 36 年 (1898)
10	大阪府全志 巻之五	井上正雄	大正 11 年 (1922)
11	大阪府風水害誌	大阪府	昭和 11 年 (1936)
12	熊取郷土調査基本編	熊取村	昭和 11 年 (1936)
13	阿蘭陀始制エレキテル究理原	橋本曇斎先生百年記念会	昭和 15 年 (1940)
14	福助足袋の 60 年 近世足袋文化史	福助足袋株式会社内 金子 要次郎	昭和 17 年 (1942)
15	泉州産業史 ー明治・大正時代ー	中沢米太郎	昭和 38 年 (1963)
16	実録 関西原子炉物語 熊取に第三の火が灯るまで	門上登史夫／日本輿論社	昭和 39 年 (1964)
17	寛政重修諸家譜 第 16	続群書類従完成会	昭和 40 年 (1965)
18	和泉史料叢書 拾遺泉州志 全	和泉文化研究会	昭和 42 年 (1967)
19	和泉史料叢書 農事調査書	和泉文化研究会	昭和 43 年 (1968)
20	わが家は	根来実	昭和 50 年 (1975)
21	大阪の伝説	大阪府小学校国語科教育研究会	昭和 55 年 (1980)
22	中世民衆生活史の研究	三浦圭一／思文閣	昭和 56 年 (1981)
23	桜が丘のあゆみ	桜が丘自治会地区史編集委 員会	昭和 59 年 (1984)
24	熊取町史紀要第 1 号 家記・先代考拠略	熊取町教育委員会	昭和 60 年 (1985)
25	熊取の歴史	熊取町・熊取町教育委員会	昭和 61 年 (1986)
26	日本歴史地名体系第 28 巻 大阪府の地名	平凡社	昭和 61 年 (1986)
27	泉南の文化財	大阪市立博物館	昭和 62 年 (1987)
28	ふるさとのむかしを尋ねて王子新田	松本喜代治／あすなろ出版	昭和 62 年 (1987)
29	熊取町史紀要第 2 号 中瑞雲斎関係書簡集	熊取町教育委員会	昭和 63 年 (1988)
30	熊取町史史料編 I	熊取町	平成 2 年 (1990)
31	日本の美術第 288 号 民家と町並 近畿	宮本長二郎／至文堂	平成 2 年 (1990)
32	泉州むかし話 第 1 集	阿形賢一／育英社	平成 3 年 (1991)
33	泉州むかし話 第 2 集	阿形賢一／育英社	平成 3 年 (1991)
34	泉州むかし話 関西国際新空港の地 第 3 集	阿形賢一／育英社	平成 3 年 (1991)
35	泉さの界隈の昔話	佐藤憲能／泉佐野ライオン ズクラブ	平成 5 年 (1993)

36	七山探訪 戦後 50 年史 地勢と歴史と文化	月岡志津夫	平成 6 年 (1994)
37	熊取町史史料編Ⅱ	熊取町	平成 7 年 (1995)
38	大阪墓碑人物事典	近松譽文／東方出版	平成 7 年 (1995)
39	日本の歴史を解く 100 人	吉村武彦他／文英堂	平成 7 年 (1995)
40	熊取町史紀要第 3 号 考古学から熊取地域を考える	熊取町教育委員会	平成 8 年 (1996)
41	熊取町史紀要第 4 号 京都大学研究用原子炉の誕生	熊取町教育委員会	平成 8 年 (1996)
42	精神病院の起源	小俣和一郎／太田出版	平成 10 年 (1998)
43	熊取町史本文編	熊取町	平成 12 年 (2000)
44	熊取町史史料編補遺	熊取町	平成 12 年 (2000)
45	大阪の力石	高島慎助／岩田書院	平成 14 年 (2002)
46	幕末国学の諸相	桑原恵／大阪大学出版会	平成 16 年 (2004)
47	爽神堂四百年	爽神堂七山病院	平成 19 年 (2007)
48	みんなでつないだ 100 年の輪 熊取町立中央小学校創立百周年記念誌	熊取町立中央小学校創立百周年記念事業実行委員会	平成 20 年 (2008)
49	泉州の民話 第 5 集	三田弘／泉南歴史民俗資料センター	平成 22 年 (2010)
50	泉州の民話 第 7 集	三田弘／泉南歴史民俗資料センター	平成 23 年 (2011)
51	泉州の民話 第 11 集	三田弘／泉南歴史民俗資料センター	平成 26 年 (2014)

●文化財冊子・パンフレット類

番号	書 籍 名 等	編集者・発行者	発行年
1	熊取町の文化財	熊取町教育委員会	昭和 48 年 (1973)
2	熊取町小字名集	熊取町教育委員会	昭和 48 年 (1973)
3	熊取町雨山踊り	熊取町教育委員会	昭和 49 年 (1974)
4	熊取町の歴史 (1)	熊取町教育委員会	昭和 51 年 (1976)
5	熊取町の植物	熊取町教育委員会	昭和 53 年 (1978)
6	熊取町の民具	熊取町教育委員会	昭和 54 年 (1979)
7	熊取町の方言	熊取町教育委員会	昭和 56 年 (1981)
8	熊取町の石造物	熊取町教育委員会	昭和 56 年 (1981)
9	熊取町の寺院	熊取町教育委員会	昭和 57 年 (1982)
10	熊取町自然かんさつマップ	熊取町・熊取町教育委員会	平成 7 年 (1995)
11	熊取自然調査報告書	熊取町教育委員会	平成 8 年 (1996)
12	町指定文化財	熊取町教育委員会	平成 8 年 (1996)
13	熊取の自然	熊取町・熊取町教育委員会	平成 9 年 (1997)
14	熊取町文化財マップ	財団法人熊取町文化振興財団	平成 23 年 (2011)
15	そば屋の歴史	くまとりドキドキ博物館実行委員会	平成 23 年 (2011)
16	くまとり今昔 ～写真でたどる熊取町のあゆみ～	熊取町町制施行 60 周年記念事業実行委員会	平成 24 年 (2012)
17	国史跡土丸・雨山城跡	くまとりドキドキ博物館実行委員会	平成 26 年 (2014)
18	熊取町教育行政六十年史	熊取町教育行政六十年史編集委員会	平成 26 年 (2014)

●有形文化財（建造物）

番号	書 籍 名 等	編集者・発行者	発行年
1	大阪府の民家	大阪府教育委員会	昭和 34 年（1959）
2	重要文化財来迎寺本堂修理工事報告書	重要文化財来迎寺本堂修理委員会	昭和 35 年（1960）
3	重要文化財中家住宅修理工事報告書	重要文化財中家住宅修理委員会	昭和 43 年（1968）
4	重要文化財降井家書院修理工事報告書	重要文化財降井家書院修理委員会	昭和 52 年（1977）
5	茅葺民家調査報告書 熊取町の古民家	熊取町教育委員会	昭和 62 年（1987）
6	慈照寺表門解体格納工事報告書	熊取町教育委員会	平成 4 年（1992）
7	泉州熊取中林綿布の工場建築調査報告書	熊取町	平成 6 年（1994）
8	泉州・熊取 旧中林綿布工場保存活用調査	財団法人日本ナショナルトラスト	平成 11 年（1999）
9	大阪府近代和風建築総合調査報告書	大阪府教育委員会	平成 12 年（2000）
10	旧中林綿布工場保存活用基本計画書	熊取町教育委員会	平成 13 年（2001）
11	熊取町指定文化財 中林綿布工場旧事務所棟修理工事報告書	熊取町教育委員会	平成 17 年（2005）
12	大阪府近代化遺産（建造物等）総合調査報告書	大阪府教育委員会	平成 19 年（2007）
13	近代化産業遺産群 33 ～近代化産業遺産が紡ぎ出す先人達の物語～	経済産業省	平成 19 年（2007）
14	熊取町歴史的建造物悉皆調査報告書	熊取町教育委員会	令和 6 年（2024）

●有形文化財（美術工芸品「古文書」）

番号	書 籍 名 等	編集者・発行者	発行年
1	和泉国日根郡熊取谷中家文書目録	熊取町教育委員会	昭和 62 年（1987）
2	熊取町古文書集成Ⅰ 七宝山浄見寺文書	泉州の古文書を読む会・財団法人熊取町文化財保存財団	平成 16 年（2004）
3	熊取町古文書集成Ⅱ 貫名菰翁書簡集	泉州の古文書を読む会	平成 27 年（2015）

●民俗文化財（有形の民俗文化財）

番号	書 籍 名 等	編集者・発行者	発行年
1	地車研究 第六輯	地車研究会	昭和 58 年（1983）
2	撰河泉だんぢり談義 ー地車紹介編ー	若松均／第一法規	昭和 59 年（1984）
3	野田地車	野田地車編集委員会	昭和 60 年（1985）
4	小垣内新調地車写真集	小垣内区地車新調委員会	平成 22 年（2010）
5	熊取町小垣内魂曳く男たち	田頭真理子／牧野出版	平成 23 年（2011）
6	小谷地車新調記念誌	小谷地車新調協議会	平成 27 年（2015）
7	大正十年製五門地車誌	五門区地車新調委員会	令和 2 年（2020）
8	令和 2 年製五門地車誌	五門区地車新調委員会	令和 3 年（2021）

●民俗文化財（無形の民俗文化財）

番号	書 籍 名 等	編集者・発行者	発行年
1	大阪府の民俗資料Ⅱ	大阪府教育委員会	昭和 44 年（1969）
2	宮座	大越勝秋／大明堂	昭和 49 年（1974）

3	大阪府民謡 ー民謡緊急調査報告書ー	大阪府教育委員会	平成元年 (1989)
4	熊取の民俗	熊取町教育委員会	平成 13 年 (2001)
5	大阪府の盆踊り	大阪府教育委員会	平成 17 年 (2005)

●記念物 (遺跡「史跡」)

番号	書 籍 名 等	編集者・発行者	発行年
1	成合寺 (近畿自動車道と歌山線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書)	大阪府教育委員会・財団法人大阪文化財センター	昭和 60 年 (1985)
2	歴史の道調査報告書第 1 集 熊野・紀州街道-調査報告篇-	大阪府教育委員会	昭和 62 年 (1987)
3	歴史の道調査報告書第 1 集 熊野・紀州街道-論考篇-	大阪府教育委員会	昭和 62 年 (1987)
4	土丸・雨山城跡 ー日根荘遺跡関連調査報告書-	泉佐野市教育委員会・熊取町教育委員会	平成 24 年 (2012)
5	史跡 日根荘遺跡保存活用計画書	泉佐野市教育委員会・熊取町教育委員会	平成 30 年 (2018)

●埋蔵文化財調査報告書

番号	書 籍 名 等	編集者・発行者	発行年
1	明浄学院短期大学建設予定地内埋蔵文化財分布調査報告書	熊取町教育委員会	昭和 54 年 (1979)
2	東円寺跡発掘調査概要 1	熊取町教育委員会	昭和 61 年 (1986)
3	熊取町遺跡群発掘調査概要報告書 1	熊取町教育委員会	昭和 62 年 (1987)
4	埋蔵文化財分布調査報告書	熊取町教育委員会	昭和 62 年 (1987)
5	東円寺跡発掘調査概要 2 87 年ー 5 区の調査	熊取町教育委員会	昭和 63 年 (1988)
6	熊取町遺跡群発掘調査概要報告書 2	熊取町教育委員会	昭和 63 年 (1988)
7	埋蔵文化財試掘調査報告書	熊取町教育委員会	昭和 63 年 (1988)
8	東円寺跡発掘調査概要 3	熊取町教育委員会	平成元年 (1989)
9	東円寺跡発掘調査概要 4 東円寺跡 88 年ー 4 区の調査	熊取町教育委員会	平成元年 (1989)
10	東円寺跡発掘調査概要 5 東円寺跡 88 年ー 5 区の調査	熊取町教育委員会	平成元年 (1989)
11	熊取町遺跡群発掘調査概要報告書 3	熊取町教育委員会	平成元年 (1989)
12	大久保 D 遺跡発掘調査概要 1 大久保 D 遺跡 88 年ー 1 区の調査	熊取町教育委員会	平成元年 (1989)
13	大浦遺跡発掘調査概要 1 大浦遺跡 89 年ー 1 区の調査	熊取町教育委員会	平成 2 年 (1990)
14	大久保 B 遺跡発掘調査概要 1	熊取町教育委員会	平成 2 年 (1990)
15	熊取町遺跡群発掘調査概要報告書 4	熊取町教育委員会	平成 2 年 (1990)
16	東円寺跡発掘調査概要 6 東円寺跡 89 年ー 4 区・90 年ー 1 区の調査	熊取町教育委員会	平成 3 年 (1991)
17	東円寺跡発掘調査概要 7 東円寺跡 90 年ー 2 区の調査	熊取町教育委員会	平成 3 年 (1991)
18	熊取町遺跡群発掘調査概要報告書 5	熊取町教育委員会	平成 3 年 (1991)
19	熊取町遺跡群発掘調査概要報告書 6	熊取町教育委員会	平成 4 年 (1992)
20	東円寺跡発掘調査概要 8 東円寺跡 92 年ー 1 区の調査	熊取町教育委員会	平成 5 年 (1993)
21	熊取町遺跡群発掘調査概要報告書 7	熊取町教育委員会	平成 5 年 (1993)
22	熊取町遺跡群発掘調査概要報告書 8	熊取町教育委員会	平成 6 年 (1994)
23	中家住宅発掘調査概要 I	熊取町教育委員会	平成 6 年 (1994)
24	熊取町遺跡群発掘調査概要報告書 9	熊取町教育委員会	平成 7 年 (1995)
25	熊取町遺跡群発掘調査概要報告書 10	熊取町教育委員会	平成 8 年 (1996)

26	東円寺跡発掘調査概要 9	熊取町教育委員会	平成 8 年 (1996)
27	中家住宅発掘調査報告 2	熊取町教育委員会	平成 8 年 (1996)
28	熊取町遺跡群発掘調査概要報告書 11	熊取町教育委員会	平成 9 年 (1997)
29	大久保 E 遺跡発掘調査概要報告書 1	熊取町教育委員会	平成 9 年 (1997)
30	紺屋遺跡発掘調査概要 1	熊取町教育委員会	平成 9 年 (1997)
31	熊取町遺跡群発掘調査概要報告書 12	熊取町教育委員会	平成 10 年 (1998)
32	熊取町遺跡群発掘調査概要報告書 13	熊取町教育委員会	平成 11 年 (1999)
33	東円寺跡発掘調査概要報告書 10	熊取町教育委員会	平成 11 年 (1999)
34	熊取町遺跡群発掘調査概要報告書 14	熊取町教育委員会	平成 12 年 (2000)
35	久保城跡発掘調査概要報告書 1	熊取町教育委員会	平成 12 年 (2000)
36	七山東遺跡発掘調査概要報告書 1	熊取町教育委員会	平成 12 年 (2000)
37	熊取町遺跡群発掘調査概要報告書 15	熊取町教育委員会	平成 13 年 (2001)
38	熊取町遺跡群発掘調査概要報告書 16	熊取町教育委員会	平成 14 年 (2002)
39	小垣内西遺跡発掘調査概要報告書 1	熊取町教育委員会	平成 14 年 (2002)
40	久保 A 遺跡発掘調査概要報告書 1	熊取町教育委員会	平成 14 年 (2002)
41	熊取町遺跡群発掘調査概要報告書 17	熊取町教育委員会	平成 15 年 (2003)
42	東円寺跡発掘調査概要報告書 11	熊取町教育委員会	平成 15 年 (2003)
43	大久保 F 遺跡発掘調査概要報告書 1	熊取町教育委員会	平成 15 年 (2003)
44	中家住宅周辺遺跡発掘調査概要報告書 1	熊取町教育委員会	平成 15 年 (2003)
45	熊取町遺跡群発掘調査概要報告書 18	熊取町教育委員会	平成 16 年 (2004)
46	熊取町遺跡群発掘調査概要報告書 19	熊取町教育委員会	平成 17 年 (2005)
47	熊取町遺跡群発掘調査概要報告書 20	熊取町教育委員会	平成 18 年 (2006)
48	大久保 F 遺跡発掘調査概要報告書 1	熊取町教育委員会	平成 18 年 (2006)
49	成合寺遺跡発掘調査概要報告書 1	熊取町教育委員会	平成 18 年 (2006)
50	熊取町遺跡群発掘調査概要報告書 21	熊取町教育委員会	平成 19 年 (2007)
51	熊取町遺跡群発掘調査概要報告書 22	熊取町教育委員会	平成 20 年 (2008)
52	熊取町遺跡群発掘調査概要報告書 23	熊取町教育委員会	平成 21 年 (2009)
53	熊取町遺跡群発掘調査概要報告書 24	熊取町教育委員会	平成 22 年 (2010)
54	野田遺跡 1 ・ 東円寺跡発掘調査報告書 12	熊取町教育委員会	平成 22 年 (2010)
55	熊取町遺跡群発掘調査概要報告書 25	熊取町教育委員会	平成 23 年 (2011)
56	熊取町遺跡群発掘調査概要報告書 26	熊取町教育委員会	平成 25 年 (2013)
57	熊取町遺跡群発掘調査概要報告書 27	熊取町教育委員会	平成 26 年 (2014)
58	熊取町遺跡群発掘調査概要報告書 28	熊取町教育委員会	平成 27 年 (2015)
59	熊取町遺跡群発掘調査概要報告書 29	熊取町教育委員会	平成 28 年 (2016)
60	熊取町遺跡群発掘調査概要報告書 30	熊取町教育委員会	平成 29 年 (2017)
61	東円寺跡発掘調査概要報告書 13	熊取町教育委員会	平成 29 年 (2017)
62	熊取町遺跡群発掘調査概要報告書 31	熊取町教育委員会	平成 30 年 (2018)
63	熊取町遺跡群発掘調査概要報告書 32	熊取町教育委員会	令和元年 (2019)
64	熊取町遺跡群発掘調査概要報告書 33	熊取町教育委員会	令和 2 年 (2020)
65	熊取町遺跡群発掘調査概要報告書 34	熊取町教育委員会	令和 3 年 (2021)

66	熊取町遺跡群発掘調査概要報告書 35	熊取町教育委員会	令和 4 年（2022）
67	熊取町遺跡群発掘調査概要報告書 36	熊取町教育委員会	令和 5 年（2023）
68	熊取町遺跡群発掘調査概要報告書 37	熊取町教育委員会	令和 6 年（2024）
69	熊取町遺跡群発掘調査概要報告書 38	熊取町教育委員会	令和 7 年（2025）
70	東円寺跡発掘調査概要報告書 14	熊取町教育委員会	令和 7 年（2025）
71	中林綿布工場跡発掘調査概要報告書 1	熊取町教育委員会	令和 7 年（2025）
72	熊取町遺跡群発掘調査概要報告書 39	熊取町教育委員会	令和 8 年（2026）

3. 熊取町歴史年表一覧

年号	西暦	記 事
約1万3000年前		東円寺遺跡で有茎尖頭器等の石器が使用される
約 6500 年前		【縄文前期】縄文海進により河内平野が内湾となる この頃から三内丸山遺跡（青森県）で集落が営まれ始める
約 4000 年前		【縄文後期】淡輪遺跡（岬町）、万町北遺跡、仏並遺跡（和泉市）に人が居住する
約 3500 年前		向出遺跡（阪南市）に墓が造られる
前 3 世紀頃		【弥生前期】環濠集落が営まれる。全国的に稲作が普及する
前 1 世紀頃		【弥生中期】銅鐸などの青銅器や鉄器が使用される。四ッ池遺跡（堺市）に集落が営まれる
前 50 年頃		池上曾根遺跡（和泉市・泉大津市）に大型掘立柱建物や井戸が作られる
180 年頃		倭国で大乱が起こる
3 世紀頃		大久保遺跡、成合寺遺跡で石器や土器が使用される
239 年		卑弥呼が魏に使者を送り金印紫綬、銅鏡 100 枚を授かる
3 世紀後～ 4 世紀初頃		【古墳前期】畿内から瀬戸内に古墳が出現する（箸墓古墳等） 大久保E遺跡で大量の土器が使用される
5 世紀頃		【古墳中期】古墳に横穴式石室が採用される。古市古墳群（羽曳野市、藤井寺市）・ 百舌鳥古墳群（堺市）が造営される。陶邑で須恵器の生産が始まる
6 世紀頃		【古墳後期】古墳が小型化し、各地に群集墳が形成される
皇極 4	645	大化の改新が始まる
天武 1	672	壬申の乱が起こる
和銅 3	710	平城宮に遷都する
霊龜 2	716	大鳥・和泉・日根の三郡を河内国より独立させて和泉監を置く
天平 12	740	和泉監を廃止し、再び河内国に合併する
天平宝字 1	757	河内国から和泉国が分立し、和泉国が成立する
延暦 13	794	平安京に遷都する
延暦 23	804	桓武天皇が熊取野に遊獵する
保元 3	1158	後白河院の院政が始まる
建久 3	1192	源頼朝が征夷大將軍となる
天福 2	1234	九条家領日根荘が立荘する。官宣旨に熊取荘が初見する
正和 5	1316	「和泉国日根野荘日根野村荒野開発絵図」の中に、熊取の地名がみられる
嘉暦 4	1329	棟木の墨書から来迎寺本堂（和田）がこの頃建立か
正慶 2 元弘 3	1333	鎌倉幕府が滅亡する
建武 4 延元 2	1337	根来寺が初めて和泉国内に所領をもつ 正福寺廃寺跡の石造地藏菩薩立像（建武地藏）が造られる
貞和 2 正平 1	1346	この頃橋本正高が土丸・雨山城跡を築いたといわれる
永和 5 天授 5	1379	山名氏清が南朝方橋本正高の籠城する土丸・雨山城跡を攻撃、落城する
康暦 2 天授 6	1380	橋本正高が合戦で討死する
応永 31	1424	来迎寺本堂に「応永三一年」と刻まれた鬼瓦が残されている

年号	西暦	記 事
応仁 1	1467	応仁の乱が起こる
文明 11	1479	中左近太郎が黒鳥村安明寺五座から、日根野中嶋十一の麴室座の内の一座頭職に補任される
文明 16	1484	この頃から根来寺の和泉進出が始まる
明応 3	1494	土地売券に成合寺（成合）が初見する
永正 9	1512	根来寺の成真院（「成死坊」）が初見する
天文 22	1553	西方寺（成合）に中左近・西左近等土豪の名を刻んだ宝篋印塔が建立される
天正 1	1573	室町幕府が滅亡する
天正 4	1576	織田信長が石山本願寺を攻める 木津川口の合戦で和泉三十六郷士の多くが戦死する
天正 5	1577	織田信長が根来・雑賀攻めのため和泉に入る
天正 10	1582	本能寺の変が起こる。山崎の戦いで明智光秀が羽柴秀吉に敗れる 成真院盛重によって大森神社が再建される
天正 11	1583	中村一氏が岸和田城へ入城する
天正 12	1584	羽柴秀吉と徳川家康が小牧・長久手で戦う
天正 13	1585	羽柴秀吉が根来・雑賀攻めを開始する。この時、熊取の中左近・西左近・若左近・宗九郎らの土豪は農民を率いて秀吉と戦う 中村一氏に替わり小出秀政が岸和田城へ入城する 成真院盛重が三河浜松において家康と対面し、根来氏となる 野田山東曜寺が兵火で焼失する
文禄 1	1592	野田山東曜寺、東円寺として再建される
文禄 3	1594	文禄検地が浅野長政により和泉国一国規模で実施され、熊取谷は 3,004 石余となる
慶長 4	1599	浄見寺開祖浄仙によって爽神堂（現七山病院）が創立される。爽神堂はわが国最初の精神医療の施設
慶長 5	1600	関ヶ原の戦いが起こり、根来盛重は徳川方として根来衆を率いて参陣する
慶長 20	1615	大坂夏の陣が起こり、根来盛重は徳川方として根来衆を率いて参陣し、この功により和泉国代官として日根郡 29 ヶ村を支配し、熊取谷を知行する 松平康重が小出氏に替わり、岸和田に入封する この頃中家住宅、降井家書院が建てられる
元和 5	1619	松平康重が岸和田 5 万石に移封され、熊取谷が岸和田藩領となる 両中家が郷土代官となって熊取谷 15 ヶ村と泉南 20 ヶ村を治める 根来盛重が幕領代官として大鳥郡・和泉郡・南郡の幕領を支配する
寛永 2	1625	根来盛重に大和国宇智郡 750 石の所領が与えられる
寛永 17	1640	岡部宣勝が松平氏に替わり、岸和田の 6 万石で移封される 中左近、中左太夫が岸和田藩の七人庄屋に任じられる
寛永 18	1641	根来盛重が大坂において死去し、根来家が泉州の幕領支配から離れる
正保 1	1644	大森神社が正保年間に熊取谷の惣社になったと伝えられる
万治 3	1660	大浦村の大池が築造される
寛文 1	1661	岡部行隆襲封の際、弟 2 人に 7,000 石を分封し、5 万 3,000 石となる

年号	西暦	記 事
寛文 2	1662	岸和田藩がはじめて藩札を発行する
貞享 2	1685	中左太夫家が藩札の札元となる
貞享 3～	1686	『和泉一国高附名所誌』に熊取谷での木綿の総生産高が 2 割であったことが記される
元禄 2	1689	「堺大絵図」の宿院に中家屋敷が描示される
元禄 5	1692	中左近家が藩札の札元となる
宝永 4	1707	災害史上最大といわれる宝永の大地震が起こる。中盛彬の『かりそめのひとりごと』にも地震の記述がある
享保 3	1718	来迎寺本堂が仏海によって修理される
享保 9	1724	中左太夫家が成合に新池を築く
宝暦 3	1753	法禅寺（大久保）が薬師山へ移転される
明和 6	1769	根来家から両中家との関係について用人が遣わされる
明和 8	1771	永楽池の築造が着工される
天明 1	1781	中盛彬が生まれる
天明 2	1782	来迎寺本堂が悟峰によって修理される
天明 8	1788	根来盛重の 150 回忌法要が大坂・法雲寺で営まれる（両中家が出席する）
寛政 1	1789	岸和田藩において両中家の苗字帯刀が許される
文化 2	1805	中盛彬が岩橋善兵衛に入門する 大久保村のだんじりが製作される（だんじりの初見。年代のわかるものでは最古、現在のものではない）
文化 3	1806	根来家、両中家で『寛政重修諸家譜』の編纂のための調査が始まる
文化 5	1808	根来健次郎（中瑞雲斎）が生まれる
文化 10	1813	熊取谷から岸和田藩主にみかんの献上が開始される
文化 11	1814	根来健次郎が中左近家の養子に迎えらる
文化 12	1815	中盛彬が『先代考拠略』をまとめあげる
文化 13	1816	中盛彬が『かりそめのひとりごと』をこの頃から書き始める 根来健次郎の次姉お千枝が中盛彬に嫁す
文化 14	1817	中左近家の第 1 回根来家知行所預かりが開始される
文政 10	1827	岸和田城天守閣が落雷により焼失する
文政 11	1828	藩の財政改革に伴い、両中家らが中庄屋に任命される
文政 13	1830	小谷の興蔵寺門前におかげ灯籠が建立される
天保 2	1831	中左近家の第 2 回根来家知行所預かりが開始される
天保 8	1837	岸和田藩が大塩の乱に出兵する
天保 10	1839	中盛彬の著書『もつつみはしら』が完成する
天保 12	1841	「熊取谷檀尻書上げ」によるとこの年、熊取には 8 台のだんじりがあった
嘉永 6	1853	吉田松陰が中家を訪問する ペリーが浦賀へ上陸する
安政 5	1858	中盛彬が死去する
文久 3	1863	中瑞雲斎が崇徳帝の旧跡を訪ねる旅に出る
元治 1	1864	中瑞雲斎が熊取を出奔する 熊取に砂糖作りを生業とする 62 人のくり屋と 20 人の仲買人がいた

年号	西暦	記 事
慶応 3	1867	大政奉還がなされる 王政復古の大号令が出される
慶応 4	1868	戊辰戦争が起こる（中瑞雲斎は息子達に従軍を命じる） 五箇条の御誓文が出される 神仏分離令が出される。野田神社と東円寺、大森神社と金剛宝寺は分離され、東円寺と金剛宝寺が廃寺となる 明治政府が崇徳帝の神霊を京都に遷還する（中瑞雲斎が「御用掛」に任命される）
明治 1	1868	明治と改元される
明治 2	1869	横井小楠暗殺事件が起こり、事件に関与した中瑞雲斎が捕らえられる 版籍奉還が行われ、熊取は岸和田藩管轄となる
明治 4	1871	廃藩置県により岸和田藩は、岸和田県となる（11 月、堺県に併合される） 中瑞雲斎が獄死する
明治 5	1872	区制実施により、熊取は堺県（和泉国）第 21 区に属する
明治 7	1874	大区小区制が施行され、熊取は和泉国第 3 大区第 2 小区となる 堺県が小区の下に組合村を編成し、熊取は第 2 小区 8 番組・9 番組になる
明治 10	1877	西南戦争が始まり、熊取からも戦死者、負傷者を出す
明治 14	1881	堺県が廃止され、大阪府へ合併される（熊取も大阪府下となる）
明治 17	1884	連合戸長役場制の施行により、熊取は第 21 戸長役場と第 22 戸長役場管轄区域となる
明治 21	1888	市制・町村制が公布される
明治 22	1889	大日本帝国憲法が発布される 市制・町村制施行により熊取村が成立し原勝造が初代村長に就任する（人口 4,507 人）
明治 27	1894	日清戦争が起こる
明治 28	1895	南海鉄道が創立される
明治 29	1896	南郡と日根郡が合併し、泉南郡が設置される（大阪府泉南郡熊取村）
明治 31	1898	中辰之助が第 5 回総選挙で衆議院議員に初当選する
明治 34	1901	中辰之助が衆議院議員を辞職する
明治 36	1903	南海鉄道の難波一和歌山市間が全通する 熊取裁縫学校が設立される
明治 37	1904	熊取村青年会が結成される 日露戦争が起こる
明治 39	1906	熊取信用購買組合が設置される
明治 40	1907	合名会社泉南織布場・木綿製造工場・宮内織布及び精米工場が設立される
明治 41	1908	村内の小学校を統合して熊取尋常高等小学校が創設される 神社合祀政策により大森神社に熊取中の神社すべてを合祀する 中林綿布工場が設立される
明治 43	1910	熊取郵便局が事業を開始する 帝国在郷軍人会発会式が行われる 朝代・和田に消防組が結成される
明治 44	1911	熊取村消防組が組織される 熊取尋常高等小学校の新校舎が完成する

年号	西暦	記 事
明治 45	1912	中辰之助が第 11 回総選挙に当選し、再び衆議院議員となる 熊取織物株式会社が設立される
大正 3	1914	第一次世界大戦が起こる
大正 5	1916	大雨によって破損した橋梁（大宮橋・休場橋・大橋）の架換工事が行われる
大正 9	1920	第 1 回国勢調査が実施される（人口 5,352 人）
大正 13	1924	政府が熊取村にタバコの栽培を指定する
大正 14	1925	熊取村の織物工場数が 17、従業員数は 859 人となる
大正 15	1926	阪和電気鉄道が設立される 熊取に青年訓練所が創設される
昭和 2	1927	金融恐慌が始まる
昭和 3	1928	五門に中林綿布工場が建設される
昭和 4	1929	阪和電気鉄道の阪和天王寺－和泉府中間が開通する ニューヨーク株式市場が大暴落する 中林孫次郎の寄付により、尋常高等小学校の新講堂が落成する
昭和 5	1930	阪和電気鉄道が和泉府中－阪和東和歌山間に延長され、熊取駅が設置される
昭和 6	1931	大宮橋の渡り初め式が行われる。現存するわが国最初の鉄道用錬鉄製橋梁
昭和 9	1934	室戸台風が襲来し、熊取でも 5 名の重傷者を出す
昭和 10	1935	大豪雨により大きな被害を受ける（町内すべての橋梁が流出）
昭和 11	1936	村誌が完成し、『熊取郷土調査基本編』として刊行される
昭和 15	1940	南海鉄道が阪和電気鉄道を合併吸収し、南海山手線と呼称する
昭和 16	1941	米・英・蘭に宣戦布告する（太平洋戦争の開始） 国民学校令が公布、熊取尋常高等小学校が熊取国民学校に改称される
昭和 18	1943	熊取国民学校正門横にあった二宮尊徳像が供出される
昭和 19	1944	運輸通信省が南海山手線を買収し、国鉄阪和線となる
昭和 20	1945	ポツダム宣言を受け入れ、無条件降伏する
昭和 21	1946	日本国憲法が公布される
昭和 22	1947	戦後第一回の村長・村議会議員選挙が行われる
昭和 24	1949	来迎寺本堂が旧法の国宝（のち重要文化財）に指定される
昭和 25	1950	紀泉鉄道が水間鉄道の新線延長計画として認可される。後、平成 8 年（1996）計画 廃止。 ジェーン台風が襲来する
昭和 26	1951	町制施行により大阪府泉南郡熊取町となり、下中利太郎が初代町長に就任する
昭和 27	1952	降井家書院が重要文化財に指定される 「広報誌」・「町勢要覧」が発行される 泉南地方一帯が集中豪雨（7 月 10 日）に見舞われる 教育委員会が発足する
昭和 28	1953	町営住宅の建設が始まる 貝塚市、泉佐野市との間で単独合併の構想がもちあがる
昭和 29	1954	合併問題（貝塚市、泉佐野市）をめぐる住民投票が行われる
昭和 35	1960	京都大学原子炉実験所の誘致を大阪府に申し入れる

年号	西暦	記 事
昭和 36	1961	第二室戸台風が襲来する
昭和 38	1963	現役場庁舎が完成する 京都大学原子炉実験所が開所する
昭和 39	1964	中家住宅が重要文化財に指定される 国鉄阪和線熊取駅に快速電車が停止する
昭和 43	1968	永楽ダムが完成する
昭和 44	1969	永楽浄水場が完成し、給水が開始される
昭和 45	1970	熊取町公民館・町民会館が完成する 日本万国博覧会が大阪で開幕する
昭和 48	1973	南海くまとりニュータウンの宅地開発がはじまる
昭和 51	1976	清掃工場・斎場が完成する
昭和 52	1977	勤労青少年ホームが開館する。人口が 2 万人を突破する
昭和 59	1984	奥山雨山自然公園が開設する 熊取町商工会が設立される
昭和 60	1985	町史編さん室が開設される 大阪明浄女子短期大学（現大阪観光大学）、関西鍼灸短期大学（現関西医療大学）が開校する
平成 1	1989	大阪体育大学が茨木市より移転、開校する
平成 2	1990	熊取町と粉河町を結ぶ路線バス（紀泉シャトルライン）が開通する
平成 3	1991	熊取駅前広場（夢広場）の供用が開始される
平成 4	1992	環境センターが完成する
平成 5	1993	文化財保護条例が制定される
平成 6	1994	重要文化財中家住宅が町に寄付される 関西国際空港が開港する 熊取図書館が開館する
平成 7	1995	中林綿布工場が町に寄付される。人口が 4 万人を突破する
平成 8	1996	総合体育館（現すまいるズひまわりドーム）が開館する
平成 9	1997	重要文化財中家住宅の一般公開を始める 第 52 回国民体育大会秋季大会（バレーボール競技会「成年女子 1 部 9 人制」）が総合体育館で開催される 熊取駅が橋上駅になる
平成 11	1999	町内循環バスの運行が開始される 総合保健福祉センター（現熊取ふれあいセンター）が開館する
平成 12	2000	長池オアシスが開園する
平成 17	2005	野外活動ふれあい広場が開設する 熊取交流センター（現すまいるズ煉瓦館）が開館する
平成 18	2006	熊取交流センター、第 26 回大阪都市景観建築賞大阪府知事賞を受賞する
平成 19	2007	熊取交流センター、経済産業省の近代化産業遺産に認定される

年号	西暦	記 事
平成 25	2013	泉州南消防組合による消防業務が開始される 教育・子どもセンターが開設する くまとりにぎわい観光協会が設立される 国史跡日根荘遺跡に「土丸・雨山城跡」が追加指定される
平成 27	2015	永楽ゆめの森公園が開設する
平成 30	2018	台風 21 号近畿を縦断、重要文化財中家住宅の表門が倒壊する 「くまとりやもん」ブランド認定制度が創設される
令和 2	2020	和田山 Berry Park が開園する
令和 3	2021	熊取町水道事業が大阪府広域水道企業団に統合される
令和 4	2022	熊取駅西交通広場が供用開始される
令和 6	2024	文化ホール（キテーネホール）、公民館（かむかむプラザ）が開館する



文化財等の分布状況

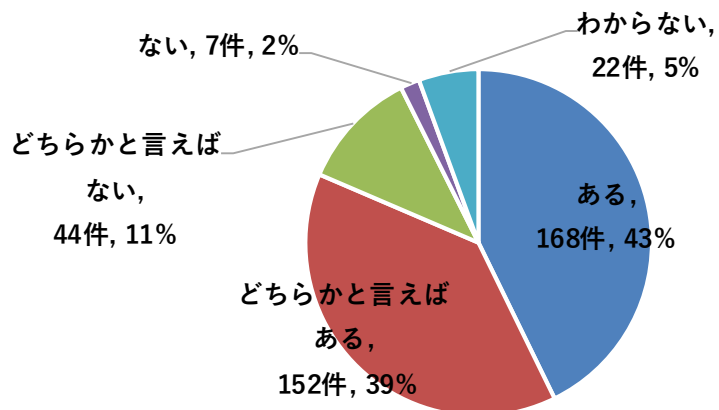
埋蔵文化財包蔵地（黒線で囲った部分）			
	遺 跡 名	種 類	時 代
1	来迎寺遺跡	集落跡	鎌 倉
2	池ノ谷遺跡	散布地	旧 石 器
3	大宮遺跡	散布地	江 戸
4	東円寺跡	寺院跡	平安～室町
5	城ノ下遺跡	城郭跡	室 町
6	成合寺遺跡	墓 地	室 町
7	高蔵寺城跡	城郭跡	室 町
8	土丸・雨山城跡	城郭跡	室 町
9	五門遺跡	散布地	古墳～江戸
10	五門北古墳	古 墳	古 墳
11	五門古墳	古 墳	古 墳
12	大浦中世墓地遺跡	墓 地	室 町
13	久保城跡	城郭跡	鎌 倉
14	山ノ下城跡	城郭跡	鎌 倉
15	大谷池遺跡	散布地	古墳～江戸
16	祭礼御旅所跡	祭礼跡	室 町
17	正法寺跡	寺院跡	鎌 倉
18	小垣内遺跡	寺院跡	江 戸
19	金剛法寺跡	寺院跡	室 町
20	鳥羽殿城跡	城郭跡	室 町
21	墓ノ谷遺跡	寺院跡	室 町
22	花成寺跡	寺院跡	室 町
23	降井家屋敷跡	屋敷跡	室町～江戸
24	大久保A遺跡	散布地	江 戸
25	下高田遺跡	条里跡	鎌 倉
26	大久保B遺跡	集落跡	弥生～江戸
27	紺屋遺跡	散布地	古墳～江戸
28	白地谷遺跡	散布地	室町～江戸
29	大久保C遺跡	散布地	室町～江戸
30	千石堀城跡	城郭跡	室 町
31	口無池遺跡	散布地	平安～江戸
32	大久保D遺跡	散布地	鎌倉～江戸
33	大浦遺跡	散布地	鎌倉～江戸
34	久保A遺跡	散布地	鎌倉～江戸
35	大久保E遺跡	集落跡	弥生～江戸
36	久保B遺跡	集落跡	鎌倉～江戸
37	中家住宅周辺遺跡	集落跡	室町～江戸
38	朝代北遺跡	散布地	鎌倉～室町
39	七山東遺跡	散布地	奈良～室町
40	小垣内西遺跡	集落跡	奈良～室町
41	大久保F遺跡	集落跡	弥生～室町
42	野田遺跡	集落跡	縄文～江戸
43	小垣内中遺跡	集落跡	奈良～室町
44	大浦東遺跡	散布地	奈良～室町
45	中林綿布工場跡	工場跡	明治～昭和

指定等文化財（●で示した部分）		
番号	指定等	名称
1	国指定	重要文化財来迎寺本堂
2	国指定	重要文化財降井家書院
3	国指定	重要文化財中家住宅
4	国指定	史跡日根野荘遺跡土丸・雨山城跡
5	日本遺産	降井家住宅
6	町指定	雨山のヤマモモ
7	町指定	旧中林綿布工場汽罐缶室・受電室・事務所棟
8	町指定	石造地藏菩薩立像
9	町指定	小谷の文政おかげ灯籠
10	町指定	橋本宗吉電気実験の地
11	町指定	旧熊取村道路元標
12	町指定	雨山
13	町指定	降井家のくろがねもち

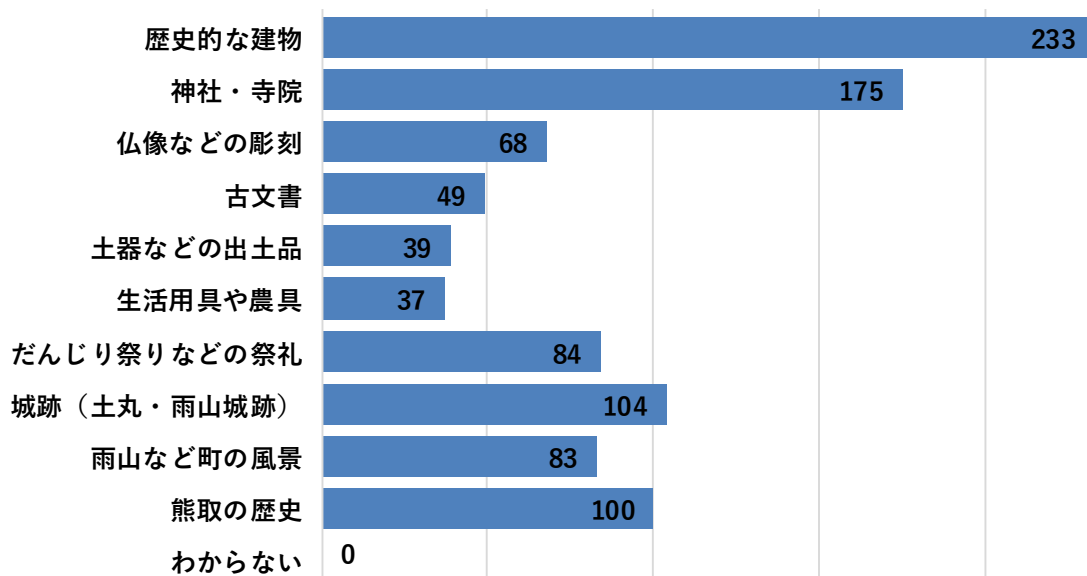
文化財等一覧

5. 熊取町文化財保存活用地域計画に係る住民アンケートの集計

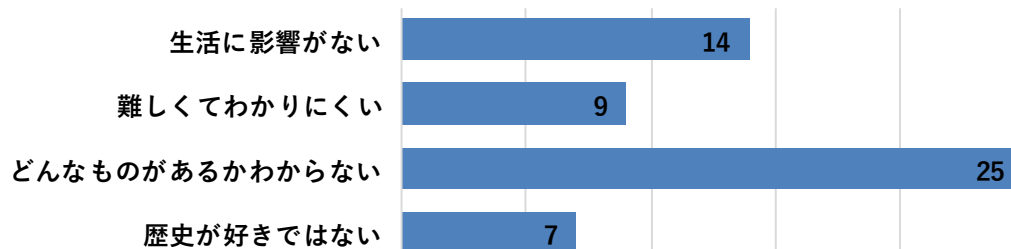
問1. あなたは地域の文化財に興味・関心がありますか？



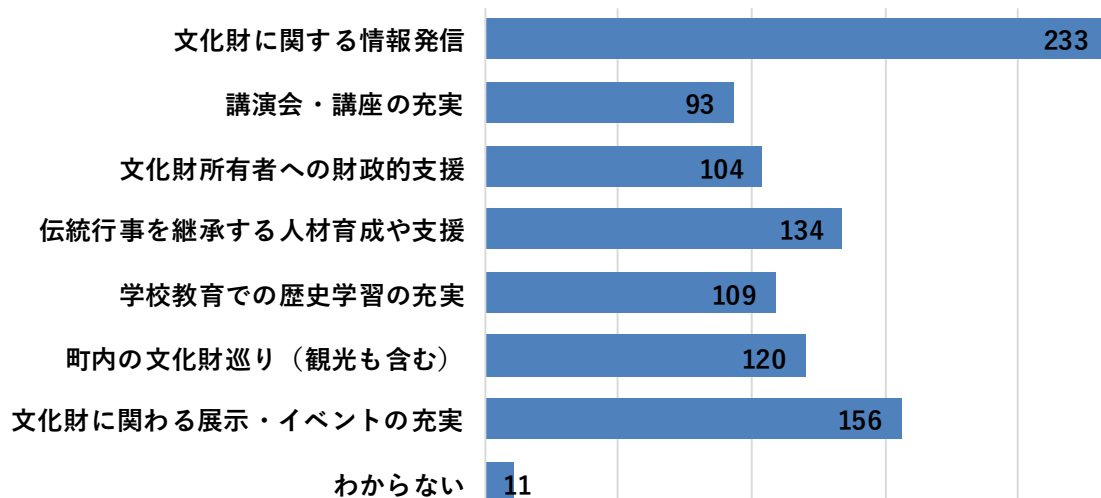
問2. 問1で「ある」「どちらかと言えばある」と回答した方におたずねします。どのような文化財に興味・関心がありますか。（いくつでも）



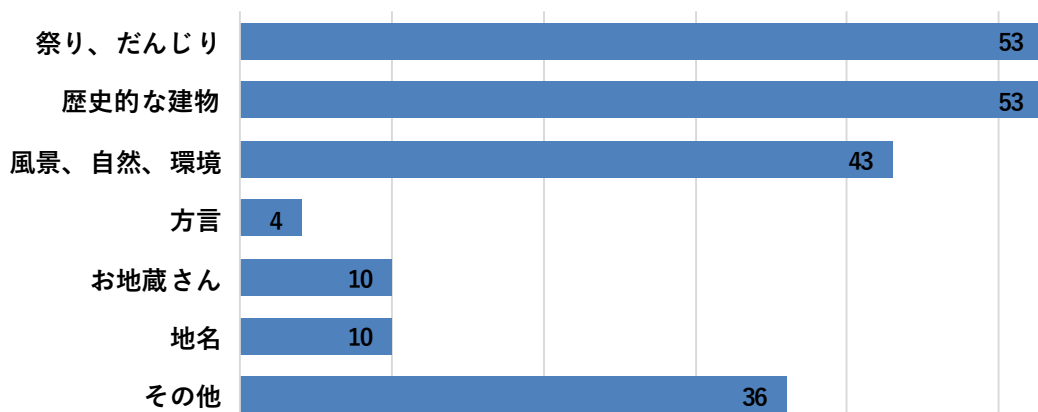
問3. 問1で「ない」「どちらかと言えばない」と回答した方におたずねします。あなたが文化財に興味・関心がないのはなぜですか（いくつでも）



問4. 熊取町の文化財を守り、次世代に継承していくために、町はどのようなことをすべきだと思いますか。（いくつでも）



問5. 未来に残したい熊取の宝物は何ですか（一般）



その他の内容

JR 熊取駅と駅前広場 あえて無いのでは！学術都市を目指せ
 キテネホール ライカライカ（熊取出身の芸人）
 紀泉鉄道鉄道跡、アーチ橋 熊取の子供たち
 熊取町を愛し大切に思う気持ちが年配の方から若者に受けつがれているところ
 中家の「かりそめのひとりごと」や浄見寺の文書 桜などの植物
 私の宝物といえば勉強が続けられる環境、施設、煉瓦館、ひまわりドームなど
 水ナス 昔からの行事 大宮橋 短期留学ミルデューラ
 地域の伝統、風俗、習慣 歴史的樹木、建物 町全体（キテネホール、図書館）
 道の辻に残されている石碑の道標と大宮橋 灌漑用ため池

問5. 未来に残したい熊取の宝物は何ですか（小・中学生）

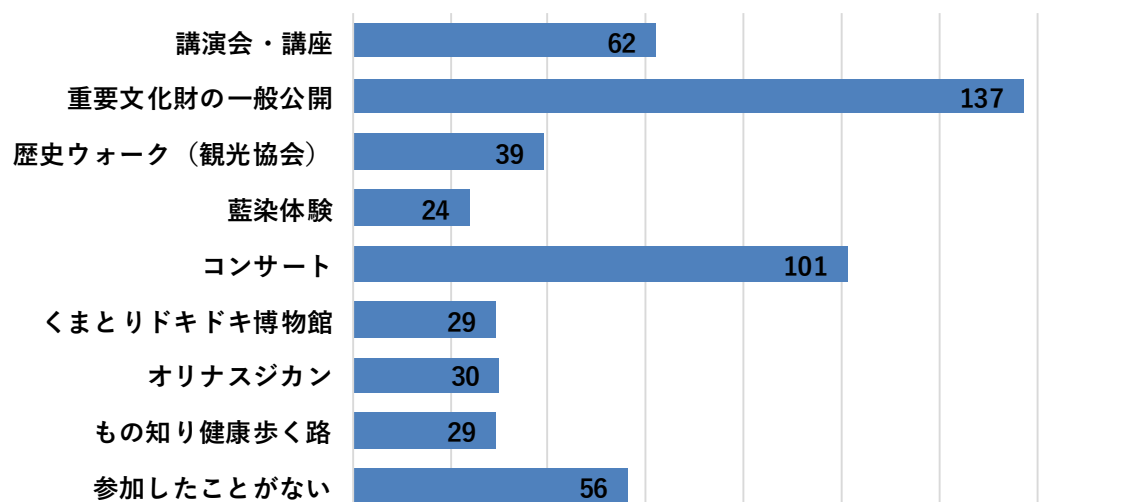
だんじり、お祭り、

煉瓦館、かむかむプラザ、キターネホール、役場、消防署、交番、学校、家、

サンディ・マンダイ（スーパー）

快速が止まること、熊取に住む人たち など

問6. あなたは、町内で開催された文化財等に関係した歴史講座や文化財関連施設の催しに参加したことがありますか。（いくつでも）



問7. 町の文化財等に関する情報をどこで見たり、聞いたりすることが多いですか。（いくつでも）

